

708

16



\* 0009224002 \*

0009224-002

708-16

富山県政史

富山県・編

富山県

第1-2巻

昭11-12

ABI

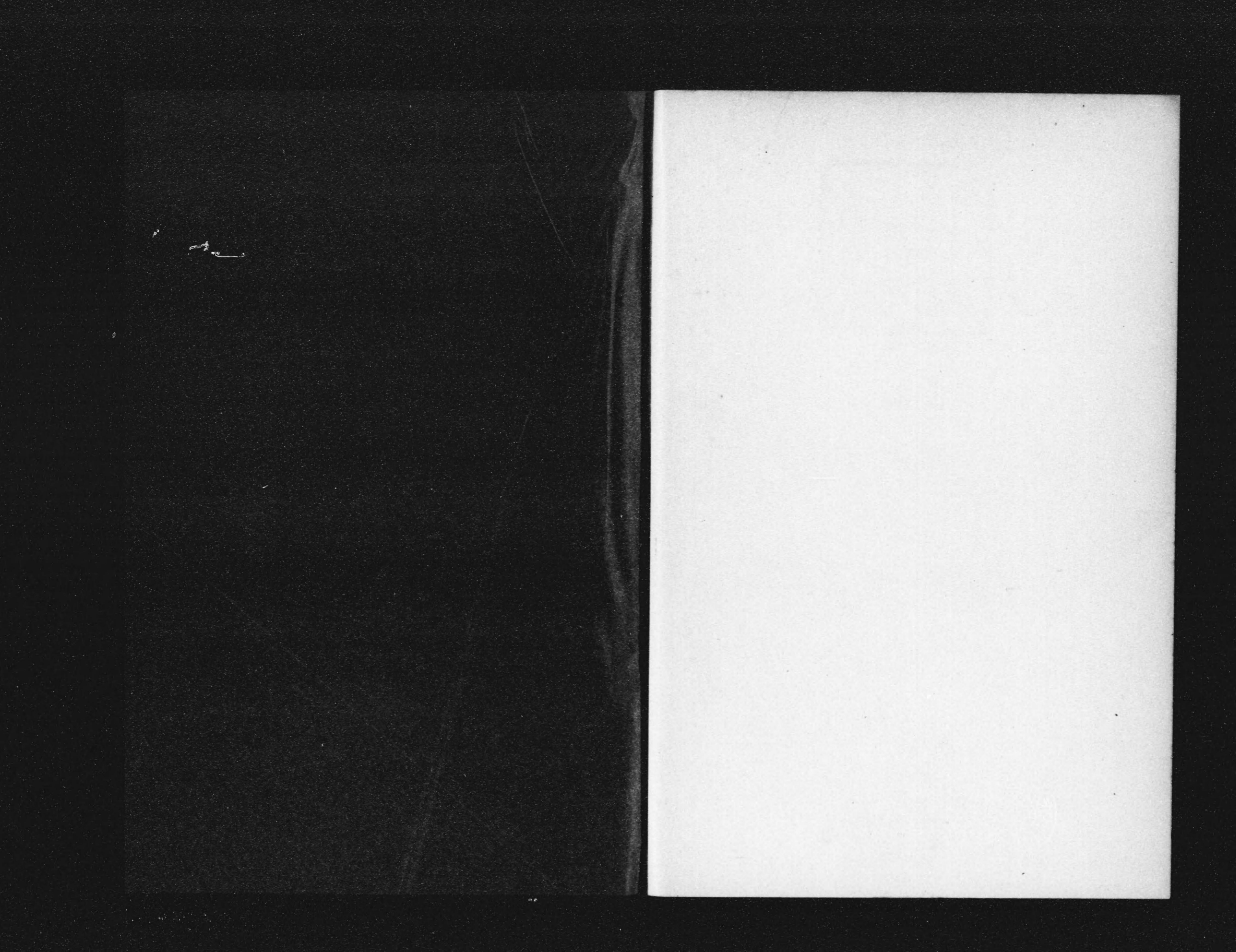




高山城址











富山縣政史

第二卷





## 凡例

- 一、本巻は、富山縣政史の第二巻として、第三篇縣會史(上)を上梓したもので、内容は明治年代を限りとし、次巻には大正昭和年代を収め、以て縣會史の完結を見るものである。
- 一、本巻に於ては、先づ「府縣制度の沿革」の概要を述べ、次に「縣會の組織」を記し、終りに「縣會議事」を每會の順に載せることとした。
- 一、「府縣制度の沿革」は、全國一般のことに屬するを以て、本書の性質上、詳密なる記載を避け、細部は之を省略することとした。
- 一、「縣會の組織」は、直接本縣に關する事實なるを以て、成るべく遺漏なからんことを期し、且閱覽に便せんが爲、議員の選舉、議員、役員、縣會議場を多くは表式に分類、排列した。
- 一、「縣會議事」は縣會開設以來、本縣が石川縣に屬せし四年間は、石川縣會八回を採録し、本縣設置後明治の末までは富山縣會七十七回を登載した。而して其の體裁は石川縣會は資料不足の爲、繁簡一ならず、富山縣會は成るべく一定の様式に據ることとした。
- 一、縣會の記事中、豫算は款に止めて項目に及ばず、又知事の豫算説明は、事の最も重大な

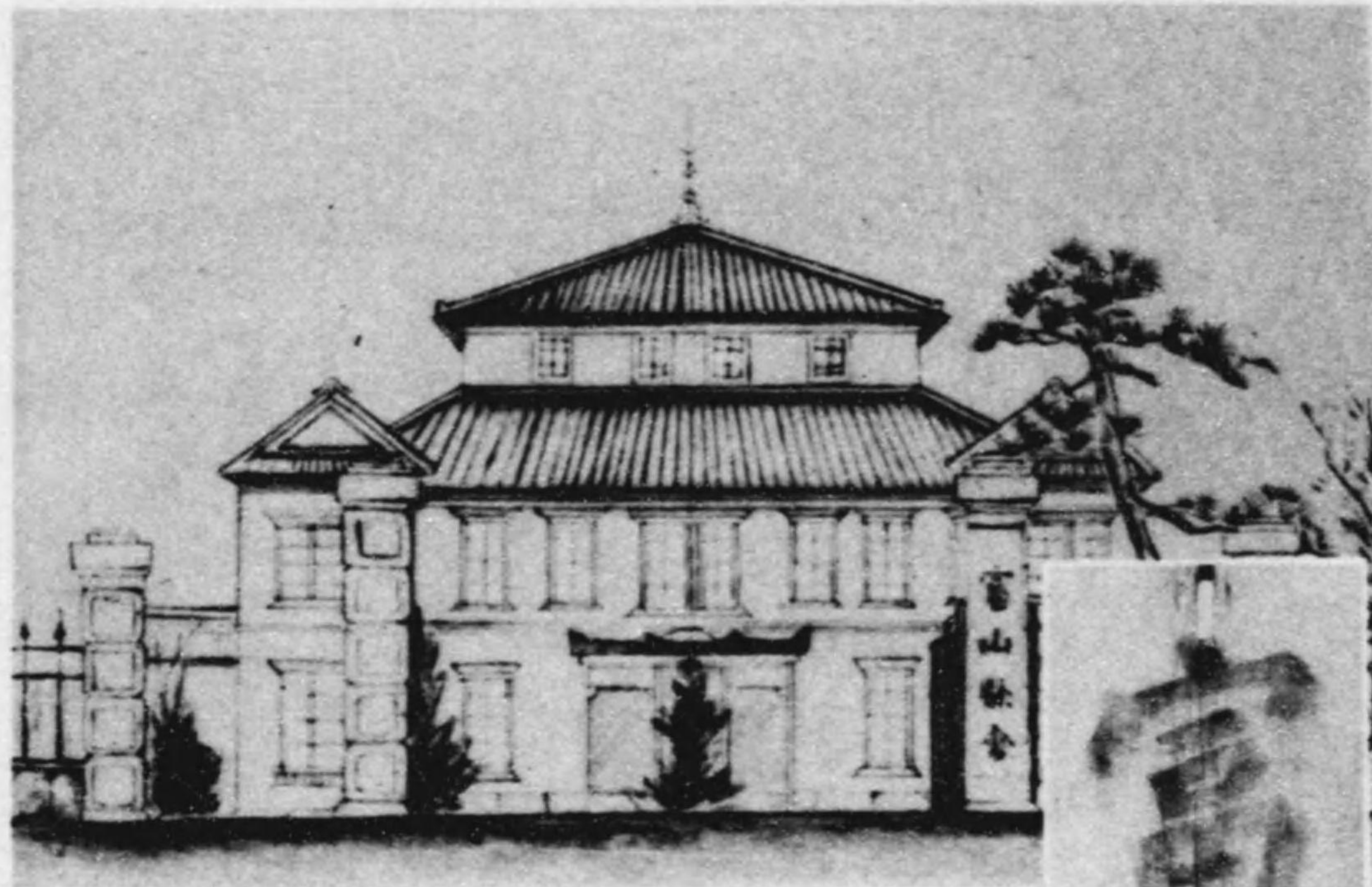


る場合に限り之を採り、他は之を省略した。孰れも書卷の豫定頁數に制限せられし結果である。其の他特殊事項に記したことは新聞の記述より採つたものが多い。

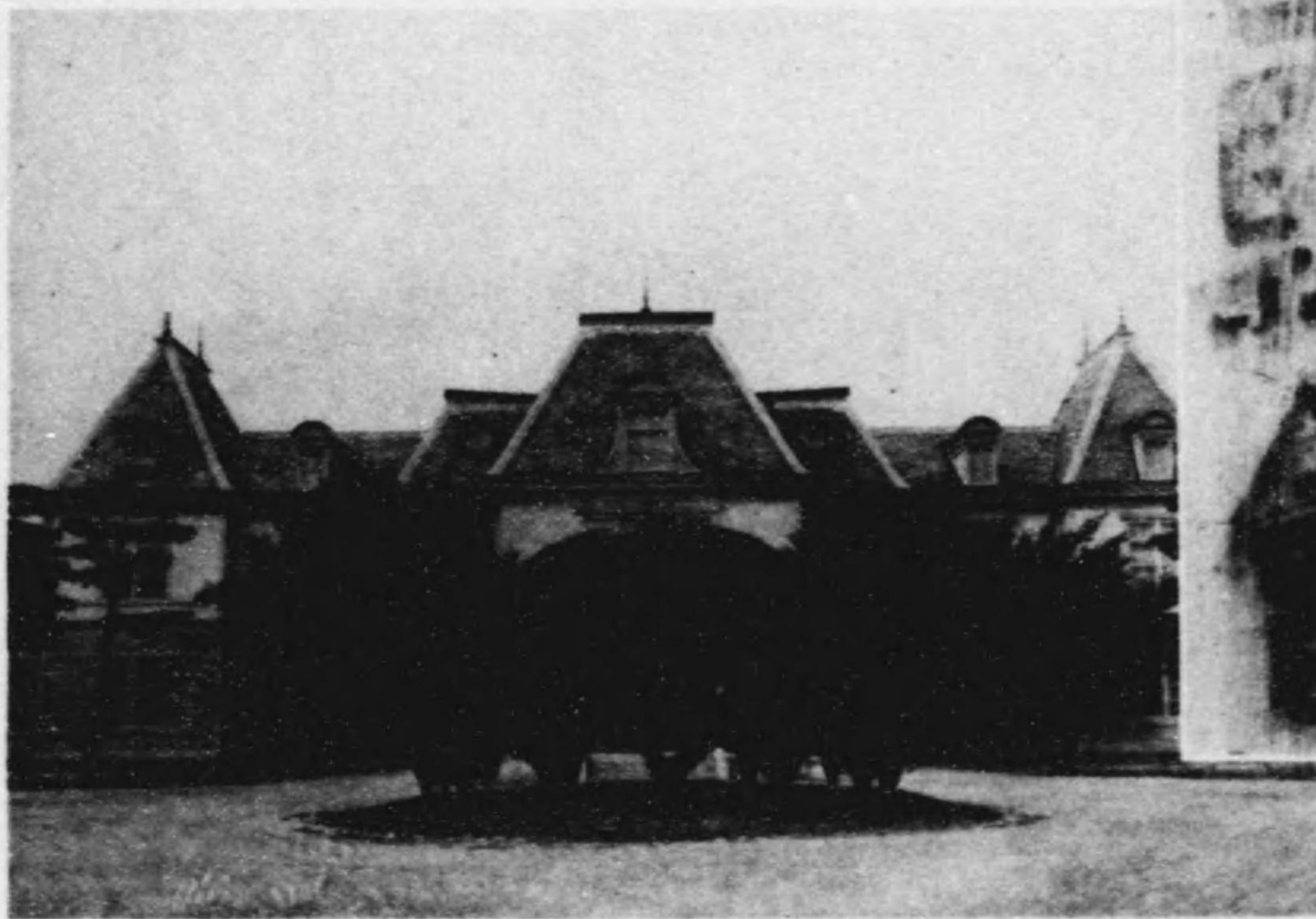
一、本卷に挿入せる議員の寫眞は、明治年代に於ける富山縣會に屬する議員中、一人一回を限り掲載したものである。但議長又は副議長の職に就けるものは、其の當選の時に於て之を掲げ、また議長副議長兩職にありしものは、議長の部に入るゝことゝした。尙議員中堀田周造、伊林久、平數井養作、渡邊正風、澤新吾、市山久造六名の寫眞は遺憾ながら之を得ることができなかつた。

一、本縣廳は前後二回祝融の災に罹り、縣會に關する會議錄、決議錄、其の他の記録は全部焼失せし爲資料の調査に多大の支障を感じたが、幸に各方面に求めて其の幾部を借入れ、また本縣發行の富山縣報若しくは縣内の日刊新聞たる富山日報、北陸政報、北陸タイムス等の記事に依つて大いに便宜を得た。しかし現今新聞の存在するものは、明治二十年代は極めて少く、同十年代に至つては殆ど皆無にして、隨つて其の時代に於ける記事に十分を缺く點あるは遺憾である。

縣會標札



最初の縣會議事堂



前縣會議事堂



# 富山縣政史

## 目次

### 第三篇 縣會史上

第一章 府縣制度の沿革	
第二章 縣會の組織	
第一節 議員の選舉	九頁
第一項 石川縣會時代の選舉	一〇
第二項 置縣以後の選舉	三
第二節 議員	一〇
第一項 石川縣會時代の議員	一〇
第二項 置縣以後の議員	一四
一、府縣會規則に據る議員	一五

目

次

一



一、府縣制に據る議員……………三

三、改正府縣制に據る議員……………三

第三節 役 員……………四

第一項 議長・副議長……………四

第二項 常置委員……………五

第三項 名譽職參事會員(其の一)……………五

第四項 名譽職參事會員(其の二)……………五

第五項 高等官參事會員……………六

第六項 幹事及び事故審査委員……………六

第七項 議事録若しくは會議録の署名議員……………七

第八項 議案説明員議事參與員及び議場係事務……………六

第四節 縣 會 議 場……………二四

第一項 縣會假議場……………二四

第二項 明治二十年工縣會議事堂……………二七

第三項 明治四十年工縣會議事堂……………二七

第三章 縣會議事(明治年代)

第四項 昭和十一年工縣會議事堂……………二九

第一節 縣 會 の 開 閉……………二九

第一項 石川縣會時代の開會……………二九

第二項 置縣以後の開會……………三〇

第二節 府縣會規則に據る石川縣會……………三五

一、明治十二年五月乃石川縣通常縣會……………三五

二、明治十三年五月乃石川縣通常縣會……………三六

三、明治十三年十一月石川縣臨時縣會……………三六

四、明治十四年(未詳)月石川縣臨時縣會……………三六

五、明治十四年五月石川縣通常縣會……………三六

六、明治十五年五月石川縣通常縣會……………三六

七、明治十五年七月乃石川縣繼續通常縣會……………三六

八、明治十六年五月石川縣臨時縣會……………三六

第三節 府縣會規則に據る富山縣會……………三九



一、明治十六年八月臨時縣會……………一八

二、明治十六年九月臨時縣會……………一九

三、明治十六年十月通常縣會……………二〇

四、明治十七年一月臨時縣會……………二一

五、明治十七年三月通常縣會……………二二

六、明治十七年六月<sup>中旬</sup>臨時縣會……………二三

七、明治十七年六月<sup>下旬</sup>臨時縣會……………二四

八、明治十八年三月通常縣會……………二五

九、明治十八年六月臨時縣會……………二六

一〇、明治十八年十二月通常縣會……………二七

一一、明治十八年十二月臨時縣會……………二八

一二、明治十九年十月臨時縣會……………二九

一三、明治十九年十二月通常縣會……………三〇

一四、明治二十年五月臨時縣會……………三一

一五、明治二十年十二月通常縣會……………三二

一六、明治二十一年三月臨時縣會……………三三

一七、明治二十一年十二月通常縣會……………三四

一八、明治二十二年八月臨時縣會……………三五

一九、明治二十二年十二月通常縣會……………三六

二〇、明治二十三年三月臨時縣會……………三七

二一、明治二十三年五月<sup>六月</sup>臨時縣會……………三八

二二、明治二十三年八月臨時縣會……………三九

二三、明治二十三年十一月臨時縣會……………四〇

二四、明治二十三年十二月通常縣會……………四一

二五、明治二十四年二月臨時縣會……………四二

二六、明治二十四年十一月臨時縣會……………四三

二七、明治二十四年十二月通常縣會……………四四

二八、明治二十五年七月臨時縣會……………四五

二九、明治二十五年九月臨時縣會……………四六

三〇、明治二十五年十二月通常縣會……………四七



三一 明治二十六年十月臨時縣會…………… 四三三

三二 明治二十六年十一月通常縣會…………… 四三六

三三 明治二十七年七月臨時縣會…………… 四三七

三四 明治二十七年九月臨時縣會…………… 四三九

三五 明治二十七年十一月通常縣會…………… 四四〇

三六 明治二十八年二月繼續通常縣會…………… 四四一

三七 明治二十八年三月臨時縣會…………… 四四二

三八 明治二十八年十月臨時縣會…………… 四四三

三九 明治二十八年十一月通常縣會…………… 四四四

四〇 明治二十八年十二月臨時縣會…………… 四四五

四一 明治二十九年六月臨時縣會…………… 四四六

第四節 府縣制に據る富山縣會…………… 四四七

四二 明治二十九年九月臨時縣會…………… 四四八

四三 明治二十九年十月臨時縣會…………… 四四九

四四 明治二十九年十一月通常縣會…………… 四五〇

第五節

四五 明治三十年二月臨時縣會…………… 四五三

四六 明治三十年十一月通常縣會…………… 四五五

四七 明治三十一年一月臨時縣會…………… 四五七

四八 明治三十一年九月臨時縣會…………… 五五九

四九 明治三十一年十月臨時縣會…………… 五六〇

五〇 明治三十一年十一月通常縣會…………… 五六二

五一 明治三十二年二月臨時縣會…………… 五六四

第五節 改正府縣制に據る富山縣會…………… 五六五

五二 明治三十二年十月臨時縣會…………… 五六七

五三 明治三十二年十一月臨時縣會…………… 五六九

五四 明治三十二年十一月通常縣會…………… 五七一

五五 明治三十三年一月臨時縣會…………… 五七三

五六 明治三十三年九月臨時縣會…………… 五七五

五七 明治三十三年十一月通常縣會…………… 五七七

五八 明治三十四年十一月通常縣會…………… 五七九



五九 明治三十五年九月臨時縣會…………… 七五

六〇 明治三十五年十一月通常縣會…………… 七九

六一 明治三十六年十月臨時縣會…………… 八四

六二 明治三十六年十一月通常縣會…………… 八〇

六三 明治三十七年十一月通常縣會…………… 八四

六四 明治三十八年十一月通常縣會…………… 八五

六五 明治三十九年十一月通常縣會…………… 八六

六六 明治四十年十月臨時縣會…………… 八九

六七 明治四十年十一月通常縣會…………… 八二

六八 明治四十一年九月臨時縣會…………… 八七

六九 明治四十一年十一月通常縣會…………… 八三

七〇 明治四十二年七月臨時縣會…………… 八三

七一 明治四十二年十一月通常縣會…………… 八六

七二 明治四十三年二月臨時縣會…………… 八三

七三 明治四十三年十一月通常縣會…………… 八六

七四 明治四十三年十二月臨時縣會…………… 八二

七五 明治四十四年八月臨時縣會…………… 八〇

七六 明治四十四年十月臨時縣會…………… 八三

七七 明治四十四年十一月通常縣會…………… 八八

圖畫

- 表紙 立山と海濱
- 前扉 富山城址
- 後扉 黒部峡谷

寫眞

舊縣會議事堂及び明治四十二年以來の標札(口繪)

縣會議長

- 武部尙志 (五〇—五) 南 兵 吉 (同上)
- 米澤紋三郎 (五—五) 島田孝之 (同上)



石坂專之介	(三〇一三)	谷順平	(同上)
堀 二一 作	(六一九)	金岡又左衛門	(同上)
竹脇茂三郎	(七四一)	大矢四郎兵衛	(同上)
上埜安太郎	(八一八)	關野善次郎	(同上)
菅野新作	(六一七)	岡本八平	(同上)
大橋十右衛門	(九一七)	森丘覺平	(同上)
根尾宗四郎	(九一七)	吉田久兵衛	(同上)

縣會副議長

神保東作	(一〇四一〇五)	武部 惟 昌	(同上)
井城與八郎	(一一〇一一)	黑田次郎右衛門	(同上)
石坂嘉一	(一一〇一一)	荒木文平	(同上)
阿部欣次	(一一〇一一)	澤木又八	(同上)
田中清文	(二六一二七)		
野崎源七郎			

縣會議員

水野 忠嗣	(二〇一八)	馬場道久	(三三二)
高田清次郎	(二六一九)	宮崎重治	(五四一)

福村清平	(三六一三七)	中西哲成	(三四一四)
宮崎廣八郎	(四〇一四)	中野 幸 作	(四六一四)
鍋島太郎兵衛	(四六一四)	加藤甚右衛門	(五四一五)
郵澤金廣	(五三一五)	菅野傳右衛門	(六三一六)
石黒準太郎	(六四一六)	赤祖父牛知	(六四一六)
武内清次	(六六一六)	東北善兵衛	(八六一七)
伊東祐賢	(八四一八)	上田又一	(八三一八)
脇坂靜之助	(八〇一八)	武田久作	(八六一八)
沖田正近	(九四一九)	能澤源作	(九六一九)
陸田捨一	(九四一九)		

明治二十縣會議事堂平面圖

(三三一二)

明治四十縣會議事堂平面圖

(三六一三)

昭和十縣會議事堂平面圖(其二)

(三〇一三)

石川縣會議事規則等

(六一一六)

明治十六年富山縣會議事錄

(六一一七)



明治三縣會那會兩議員一覽表 (六六—六七)  
自明治四十年九月縣會議員 (九三—九五)  
至明治四十四年九月縣會議員 (九三—九五)

自明治三十六年九月縣會議員 (八五—八五)  
至明治四十年九月縣會議員 (八五—八五)  
自明治四十四年九月縣會議員 (九八—九九)

# 富山縣政史

## 第三篇 縣會史 上

### 第一章 府縣制度の沿革



明治天皇は明治元年三月五ヶ條の御誓文を公布して其の一に萬機公論の國  
 是を確立し給ひ更に同八年四月詔して立憲政體樹立に關する聖旨を明示し給ふや其の  
 結果、同年元老院の設置越えて六月地方官會議の開設を見るに至つたがこれ等はすべて  
 議會政治に對する豫備的施設と目すべきもので之に次いで起りし府縣會こそは實に市  
 町村會及び帝國議會の先驅を爲した我が國議會政治實施の濫觴と謂ふべきものである。  
 我が國に於て地方行政の一區劃に過ぎなかつた府縣を地方自治團體として認めた根  
 本法は、大略三度の變遷を経てゐる。即ち、(一)府縣會規則、(二)府縣制、(三)改正府縣制こ  
 れである。

府縣制度の  
三變



(一) 府縣會規則は、太政官より明治十一年七月二十二日第十八號布告を以て發布せられ、翌十二年から其の實施を見たが、主として佛國の制度を模範としたものである。之が我が國地方制度の魁を爲すもので、郡區町村編制法地方稅規則と共に、當時の三新法として稱へられた程の英斷的な法制であつた。初め西南戰役の直後、大久保内務卿は地方行政の體系案を樹て、その意見を太政官に提出し、太政官は審議の末これが原案を作成し、地方官會議に附議して公布せられたものである。然れども當時に於ける府縣會の職務權限は甚だ狭少にして、府縣會の一舉一動は細大府知事縣令の認可監督を受け、明治十五年十二月第七號布告を以て、「府縣會議員は會議に關する事項を以て他の府縣會議員と聯合集會し、又は往復通信することを許さず、其集合する者何等の名義を以てするも、府知事縣令に於て、此の禁令を犯す者と認むるときは、直に解散を命ずべし」と定め、また同月第十一號府縣會への達示を以て、「府縣會規則第七條に依り、内務卿に建議する場合に於て、開會中議員自ら其の建議書を携帶上京するを禁ず」と定めたるが如き、いかにその監督方法の嚴重なりしかを知るに足るのである。この府縣會規則の發布後改正の行はれたること七回、即ち明治十二年四月第十三號布告を以て一部を改正し、同十三年四月第十五號布告を以て全部の改正を行ひ、次に同年十一月第四十九號布告(第五章常置委員追加)、同

十四年二月第四號布告、同十五年二月第十號布告、同年十二月第六十八號布告、同十七年十二月第二十八號布告を以てまた一部改正が行はれた。この規則の最後に於ける内容は第一章總則、第二章選舉、第三章議則、第四章閉會、第五章常置委員に分ち、全文四十九條であつた。

(二) 府縣制は明治二十三年五月十七日法律第三十五號を以て公布せられ、同二十九年六月十三日縣告示第二百二十號を以て、同年七月一日から本縣に施行せらるゝことゝなつた。この制度は主として獨逸に範を採つたもので、その特色は複選法を以て議員の選舉を行つたことにある。然るに、この制度は實施後、反對論起り、施行期間最も短くして、廢止せらるゝことゝなつた。この法律の内容は第一章總則、第二章府縣會、第三章府縣參事會吏員及委員、第四章府縣會の會計、第五章監督、第六章附則に分ち、全文九十八條であつた。

(三) 改正府縣制は、明治三十二年三月十五日法律第六十四號を以て發布せられ、同年七月一日から施行せられたものである。この制度は前兩度の制度を斟酌し、我が國情に即して編制せられたもので、公布後一部改正の行はれたこと六回、即ち明治四十一年二月法律第二號(沖繩縣に關する件にて本縣に關係なし)、大正三年三月法律第三十五號(同三年六月勅令第二百二十八號にて同七月一日施行)、同十一年四月法律第五十五號(同年五月勅



令第二百五十五號にて議員選舉に關する規定は次の總選舉より、其の他は同五月十五日施行)、同十五年六月法律第七十三號(同月勅令第二百三號にて議員選舉に關する規定は次の總選舉より、其の他は同七月一日施行)、昭和四年四月法律第五十五號(同年六月勅令第七十九號にて同七月一日施行)、同十年七月法律第四十四號(同月勅令第七十三號にて議員選舉に關する規定は次の總選舉より、其の他は同七月十五日施行)で、以て今日に至つてゐる。この改正中、特に注目すべきは大正十五年法律第七十三號及び昭和四年法律第五十五號である。即ち大正十五年法律第七十三號の改正は、(一)被選舉權選舉權を擴張して普通選舉となし、(二)議員候補者制度選舉運動費用制限の規定を設けた外、(三)府縣參事會より官吏參事會を省き、名譽參事會員の選舉を隔年に行ふこととし、(四)府縣參事會權限より議案審査權を除去した。また昭和四年法律第五十五號の改正は更に一新紀元を劃したもので、(一)府縣會議員に一定制限内の發案權を認め、(二)議員定員の三分の一以上に府縣會招集請求權を認め、(三)所謂原案執行權の範圍を制限し、(四)府縣條例及び府縣規則の制定權を設定し、(五)内務大臣の許可を要する事項を減じ、(六)府縣知事の府縣會停會權、内務大臣の府縣豫算削減權を何れも削減し、(七)府縣會はその權限の一部を府縣知事に委任するを得ることとしたものである。この法律の現今に於

重要なる改正

新舊制度の比較

ける内容は、第一章總則第二章府縣會(第一款組織及選舉第二款職務權限及處務規程)、第三章府縣參事會(第一款組織及選舉第二款職務權限及處務規程)、第四章府縣行政(第一款府縣吏員の組織及任免第二款府縣官吏府縣吏員の職務權限及處務規程第三款給料及給與)、第五章の「府縣の財務(第一款財產營造物及府縣稅第二款歲入出豫算及決算)、第五章の二、府縣組合第六章府縣行政の監督第七章附則に分ち、全文百四十七條、其の他改正毎の附則が附せられてある。

以上は府縣制度の根本法の上に就いて其の沿革の概要を述べたものであるが、尙左に一覽に便せんが爲極めて概括したる新舊府縣制度の比較を表示する。

新舊府縣制度の比較

施行期間	自明治十一年七月二十二日 至同二十九年六月三十日	自明治二十三年五月十七日 至同三十二年六月三十日	自明治三十二年七月一日 至現今
議員選舉	被選舉人ハ拾圓以上、選舉	被選舉人ハ直接國稅拾圓以	被選舉人ハ拾圓以上、選舉 人ハ參圓以上ノ直接國稅ヲ
	府縣會規則 明治十一年七月二十二日 府縣會規則 明治二十三年五月十七日	府縣會規則 明治二十三年五月十七日	改正府縣會規則 明治三十二年三月十五日



納税資格	議員選挙法	議員定数	議員任期	縣會々期	代議機關
人ハ五圓以上ノ地租ヲ納ムルモノ	郡區役所ヘ記名投票ヲ爲シ代人ニ託スルヲ得、明治十二年自ラ投票スベキコトナル	二十二人、郡區ノ大小ニ依リ每郡區ニテ五人以下ヲ選ブ	四年、但シ二年毎ニ半數改選ヲ行フ	通常縣會ハ三十日以内、縣令・知事ハ縣會ノ議決ヲ取リ延長スルヲ得、臨時縣會ニ期限ナシ、明治十六年通常縣會ヲ七日以内トス	明治十三年常置委員ヲ置ク
上ヲ納ムルモノ	匿名投票ヲ以テ郡市會ニ於テ選舉スル複選法ヲ用フ	三十一人、人口ヲ標準トス	同上	通常縣會ハ三十日以内、臨時縣會ハ七日以内トス	縣參事會員ヲ置キ之ニ縣高等官ヲ加フ
納ムルモノトシ、大正十一年被選舉・選舉トモ直接國稅ヲ納ムルモノトナリ大正十五年全然納稅ヲ要セザルコトナル	無記名投票ヲ用キ市町村ヲ投票區トス	三十人乃至三十二人ノ間ヲ上下ス、人口ヲ標準トス	每四年、全部改選	同上、昭和四年通常縣會ニ三日以内ヲ延長スルヲ得ルコト、シテ同十年臨時縣會ヲ七日以内ニ會期ヲ定メ得ルコト、ス	同上、昭和四年縣高等官ヲ除ク

以上述べ來つた三制度の施行を完からしめんが爲の附屬法令及び關係法令がまた數

府縣會規則の附屬法

府縣制の附屬法

府縣制施行令

多公布せられてゐる。今其の主なるものを舉ぐれば、府縣會規則に就いては、(一)明治十一年七月太政官達號外、施行の順序、(二)同十三年九月府縣會心得、(三)同十四年二月第六號布告府縣會は其の議定すべき事件中細目に涉る事項を區町村會若しくは水利土功會の議決に附するを得る件、(四)同十五年十二月府縣會へ達第十一號府縣會開會中議員自ら内務省への建議を禁する件、(五)同月第七號布告府縣會議員は會議に關する事項を以て他の府縣會議員と聯合集會又は往復を許さざる件、(六)同二十二年二月府縣會議員選舉規則、(七)同二十三年五月法律第四十一號府縣會議員の選舉には衆議院議員選舉法規則補則を適用する件等にして、府縣制に就いては明治二十四年六月勅令第五十九號府縣會議員定數規則、改正府縣制に就いては明治三十二年内務省令第十七號府縣會議員配當に關する件を初めとし、近くは大正十五年六月勅令第二百號府縣制施行令(昭和二年三月勅令第三十六號、同四年六月勅令第八十號、同八年十月勅令第二百八十五號、同十年七月勅令第七十三號にて一部改正)發布せられて議員選舉に關する規定は次の總選舉から、其の他の規定は同年七月一日から施行せられた。今同施行令現在の内容を記せば、第一章府縣會議員の選舉、第二章府縣會議員の選舉運動及び其の費用並に公立學校等の設備の使用、第三章府縣出納吏及び府縣吏員の身元保證及び賠償責任、第四章府縣費の分



賦第五章府縣税の賦課徴收第六章府縣の監督第七章市部及び郡部の經濟を分別したる府縣の行政に關する特例第八章島嶼に於ける府縣の行政に關する特例第九章雜則で、外に附則がある。

府縣制施行規則

府縣制施行令と同時に内務省令第十八號府縣制施行規則（昭和五年五月内務省令第二十號、同六年八月内務省令第二十二號、同十年七月内務省令第三十八號にて一部改正）の發布を見たが、その現在の内容は第一章府縣會議員の選舉第二章府縣の財務第三章雜則にて、外に附則數條があり、議員選舉に關する規定は次の總選舉から、其他の規定は昭和二年度分から施行せられた。次に昭和四年六月勅令第百八十三號府縣制等改正經過規程は同年七月一日から施行せられ、更に是等に伴ふ本縣の令規も時々發布せられた。

地方税及び府縣税

次に府縣の制度と密接の關係ある地方税若しくは府縣税の名稱であるが、明治十一年七月府縣會規則と同時に發布せられた太政官布告第十九號地方税規則に於て、「従前府縣税及民費ノ名ヲ以テ徵收セル府縣費、區費ヲ改メ更ニ地方税トシ云々」と達せられ、爾來地方税として稱へ來つたが、明治二十九年七月府縣制施行せらるゝに及んで、地方税の名稱が府縣税と改まつた。

會計年度の變遷

又會計年度は明治初年以來舊慣を以て毎年一月乃至十二月を分界としたものである

が、明治七年十月太政官達番外無號を以て、「金穀出納ノ儀毎歲一月ヨリ十二月迄ヲ以テ分界相立來リ候處更ニ其年七月一日ヨリ翌年六月三十日迄ヲ以テ分界ヲ立テ會計上一週年ト相定候條（中略）來明治八年七月一日ヨリ改正可致此旨相達候事」と達せられ、明治八年から七月乃至六月を分界とすることゝなつた。その後同十七年十月太政官達第八十九號を以て、「明治七年十月達會計年度ヲ改メ明治十九年度以降其ノ年四月一日ヨリ翌年三月三十一日マデヲ以テ會計一週年度トシ豫算取計可申事」と達せられ、明治十九年度から現在の如く四月乃至三月を以て會計年度の分界とすることゝなり、新舊制度に挾まれたる明治十八年度は七月乃至三月の九ヶ月間を會計年度とすることゝなつた。以上は國の經濟に關する規定であるが、府縣に於ける會計年度も明治十一年七月太政官第十九號布告地方税規則以後無論これを準用して以て今日に至つた。

## 第一章 縣會の組織

### 第一節 議員の選舉

府縣に自治制度が布かれ、明治十二年四月我が越中國の住民が始めて縣會議員を選舉

始めて縣會議員を選舉す



し、縣の政治に參與してより昭和十一年末に至るまで、年所を経ること五十七年九ヶ月間、最初の四年一ヶ月間は越中が石川縣の一部たりし關係上、部分的に議員を選挙して、これを石川縣會に出したに止まつたが、其の後の五十三年八ヶ月間は富山縣の設置と共に議員を選挙し、獨立して縣會を組織するに至つた。而して制度の上から之を分てば、前の十七年三ヶ月間は石川縣時代から富山縣の設置後に跨つて、府縣會規則に支配せられ、中の三年間は府縣制に、後の三十七年六ヶ月間は改正府縣制に準據して、その參政權を行つた。其の間二年或は四年毎に行はれた議員選挙の回数、は石川縣時代に四回、富山縣設置後二十回、合せて二十四回、更に選挙の種類に依り之を分てば、總選挙十五回（内縣會解散に依るもの二回）、半數改選九回である。

### 第一項 石川縣會時代の選挙

石川縣會時代に於ける縣會議員の選挙は明治十一年七月第十八號布告を以て新に制定せられた府縣會規則に準據したものである。その規則に依れば、議員は郡區の大小に依り、五人以下宛を選ぶこと、議員を選挙するを得べきものは満二十歳以上の男子にして、其の郡區内に本籍を定め、其の府縣内に於て地租五圓以上を納むる者に限ること、議員た

石川縣會時代の選挙

ることを得べき者は満二十五歳以上の男子にして、其の府縣内に本籍を定め、滿三年以上住居し、其の府縣内に於て地租拾圓以上を納むる者に限ること、選挙人は豫め郡區長より附與したる用紙に自己及び被選人の住所氏名を記し、豫定の日、之を郡區廳に於て投票をなすこと、但し投票は代人に托し、差出すも妨げなきこと、若し議員に缺員を生ずるときは、順次當該郡の次點者を挙げ、點數を有するもの盡くるときは、其の郡に限る選挙會を開かしむる等が主なる規程である。また議員の任期は四年と定め、二年毎に全數の半を改選して、第一回二年期の改選を爲すは、抽籤法を以て其の退任の人を定め、二年毎に半數改選が行はれたが、この半數改選は必ずしも滿二年たるを要せず、通常縣會を二回經過すれば行はるゝことゝなつてゐた。留任したものも此の例で、任期は滿四年でなくて、通常縣會四回を經過すれば任期滿了となるのである。

明治十二年千坂石川縣令は、甲二十三番を以て、議員選挙期日を本年に限り來る四月とする旨布達した。當時越中國は加賀能登兩國及び越前七郡と共に、石川縣に屬し、議員二十二人を選挙して、加賀能登の二十七人、越前七郡の二十人と合せて、議員定數六十九人の石川縣會に参加した。同十四年二月越前七郡は分離して福井縣となりし爲、其の議員二十人を減じ、石川縣會の議員は、四十九人に減じた。斯くして同十六年五月また富山縣を

越前七郡分縣



置かれて、越中國の議員二十二人が退くこととなり、以上四年一ヶ月の間總選舉二回、半數改選二回、合せて四回の選舉が行はれた。

石川縣會に關し、越中國で行つた議員選舉の年月、種別及び區域定數を掲ぐれば左の通りである。

石川縣會議員越中國選舉

年 月	種 別	區 域 及 定 數
明治十二年四月	規則實施ノ爲 總選舉	上新川郡射水郡礪波郡各五人 下新川郡四人 婦負郡三人 計二十二人
同 十三年八月	半數改選	上新川郡四人 下新川郡一人 婦負郡一人 射水郡二人 計八人
同 十五年六月	縣會解散ノ爲 總選舉	上新川郡射水郡礪波郡各五人 下新川郡四人 婦負郡三人 計二十二人
同 十六年四月	半數改選	上新川郡三人 下新川郡二人 射水郡一人 礪波郡四人 計十人

越中國選舉の議員

越中分縣

府縣會規則に據る選舉

府縣制に據る選舉

第二項 置縣以後の選舉

(一) 府縣會規則に據るもの 石川縣から分離して、富山縣の設置せられた後も、府縣會規則は依然として尙舊の如くであつた。隨つて議員の定數も石川縣時代と同じく二十名と定められた。明治二十二年二月法律第六號府縣會議員選舉規則が公布せられて、選舉人は自ら投票を行ふべし、代員に託することを得ずといふことに改められ、選舉に關する罰則も設けられた。しかし記名投票はこれを存して、選舉人は投票用紙に自己の氏名を記して捺印すべき規定であつた。而してこの府縣會規則は明治二十九年六月まで施行せられて、十三年二月間に、總選舉二回、半數改選六回、合せて八回の選舉が行はれた。

(二) 府縣制に據るもの 明治二十三年五月法律第三十五號の府縣制は同二十九年七月一日から本縣に實施せられた。この制度に於て特に顯著なるは従來の單選法を廢して、複選法を採用したること、即ち縣住民をして直接議員を選舉せしめ、市に在つては市會及び市參事會合同し、市長を會長とし、郡に在つては郡會及び郡參事會合同して、郡長を會長とし、會長は投票に加はらずして選舉を行ふものとしたこと、及び記名投票を匿名投票に改めたことであつて、選舉方法は大に改革せられたが、半數改選は尙これを存続した。



議員定数を  
人口に據る

而して被選舉權は府縣内市町村の公民中、選舉權を有し、其の府縣に於て一年以來、直接國稅拾圓以上を納むる者とした。同二十四年六月勅令第五十九號府縣會議員定數規則も同時に施行せられて、人口七十萬迄は議員三十人を以て定數とし、七十萬以上百萬迄は五萬を加ふる毎に一人を増し、百萬以上は七萬を加ふる毎に一人を増すこととし、人口に應じて毎郡市に割當することゝなつた。依つて府縣制施行後の本縣は、議員定數二十二人以上より一躍して三十一人に増員した。しかしこの制度は施行期間僅かに三年、總選舉及び半數改選各一回行つたのみで、明治三十二年六月三十日限り廢止せらるゝことゝなつた。

改正府縣制  
に據る選舉

(三) 改正府縣制に據るもの 明治三十二年三月法律第六十四號改正府縣制は、同年七月一日から本縣に施行せられた。この制は複選法を廢して、單選法としたこと、半數改選を止めて四年毎に總選舉を行ふこととしたこと、府縣内の市町村公民にして、市町村會議員の選舉權を有し、且其の府縣内に於て一年以來直接國稅年額參圓以上を納むる者は選舉權、同上年額拾圓以上を納むる者は被選舉權を有することとしたことが主要點である。これに伴ひて定められた同年五月内務省令第十七號府縣會議員配當に關する件では、各選舉區に於て選舉すべき府縣會議員の數は従前と同標準を以て内閣統計局に於て調査し、官報を以て報告する最近の人口に依ることゝなつた。爾後屢、一部改正が行はれたが、

普通選舉法  
實施國勢調査の  
影響

就中特筆すべきは、大正三年三月法律第三十五號を以て、從來議員の定數を更正する場合には、内務大臣の許可を要したるも、之を要せざることに改正し、尙所謂増員選舉なるものをも改めて、總選舉の場合に於てのみ増員することとした。同十一年四月法律第五十五號を以て府縣内の市町村公民にして、一年以來其の府縣に於て直接國稅を納むる者は府縣會議員の選舉權及び被選舉權を有することに改めて、同十二年九月から選舉有權者の範圍を擴張し、更に同十五年六月法律第七十三號を以て單に府縣内の市町村公民は府縣會議員の選舉權被選舉權を有することとし、昭和二年九月から、この劃期的の普通選舉法が實施せられ、同月勅令第二百號府縣制施行令も、この時施行せられて、府縣會議員の選舉運動及び其の費用並に公立學校等の設備の使用をも新に規定せらるゝことゝなつた。本縣に於ける新制施行後の議員定數は舊の如く三十一人を持続したが、大正四年九月には三十二人に増し、同十二年九月には國勢調査の結果として、三十人に逆轉し、昭和六年九月には三十一人となり、以て現在に至つた。而して其の間定數が同一でも郡市の割當は屢、變更した。この改正府縣制の施行せられて後、昭和十一年末迄三十七年六ヶ月間、本縣には十回の總選舉が行はれた。

置縣以後行はれた總選舉及び半數改選の年月、種別及び區域及び定數を掲ぐれば左の



富山縣會議  
員選舉

府縣會規則  
時代

富山縣會議員選舉

年 月 日	種 別	區 域 及 定 數
明治十六年七月	置縣ノ爲 總選舉	上新川郡射水郡礪波郡各五人 下新川郡四人 婦負郡三人 計二十二一人
明治十七年五月	半數改選	射水郡下新川郡各三人 礪波郡婦負郡各二人 上新川郡一人 計十一一人
明治十八年五月	半數改選	上新川郡四人 下新川郡一人 婦負郡一人 射水郡二人 礪波郡三人 計十一一人
明治二十一年三月	半數改選	上新川郡一人 下新川郡三人 婦負郡二人 射水郡三人 礪波郡二人 計十一一人
明治二十三年三月	半數改選	上新川郡及ビ富山市ノ内元上新川郡ニ屬セシ町村四人 婦負郡及ビ富山市ノ内元婦負郡ニ屬セシ町村一人 下新川郡一人 射水郡及ビ高岡市二人 礪波郡三人 計十一一人

府縣制時代

制 縣 府	規 則
明治二十九年 八月二十八日 (下新川郡九月十二日)	府縣制實施ノ 爲總選舉
明治三十一年 八月二十八日 (中新川郡九月十二日 射水郡九月三十日)	半數改選
明治二十八年一月	縣會解散ノ爲 總選舉
明治二十七年七月	半數改選
明治二十五年七月	半數改選
	上新川郡及ビ富山市ノ内元上新川郡ニ屬セシ町村一人 婦負郡及ビ富山市ノ内元婦負郡ニ屬セシ町村二人 下新川郡三人 射水郡及ビ高岡市三人 礪波郡二人 計十一一人
	上新川郡及ビ富山市ノ内元上新川郡ニ屬セシ町村四人 婦負郡及ビ富山市ノ内元婦負郡ニ屬セシ町村一人 下新川郡一人 射水郡及ビ高岡市二人 礪波郡三人 計十一一人
	上新川郡及ビ富山市ノ内元上新川郡ニ屬セシ町村五人 婦負郡及ビ富山市ノ内元婦負郡ニ屬セシ町村三人 下新川郡四人 射水郡及ビ高岡市五人 礪波郡五人 計二十二一人
	上新川郡三人 中新川郡三人 下新川郡五人 婦負郡三人 射水郡四人 氷見郡二人 東礪波郡四人 西礪波郡四人 富山市二人 高岡市一人 計三十一一人
	上新川郡三人 中新川郡二人 下新川郡一人 婦負郡一人 射水郡四人 東礪波郡一人 西礪波郡二人 富山市二人 計十六一人



改		正		府		縣	
明治三十二年 九月二十五日	改正府縣制實 施ノ爲總選舉	明治三十六年 九月二十五日	總選舉	同上	同上	同上	同上
明治四十年 九月二十五日	總選舉	明治四十四年 九月二十五日	總選舉	同上	同上	同上	同上
大正四年 九月二十五日	總選舉	同上	同上	同上	同上	同上	同上
大正八年 九月二十五日	總選舉	同上	同上	同上	同上	同上	同上
大正十二年 九月二十五日	總選舉	同上	同上	同上	同上	同上	同上

上新川郡三人 中新川郡三人 下新川郡五人 婦負郡三人  
射水郡四人 氷見郡二人 東礪波郡四人 西礪波郡四人  
富山市二人 高岡市一人 計三十一人

同上 但シ富山市二人ヲ三人トシ、計三十二人

上新川郡三人 中新川郡三人 下新川郡四人 婦負郡三人  
射水郡四人 氷見郡二人 東礪波郡四人 西礪波郡四人  
富山市三人 高岡市二人 計三十二人

上新川郡二人 中新川郡三人 下新川郡四人 婦負郡三人  
射水郡四人 氷見郡二人 東礪波郡三人 西礪波郡四人  
富山市三人 高岡市二人 計三十人

制		
昭和二年 九月二十五日	總選舉	上新川郡三人 中新川郡三人 下新川郡四人 婦負郡二人 射水郡四人 氷見郡二人 東礪波郡三人 西礪波郡四人 富山市三人 高岡市二人 計三十人
昭和六年 九月二十五日	總選舉	同上 但シ婦負郡二人ヲ三人トシ、計三十一人
昭和十年 九月二十五日	總選舉	同上

一、本表中、明治二十三年乃至明治二十八年の四回に於ける各郡の日は左の通り。

郡	明治二十三年	明治二十五年	明治二十七年	明治二十八年
上新川郡及富山市ノ内 元上新川郡ニ屬セシ町村 婦負郡及富山市ノ内 元婦負郡ニ屬セシ町村	三月十三日	七月十一日	七月三日	一月二十八日
下新川郡	三月十五日	七月十四日	七月一日	一月二十五日
射水郡及高岡市	三月十五日	七月十一日	七月一日	一月二十八日
礪波郡	三月十三日	七月十四日	七月三日	一月二十五日

一、明治二十九年八月二十八日には下新川郡選舉會不成立の爲、更に九月十二日選舉



一、明治三十一年八月二十八日には中新川射水の兩郡選舉會不成立の爲、更に九月十日選舉を行うたが、射水郡のみは再び選舉會不成立となり、九月三十日また選舉を行うた。

第二節 議員

第一項 石川縣會時代の議員

明治十二年四月石川縣が始めて實施せし府縣會規則に依り、越中から二十二人の議員を選出したが、翌十三年七月半數改選を行ふ爲、抽籤を以て、總議員の半數を退任せしめた。越中選出の議員で、この籤に當つて退任したのは八人にして、翌八月その代員を選舉した。而して同十五年五月縣會解散の爲、全員解任となつて翌六月總選舉が行はれたが、同十六年三月抽籤に依つてまた半數が退任して、四月半數改選行はれ、越中は議員十人を改選した。斯くして同年五月富山縣分縣の爲に越中議員は全部廢職となつたのである。左に越中國選舉の石川縣會議員を掲ぐることにする。

越中選舉の議員

越中國選舉議員（府縣會規則に係るもの）

選		總				任期
二		治		自		郡
明		明		自		
至		(退半)月七年三十治明至				住
明		至				
碓波郡		下新川郡	上新川郡	婦負郡	射水郡	氏
元伏木村 五十里村		舟見村	石割村 神田村	草島村	串岡村	
藤井能三 高島廉太郎		脇坂義平	杉木彌八郎 結城 奎	井城與八郎	鷲山半吾	
高木村 大門新町			森尻新村 滑川大町		三日曾根村	宮林彦九郎
北本栗 河合嘉平			碓井敬治 神保東作			
			三清村 福光村 福野村 中田村			武部尙志 前村俊造 山田正景(中途辭職) 木澤成健
			(以上の内一人は中途辭職) 和泉村 石崎彦多郎 (以上二人は明治一三、三補缺)			



選舉		改數		半		舉	
月八年三十治明自				月四年			
(散解) 月五年五十治							
下新川郡	上新川郡	婦負郡	射水郡	下新川郡	上新川郡	婦負郡	射水郡
沼保村 若入村 栗村	滑川大町 森尻新村	草島村	佛生寺村	入膳村 泊町村	宮路岩崎村 新庄新町村 湯神子村	道場村 下井澤村	加納村 北野村
伊東祐賢 岡與左衛門 西田勝治	神保東作 碓井敬治	井城與八郎	岩間覺平	米澤紋三郎 小澤與三	高山半治 藤田致芳	舟木欣次 吉田貞藏	扇澤權六 折橋介三
中途辭職 補缺、中途辭職 補缺					中途辭職 補缺、中途辭職 補缺	八尾町 橋爪治郎作 (以上三人の内一人は中途辭職一人は補缺)	島村 折橋 二策 (以上三人は明治一三、三、補缺)
	石割村 東芦原村 杉木彌八郎 長瀬喜三治		三日曾根村 宮林彦九郎	佛田村 谷 順平			

選		總	
年五十月治明自			
十治明至		(退半)月三年六十治明至	
婦負郡	射水郡	礪波郡	下新川郡
長澤村 草島村	佛生寺村 下余川村 水戸田村 阿尾田村	田中村	生地村
數井養作 井城與八郎	岩間覺平 金田金三郎 堀宗平 稻垣三郎 尾三郎	得能通孝	田村文平
	明治一五、九死亡 明治一五、九補缺 明治一六、三除名 明治一六、三補缺		泊町村 小澤 篤
松木村 重松覺平	小林村 澤田平策		
			栗山方 馬場 道久 石坂專之介 宮崎重治
			東岩瀬宿方 滑川大町 神保東作
			三清村 武部 堅 古上野村 朝倉幾三郎 荒木六平 島田孝之
			明治一五、八辭職 明治一六、三補缺
			内島村 五十嵐政雄



選 改 數 半		舉	
月四年六十治明自		月 六	
(縣分) 月 五 年 六			
下新川郡	上新川郡	碓波郡	射水郡
泊町村 小澤 篤	寺町村 奥野 綱城	三清村 武部 堅	下余川村 南 兵吉
生地村 田村 文平	塚越村 宮崎 重治	太田村 安念次左衛門 堅	内島村 五十嵐政雄
		島新村 島田 孝之	
			若栗村 西田 勝治
			入膳村 岡 與左衛門
			入膳村 菅野 新三郎
			三日市村 菅野 新三郎
			石割村 堀田 周造
			横法音寺村 堀田 周造
			春木村 堀内 潤二
			明治一五、八辭職
			明治一五、九補職
			明治一五、九辭職
			明治一五、九補職
			明治一六、三補職
			明治一六、二辭職

置縣以後の議員

第二項 置縣以後の議員

明治十六年五月富山縣設置以來昭和十一年末まで五十二年八月間縣會議員を選舉したことは、總選舉十三回、半數改選七回、合せて二十回、補缺選舉はその外に行はれた。選

舉せられし議員總延人員は、補缺選舉のものをも合せて五百二十一人であつて、これを内譯すれば左の通りである。

府縣會規則に據るもの	期 間	回 數	議 員 數
府縣會規則に據るもの	十三年二月月	八	一三三
府縣制に據るもの	滿 三 年	二	五五
改正府縣制に據るもの	三十七年六月月	一〇	三三三
合 計	五十三年八月月	二〇	五二一

更に議員各自に就いて、其の當選、退職の年月に區分し、住所氏名を掲記すれば左の通りである。

府縣會規則の議員

一、府縣會規則に據る議員

任期	住 所	氏 名
至 郡 市	住 所	氏 名
上新川郡	的場村	水野 忠嗣







選改數半		選改數半							
月三年三十治明自 月五年七十二治明至		月二十年八十治明自 月二年三十二治明至							
碓波郡	高射水郡 市及	村郡 ノ内郡及 屬元及富 セシ婦山	下新川郡	上新川郡 ノ内郡及 屬元及富 セシ	碓波郡	射水郡	婦負郡	下新川郡	上新川郡
入膳村 岡竹 與左衛門 明治二四、八補缺	魚津町 關田口 彦惟三昌 明治二三、七補缺	四ツ屋新村 關田口 彦惟三昌 明治二三、七補缺	熊野村 福田清平 明治二四、一補缺	高月村 高田清次郎 明治二四、一補缺	島新村 島田孝之 和泉村 石崎彦多郎	太田村 安念次左衛門	阿尾村 島尾三郎 明治二一、三補缺	池田村 山岸兵太郎 明治二一、三補缺	高岡守山町 正村兵太郎 明治二一、三補缺
上井澤村 渡邊順伯 明治二〇、四補缺 明治二一、三正風卜改名	三日市村 菅野新作	濱黑崎村 寶田安太郎 明治二二、八死亡 明治二二、一補缺	塚越村 宮崎重治 明治一九、一補缺 明治二〇、五補缺	富山西四十物町 山野清平 明治二〇、五補缺	滑川瀨羽町 渡邊甚四郎 千原崎村 高見彌				

選改數半		選改數半							
月三年三十治明自 月五年七十二治明至		月三年一十 月六年五十							
碓波郡	高射水郡 市及	村郡 ノ内郡及 屬元及富 セシ婦山	下新川郡	上新川郡 ノ内郡及 屬元及富 セシ	碓波郡	射水郡	婦負郡	下新川郡	上新川郡
西五位村 仲上武部 安其文 明治二五、七補缺 東五位村 五十嵐政雄	横田村 堀二作 稻積村 大坪三郎	速星村 淺野長太郎	泊町 阿部欣次	大森村 菅原滋治 福澤村 藤村幸太郎	東加積村 石坂嘉隆 明治二五、三補缺 明治二五、七補缺	早月加積村 石坂專之介 明治二三、一補缺 明治二三、二補缺	東岩瀨町 菅原滋治 福澤村 藤村幸太郎	大廣田村 石坂嘉隆 明治二五、三補缺 明治二五、七補缺	應栖村 大矢四郎兵衛 廣安村 西能源四郎
佛田村 谷順平 明治二五、三補缺	北代村 恒田嘉一 石坂村 内山正治	海老江村 中西磯一 成郎 明治二三、七補缺 明治二三、九補缺	下余川村 金谷太次郎						



選 改 數 半		選 改 數 半	
七年七十二治明自		月七年五十二治明自	
(散解) 月二十年七十二治明至			
高射水岡郡市及	村郡市婦負内郡及富山	下新川郡	上新川内郡及富山
堀岡村	櫻谷村	經田村	廣田村
竹脇茂三郎	武内善治	濱田長次郎	寺田林
横田村			中野幸作
本間三右衛門			熊野村
			福村清平
			醍醐村
			矢後孫二
			七美村
			寺島松右衛門
			佐野村
			島省左右
			百塚村
			重松覺平
			寒江村
			酒井重則
			入善町
			岡與左衛門
			石田村
			宮崎廣八郎
			魚津町
			山澤長九郎
			西三郷村
			正木善一
			金岡又左衛門
			明治二七、九辭職
			明治二七、一〇補缺

選 改 數 半		選 改 數 半	
月一年八十二治明自		月六年九十二治明自	
高射水岡郡市及	村郡市婦負内郡及富山	下新川郡	上新川内郡及富山
般若村	寒江村	加積村	廣田村
武部冉之	酒井重則	菅野新作	中野幸作
		神保政太郎	齊藤好
		經田村	福澤村
		濱田長次郎	藤村幸太郎
		鍋島太郎兵衛	
		速星村	
		奥野義治	
		若林村	
		藤井長太郎	
		石黒村	
		河合八十八	
		東加積村	
		石坂嘉一	
		櫻谷村	
		武内善治	
		岩間菊太郎	
		黒河村	
		黒田儀平	
		横田村	
		堀二作	
		佛生寺村	
		岩間菊太郎	
		黒河村	
		黒田儀平	
		宇波村	
		荻野助右衛門	
		横田村	
		堀二作	
		大島村	
		小川善三郎	
		横田村	
		堀二作	
		鷹栖村	
		大矢四郎兵衛	
		中野村	
		藤井長太郎	
		若林村	
		黒田次郎右衛門	
		石黒村	
		河合八十八	



二、府縣制に據る議員

總							任期
年九十二治明自							
(退半)月八年一十三治明至							郡市
富山市	西礪波郡	東礪波郡	射水郡	婦負郡	下新川郡	中新川郡	
梅澤町 郵澤金廣	東五位村 五十嵐政雄	梅檀野村 松島與信	横田村 堀 一二作 老田村 龍脇重作	八尾町 橋爪治郎作	下立村 福井重成 (自明治二九、九)	滑川町 早月加積村 寺田村 西三郷村 正林善一 豐二 林善一	廣田村 中野幸作 新保村 高堂三郎
總曲輪 江守精一	津澤町 沼田平作		新湊町 菅谷二平 横田村 本間三右衛門			加藤甚右衛門 中屋靜二 藤 豐二 正木善一 林善一	東岩瀬町 森 正太郎
						明治三〇、一一一補職 明治三〇、一一一補職 明治二九、一一一補職 明治二九、一一一補職	

選						
(舉選月九は郡川新下) 月八						
十 三 治 明 至						
高岡市	西礪波郡	東礪波郡	氷見郡	婦負郡	下新川郡	中新川郡
宮脇町 菅野傳右衛門 明治三〇、一一〇補職	高江村 佐々木權次郎 西五位村 上桒安太郎 明治二九、九〇補職	城塚町 荒木文平 太田村 安念次左衛門 明治二九、一一〇補職	上庄村 新澤新信 佛生寺村 岩間菊太郎 明治三〇、七補職	櫻谷村 武内善治 菅川村 若林爲太郎	下新川郡 道下村 谷平三郎 (四人、自明治二九、九)	立山村 金山從平 利田村 伊林久 明治三一、四補職
					石田村 宮崎廣八郎 泊町 阿部欣次	



選 改 數 半							
(舉選月九は郡水射・郡川新中)月八年一十三治明自							
月 七 年 二							
富山市	西礪波郡	東礪波郡	射水郡	婦負郡	下新川郡	中新川郡	上新川郡
柳町 中田太七郎 千石町 田上道貞	廣瀬館村 波邊敏太郎 福岡町 島田徳太郎	東般若村 島 莊次	作道村 石黒準太郎 新湊町 菅谷二平 佐野村 野崎榮太郎 牧野村 岩脇孫八 (四人、自明治三一、九)	東吳羽村 八尾町 稻垣梅太郎 玉生道寧 直二辭職 明治三一、九補缺	下立村 福井重成	東水橋町 佐々木平兵衛 濱加積村 赤間徳次郎 (二人、自明治三一、九)	堀川村 高安健三郎 月岡村 中土仲太郎 大廣田村 林 陪見

一、府縣制廢止の場合の議員は改正府縣制施行の日まで在任。

三、改正府縣制に據る議員

選 總						任期
二	十	三	治	明	自	至
六	十	三	治	明	至	至
水見郡	射水郡	婦負郡	下新川郡	中新川郡	上新川郡	郡市
水見町 上庄村 山崎善造 中居清平 岩間菊太郎 明治三五、九辭職 明治三五、一一補缺	新湊町 菅谷二平 横田村 本間三右衛門 二塚村 武内清次 作道村 石黒準太郎	八尾町 玉生道寧 古里村 津田三郎 櫻谷村 室林彌三郎	上中島村 佐伯有台 三日市町 菅野新作 魚津町 關口彦三 若栗村 西田武右衛門 五箇庄村 河村政治	寺田村 林 豐二 明治三三、一〇辭職 明治三三、一一再選 西加積村 黒田義平 濱加積村 赤間徳次郎	豐田村 赤祖父牛知 堀川村 高安健三郎 月岡村 中土金十郎	住 所 氏 名





總		舉					
明自		月九年					
明至		月九年					
下新川郡	中新川郡	上新川郡	高岡市	富山市	西礪波郡	東礪波郡	
山崎村 大布施村 伊東祐賢	泊町 森丘覺平	福澤村 藤村幸太郎	御馬出町 菅池岩吉	愛宕町 大間知圓兵衛	西野尻村 若林村	高瀨村 城端町	
前澤村 松田久次郎	加積村 伊東忠二	新庄町 三鍋磯右衛門	菅池岩吉 明治三三、五辭職 明治三三、六補缺	關野善次郎 明治三三、四當選無効 明治三三、五補缺	富田芳太郎 黑田次郎右衛門	岡本八平 武部其文	
					醍醐村 津澤町	安念次左衛門 明治三三、一〇辭職 明治三三、一補缺	
					矢後孫人 沼田平作	東般若村 島莊次	

選							舉
月九年							月九年
年六十							年四十
治三							治四
上新川郡	高岡市	富山市	西礪波郡	東礪波郡	氷見郡	射水郡	婦負郡
堀川村 熊野村	御馬出町 菅池岩吉	古銀冶町 羽根平三郎	北蟹谷村 水島村	東山見村 福野町	女良村	掛開發村 七美村	櫻谷村 古里村
藤永義治			安井幸治 北六郎	上田又一 田中清文	清水幸太郎	大橋十右衛門 寺島松右衛門	淺尾清太郎 數井孝次
山室村 澤木又八		柳町 中田太七郎	醍醐村 矢後孫人	北野村 梅檀野村	神代村 和泉善六	作道村 下關村	八尾町 江本信好
			明治三三、八、七辭職 明治三三、九補缺				明治三三、八、七辭職 明治三三、八補缺



總		選	
自至	明治	十四年	十四年
九月	九月	九月	九月
中新川郡	早月加積村 滑川町 柿澤村 野崎源七郎 加藤甚右衛門 中屋靜二 東水橋町 佐々木平兵衛	東礪波郡	高瀬村 庄下村 南般若村 東般若村 島本莊 島本正孝 根尾宗四郎 富賀見欽十郎 城端町 岡部長左衛門
下新川郡	飯野村 荻生村 經田村 濱田長次郎 舟見町 脇坂靜之助 森丘覺平	水見郡	太田村 余川村 久目村 百谷傳兵衛 武田久作 （明治四一、五清次郎と改名）
婦負郡	八尾町 富山市總曲輪野村 朝日村 増山政次郎 百塚村 内山逸興	射水郡	掛開發村 下關村 金武中央 二塚村 作道村 石黒準太郎

總		舉	
自至	明治	十月	十月
四月	四月	四月	四月
西礪波郡	水島村 北蟹谷村 石動町 安井幸治 山王村 矢木安一	富山市	石動町 岩田大中 木町 沖田正近
上新川郡	熊野村 東岩瀬町 高井文雄 安井文雄 蜷川村 布村吉太郎	高岡市	白銀町 川崎富次郎
中新川郡	上市町 音杉村 有澤大助 上段村 小池義範	下新川郡	魚津村 入善町 野島茄三郎 舟見町 濱松與三左衛門 脇坂靜之助
婦負郡	八幡村 穴田仁七郎 朝日村 増山政次郎	婦負郡	八幡村 穴田仁七郎 朝日村 増山政次郎







總 選 舉							
自 大 正 八 年 九 月 至 大 正 十 年 九 月							
高岡市	上新川郡	中新川郡	下新川郡	婦負郡	射水郡	氷見郡	東礪波郡
源平町 荒井建三	大庄村 田近正貞 月岡村 島倉親幸	舟橋村 野村惟命 柿澤村 榊田諧太郎	横山村 谷龍藏 加積村 伊東達二	櫻谷村 内山俊治 寒江村 角島吉明	守山村 橋林太郎 作道村 齊藤俊彦	女良村 大西篤示	庄下村 根尾長次郎 井口村 吉井嘉一郎
	大廣田村 飯倉平兵衛	東水橋町 佐々木平兵衛	魚津町 木下清太郎 山崎村 鹿熊久安	八幡村 佐伯庄治	新湊町 官林立作 橋下條村 渡邊謙次	神代村 高倉伊平	青島村 野村安太郎 廣塚村 西能源四郎
							福島町 松村謙三 津澤町 瀧田孝弟
							國吉村 太田一成 國吉村 四良
							若林村 太田一成 國吉村 四良
							西礪波郡

總 選							
自 大 正 十 年 二 月 至 大 正 十 二 年 年							
富山市	高岡市	上新川郡	中新川郡	下新川郡	婦負郡	射水郡	氷見郡
向川原町 並木文右衛門 覺中町 金山米次郎	横町 上野貞吉	大廣田村 飯倉平兵衛	東水橋町 佐々木平兵衛 滑川町 石川新六	魚津町 木下清太郎 經田村 濱田長次郎 入善町 米澤元健 南保村 堀地源次郎	熊野村 舟木定治 八尾町 摩島嘉造	作道村 齊藤俊彦 新湊町 八島八郎	女良村 大西篤示
南新町 堀 米次郎	榮町 櫻井岩次郎	大久保町 安井忠重	五百石町 齊藤幸太郎	大正一五、一二死亡 昭和二、二補缺 大布施村 森丘正唯	八尾町 橋爪秀太郎	梶田村 澤田健二 下關村 今井兼吉	氷見町 大石齊治
							野尻村 根尾長次郎 砂土居 次郎平
							東礪波郡



選				總			學	
二六	和和	昭昭	自至	上新川郡	上新川郡	高岡市	富山市	西礪波郡
射水郡	婦負郡	下新川郡	中新川郡	上新川郡	高岡市	富山市	西礪波郡	西礪波郡
梶新 田湊 村	野積 村	石田 村 大布 施村	新屋 村 鹿熊 久安 昭和三、二當選無効 昭和三、二補缺	滑川 町 五百 石町	熊野 村 飯倉 平兵衛	油 町 藤平 長門	越前 町 長谷 川儀 作 昭和二、九失職	水島 吉村 國吉 貞次 良 大正一、五、六辭職 大正一、五、九補缺
澤田 健二	卯尾 田毅 太郎	森丘 正唯	齊藤 幸太 郎	飯倉 平兵衛	東岩 瀨町 宮城 彦次郎	坂下 町 福尾 傳三郎	松澤 村 高島 開作	正得 村 砂田 喜八郎
伏木 町 堀田 善一 郎	作道 村 齊藤 俊彦	魚津 町 西田 源次郎	白萩 村 藤田 義爲	東岩 瀨町 宮城 彦次郎	坂下 町 福尾 傳三郎	中 町 長谷 川庄 藏	高岡 市	高廣 政之 助

總		學					
昭昭	自至	月	九	九	年	年	年
下新川郡	中新川郡	上新川郡	高岡市	富山市	西礪波郡	東礪波郡	水見郡
内山 村 藤田 與次	入善 町 伊東 清太 郎 昭和八、一死亡 昭和八、三補缺	高野 村 山川 亨 滑川 町 藤田 榮一	坂下 町 朝山 次助 御馬 出町 菅池 岩吉	總曲 輪 金山 米次郎 千石 町 尾山 三郎	西太 美村 谷村 金四郎 藪波 村 石野 藤作	福岡 町 藁島 宗平 若林 村 喜多 養元	青島 村 野村 重正 城端 町 黒川 由次郎
山崎 村 鹿熊 久安	魚津 町 伊東 清太 郎 昭和八、一死亡 昭和八、三補缺	高野 村 山川 亨 滑川 町 藤田 榮一	坂下 町 朝山 次助 御馬 出町 菅池 岩吉	總曲 輪 金山 米次郎 千石 町 尾山 三郎	西太 美村 谷村 金四郎 藪波 村 石野 藤作	福岡 町 藁島 宗平 若林 村 喜多 養元	青島 村 野村 重正 城端 町 黒川 由次郎
下新川郡	中新川郡	上新川郡	高岡市	富山市	西礪波郡	東礪波郡	水見郡
内山 村 藤田 與次	入善 町 伊東 清太 郎 昭和八、一死亡 昭和八、三補缺	高野 村 山川 亨 滑川 町 藤田 榮一	坂下 町 朝山 次助 御馬 出町 菅池 岩吉	總曲 輪 金山 米次郎 千石 町 尾山 三郎	西太 美村 谷村 金四郎 藪波 村 石野 藤作	福岡 町 藁島 宗平 若林 村 喜多 養元	青島 村 野村 重正 城端 町 黒川 由次郎



選 舉						
和 和	六 十	年 九	九 月	月	月	月
婦負郡	野積村 八尾町	平野三治 摩島嘉造	音川村 五十嵐 爲太郎	射水郡	新湊町 卯尾田 毅太郎 新湊町 針山 清三 伏木町 堀田 勝文 榑田村 澤田 健二	小杉町 山口安太郎
氷見郡	氷見町	三國嘉平	阿尾村 上野八郎右衛門	東礪波郡	東山見村 南 左 民 般若村 武部 毅吉	野尻村 砂土居 次郎平
西礪波郡	福岡町 水島村	高廣政之助 篠岡 貞次	松澤村 高島 開作 福岡町 蓑島 宗平	富山市	櫻木 新川郡東水橋町 東堂 久 範 深井 龍太郎 千石町 尾山 三郎	總曲輪 吉田 清平
高岡市	横田町	飛見 文繁	坂下町 朝山 次助	高岡市	横田町	飛見 文繁
上新川郡	大廣田村 大久保町	飯倉平兵衛 安井 忠重	堀川町 野上 資良			

選 舉						
自 至	昭 和	十 年	九 月	月	月	月
中新川郡	五百石町 濱加積村	金木次一郎 赤間 德壽	滑川町 八尾菊次郎	下新川郡	大布施村 入善町	森丘 正唯 田原 常次郎 魚津町 大島三佐雄
婦負郡	音川村 草島村	五十嵐 爲太郎 青木 善六	野積村 平野 三治	射水郡	新湊町 金山村	卯尾田 毅太郎 高澤 義作 伏木町 堀田 勝文 小杉町 山口安太郎
氷見郡	氷見町	堀埜與右衛門	熊無村 片折十次郎	東礪波郡	井波町 般若村	綿貫 佐民 武部 毅吉 野尻村 砂土居 次郎平
西礪波郡	福岡町 福光町	蓑島 宗平 谷村 金四郎	福岡町 高廣政之助 松澤村 高島 開作	富山市	總曲輪 千石町	吉田 清平 尾山 三郎
高岡市	木舟町	大野重吉	横田町 飛見 文繁			



第三節 役員

第一項 議長・副議長

府縣會の議長及び副議長の任期は、府縣會規則に於ては二年として議員の改選毎に公選し、府縣制に於ては議員の任期に従ひ、改選後の初會に於て互選し、改正府縣制に於ては議員の定期改選毎に互選する定めである。石川縣會時代に於ける初代の議長は、加賀國河北郡人で、金澤區から選舉せられた加藤恒が就任し、また同副議長は同國鹿島郡から選出せられた神野良が就任した。

富山縣設置後議長に選ばれたのは、礪波郡三清村(今の高瀬村大字)の武部尙志が初代であつて、延人員四十八人(實人員四十一人)が之に當つた。即ち一人の在職年月は平均一年二ヶ月に當り、短きは一・二ヶ月で交代したのもある。この間に在つて、大橋十右衛門の五年三ヶ月、堀二作の三年十一ヶ月、島田孝之の三年五ヶ月は在職の長いものであらう。また一人で兩度議長に選ばれたのは、米澤紋三郎、島田孝之、堀二作、大橋十右衛門、佐々木平兵衛、大西篤示、片口安太郎の七人である。

次に富山縣の副議長は、初代の南兵吉以下三十七人で、田中清文が滿四年の任期を一貫

議長・副議長

議長四十八代

歴代の議長

府縣會規則時代

した外は、これ又議長に亞いで交代の頻繁な方である。左に置縣以來の議長及び副議長を列記することとする。

一、議長

就職年月日	退職年月日	氏名
明治十六年八月二十日	明治十七年六月九日	武部尙志
同十七年六月九日	同十八年三月十日	南兵吉
同十八年三月十日	同十八年十二月十日	米澤紋三郎
同十八年十二月十日	同十九年十月十一日	米澤紋三郎
同十九年十月十一日	同二十一年三月二十四日	島田孝之
同二十一年三月二十四日	同二十三年二月七日	島田孝之
同二十三年三月二十四日	同二十三年十一月十九日	石坂專之介
同二十三年十一月二十六日	同二十五年二月十五日	谷順平
同二十五年七月二十五日	同二十七年七月二十五日	堀二作











歴代の副議長

二、副議長

同 六年十二月十九日	同 七年十二月一日	同 七年十二月一日	吉田清平
同 七年十二月一日	同 八年十二月五日	同 八年十二月五日	鹿熊久安
同 八年十二月五日	同 九年十二月七日	同 九年十二月七日	砂土居次郎平
同 九年十二月七日	同 十年九月二十四日	同 十年九月二十四日	高廣政之助
同 十年十月十六日	同 十一年十一月二十八日	同 十一年十一月二十八日	片口安太郎
同 十一年十一月二十八日			森丘正唯

府縣會規則時代

就職年月日	退職年月日	氏名
明治十六年八月二十日	明治十七年六月九日	南兵吉
同 十七年六月九日	同 十八年二月一日	神保東作
同 十八年三月十日	同 十八年十二月十日	井城與八郎
同 十八年十二月十日	同 十九年七月二十日	武部堅
同 十九年十月十一日	同 二十一年三月二十四日	大橋十右衛門
同 二十一年三月二十四日	同 二十三年三月二十二日	田村惟昌

府縣制時代  
改正府縣制時代

規 則	制縣府	正 改
同 二十三年三月二十二日	明治二十九年九月十七日	同 五年十一月十四日
同 二十五年七月二十五日		同 四年十月九日
同 二十七年七月二十五日		同 三年十二月三日
同 二十七年九月二十八日		大正 二年十二月十八日
同 二十八年二月十二日		同 四十四年十月十一日
		同 四十二年十一月二十六日
		同 四十年十月八日
		同 三十六年十月十四日
		同 三十四年十二月六日
		明治三十二年十月十二日
同 二十五年七月二十五日	明治三十二年六月三十日	同 六年十一月十日
同 二十七年七月二十五日		同 五年十一月十四日
同 二十七年九月二十八日		同 四年九月二十四日
同 二十七年十二月十七日 <small>解散</small>		同 三年十二月三日
同 二十九年六月三十日		大正 二年十二月十八日
		同 四十四年九月二十四日
		同 四十二年十一月二十六日
		同 四十年九月二十四日
		同 三十六年九月二十四日
		同 三十四年十月四日
		明治三十四年十月四日
堀 二 作	阿 部 欣 次	香 川 保 忠
上 桒 安 太 郎		正 木 善 一 郎
竹 脇 茂 三 郎		久 保 次 平
石 坂 嘉 一		廣 瀬 平 四 郎
菅 野 新 作		野 島 茄 三 郎
		澤 木 又 八 郎
		野 崎 源 七 郎
		田 中 清 文
		荒 木 文 平
		黑 田 次 郎 右 衛 門







常置委員（府縣會規則に據るもの）

任期	定數	氏名
自明治二十六年九月二十五日 至明治二十七年六月十一日	七	岩間覺平 島田孝之 菅野新平 明治十七、二補缺 菅野新平 明治十七、二補缺 菅野新平 明治十七、二補缺 菅野新平 明治十七、二補缺 菅野新平 明治十七、二補缺 菅野新平 明治十七、二補缺 菅野新平 明治十七、二補缺
自明治二十七年六月十一日 至明治二十八年三月二十三日	五	島田孝之 菅野新作 大橋十右衛門 馬場道久 菅野新作 五十嵐政雄
自明治二十八年三月二十三日 至明治二十九年三月二十三日	五	安念次左衛門 田村惟昌 大橋十右衛門 島田孝之 田村惟昌 島尾三郎
自明治二十九年三月二十三日 至明治三十年三月二十四日	七	山野清平 島田孝之 田村惟昌 島尾三郎 安念次左衛門 菅野新作 渡邊甚四郎



議 長 米 澤 三 郎





之 孝 田 島 長 議

自明治二十三年 三月二十三日 至明治二十五年 七月二十四日	七	坂井敬義 浅野長太郎 南磯一郎 大坪三郎 金谷太次郎	岩城隆常 仲平 菅原滋治 五十嵐政雄
自明治二十五年 七月二十五日 至明治二十七年 七月二十四日	五	寺島松右衛門 藤村幸太郎	浅野長太郎 岡與左衛門 五十嵐政雄
自明治二十七年 七月二十五日 至明治二十九年 十二月十七日	五	林豊二 河合八十八	武内善治 濱田長次郎 島省左右
自明治二十八年 二月十二日 至明治二十九年 六月三十日	五	菅野新作 荻野助右衛門 黑田儀平	正木善一郎 武内善治 大矢四郎兵衛 武部冉之

府縣制の参事會員

第三項 名譽職参事會員 (其の一)

明治二十九年七月一日府縣制實施せられて、從來の常置委員の名稱は廢止せられ、名譽職参事會員を置かるゝことゝなつた。名譽職参事會員及び同補充員の定数は各四名で



議員中から五選し、名譽職参事會員の關員あるときは知事に於て補充員中投票多數の順次に依り補充し、仍關員を生じたる場合は、二箇月以内に臨時其の選舉を行ふこととなつた。而して名譽職参事會員の任期は議員の任期に従ふべきで、任期満限の後と雖も後任者就職の日まで在職するといふ特例を設けた。左にその氏名等を掲げることとする。而して補充員の選舉は通常縣會に於て之を行はしめたが、其の氏名等は省略する。

名譽職参事會員（府縣制に據るもの）

参事會員の連名

任	期	定數	氏	名
自明治二十九年九月十七日	至明治三十二年九月二十一日	四	本間三右衛門	五十嵐政雄
			岩間菊太郎	（鍋島太郎兵衛 明治三二、三三辭職 林 陪 見 明治三二、三三補缺）
自明治三十一年九月二十一日	至明治三十二年六月三十日	二	宮崎廣八郎	赤間徳次郎

改政府縣制の参事會員

第四項 名譽職参事會員（其の二）

明治三十二年七月實施せられた改政府縣制では、縣の名譽職参事會員及び同補充員は、初め定員各六人で、大正三年法律第三十五號にて同七月から各七人となし、更に同十五年法律第七十三號にて同七月から各十人に増し、名譽職参事會員中關員あるときは、知事は補充員の中に就いて補關することは以前と同じく、仍關員あるときは、臨時補關選舉を行ふこととなつた。而して其の任期は初め議員の定期改選毎に改選し、後任者就任の日まで在任すと定め、次いで大正三年法律第三十五號にて同七月から毎年選舉することとなり、後任者就任の前日まで在任し、議員の任期満了したるときも、猶後任者就任の前日まで在任することとなつた。更に大正十五年法律第七十三號にて同七月から隔年選舉に改め、後任者就任するまで在任すること及び議員の任期満了したるときも亦前と同じこととした。左にその氏名等を記すが、補充員は省略する。

参事會員の連名

名譽職参事會員（改政府縣制に據るもの）

任	期	定數	氏	名



自明治三十二年 十月十二日 至明治三十六年 十月十四日	六	島 莊次 高安健三郎 玉生道寧 黒田義平 菅谷二平 赤祖父牛知	室林彌三郎 佐伯有台 菅野新作 富田芳太郎 石黒準太郎 林 豊二	明治三四、九、三〇辭職 明治三四、一〇、三辭職…… 明治三四、一一、一四辭職 明治三四、一一、一四補缺 明治三四、一一、二〇辭職 明治三四、一一、二〇補缺
自明治三十六年 十月十四日 至明治四十年 十月八日	六	(田村民井 數井孝次 正木善一郎 伊東忠二 三鍋磯右衛門 松島與信 松田春太郎 數井孝次 加藤甚右衛門 菅池岩吉 森丘覺平	(藤田久信 加藤甚右衛門 松田春太郎 菅池岩吉 森丘覺平 清水幸太郎 羽根平三郎 大橋十右衛門 北 六一郎 石黒準太郎 黒田銀次郎 筱岡貞次	明治三八、七、一〇〇辭職 明治三八、七、一〇〇補缺 明治三八、九、一五辭職…… 明治三八、九、一五補缺 明治三九、一〇、一一辭職…… 明治三九、一〇、一一補缺 明治三九、一一、一五辭職 明治三九、一一、一五補缺 明治三九、一〇、一一補缺

自明治四十年 十月八日 至明治四十四年 十月十一日	六	川島十作 玉生道寧 武田清次郎 松浦勝太郎 中屋靜二 石黒準太郎 藤田久信 島 莊次	脇坂靜之助 齊藤宗平 岡部長左衛門 内山逸興 濱田長次郎	明治四二、一、八死亡 明治四二、一、一二補缺 明治四四、二、三補缺 明治四二、一〇、一二辭職…… 明治四二、一〇、一二補缺
自明治四十四年 十月十一日 至大正四年 十月八日	六	小池義範 増山政次郎 金谷太次郎 堀 豊 平井一見	(石黒準太郎 塚島秀夫 大正三、六、一七補缺 大正三、六、一七補缺 大正二、一二、三辭職…… 大正二、一二、三補缺 大正二、一二、三補缺	明治四五、五、一四辭職 明治四五、五、一七補缺 大正三、六、一七補缺 大正二、一二、三補缺
自大正四年 十月九日 至大正五年 十一月十三日	七	廣瀬平四郎 長谷川庄藏 能澤源作	佐々木平兵衛 宮岡幸次郎 島尾 鏡 鹽田幸助 角島吉明	大正三、七、一増員補充









平 順 谷 長 議

自大正十一年 至大正十四年 十月十四日	自大正十二年 至大正十五年 十月十五日	自大正十三年 至大正十四年 十一月十七日	自大正十四年 至大正十五年 十一月十六日	自大正十五年 至昭和二年 十一月十五日
七	七	七	七	一〇
野村安太郎 榊田諧太郎	齊藤俊彦 高島開作	澤田健二 砂土居次郎平	橋爪秀太郎 安井忠重	齊藤幸太郎 木下清太郎 大石齊治
瀧田孝弟 渡邊謙次	春田嘉一郎 舟木定治	飯倉平兵衛 橋爪秀太郎	摩島嘉造 今井兼吉	砂田喜八郎 藤平長門 大正一五、二、二七補缺
西能源四郎 鹿熊久安	石川新六	國吉四良 堀地源次郎	木下清太郎 堀米次郎	澤田健二 春田嘉一郎 堀米次郎
堀米次郎	福尾傳三郎	長谷川儀作	高廣政之助	森丘正唯 昭和二、二、九辭職 昭和二、二、九補缺
(以上三人大正一五、七、二增員補充)				



自昭和二年 十月十五日 至昭和四年 十一月十八日	自昭和四年 十一月十八日 至昭和六年 十月十六日	自昭和六年 十月十六日 至昭和八年 十一月二十二日
野村重正 平野三治 朝山宗次 朝山宗平	野村重正 鹿熊久安 金山米次郎	舟山鐵次郎 藤田興次 三國嘉平 藤田榮一 野村金次郎
谷村金四郎 應取亮太郎 昭和三、一、一九辭職 昭和三、一、一九補缺	黑川由次郎 堀田善一郎 朝山宗平 昭和五、一、二五辭職 昭和五、一、二五補缺	摩島嘉造 針山清三 昭和七、一、一七辭職 昭和七、一、一七補缺
神埜 脩 卯尾田毅太郎 齊藤幸太郎 昭和三、一、二五辭職 昭和三、一、二五補缺	玉生專次 宮城彦次郎 石野藤作	平野三治 南 佐民 野上資良 山 川 亨 伊東清太郎 五十嵐爲太郎 昭和七、一、二一補缺 昭和八、一、二五補缺
澤田健二 野村金次郎	喜多養元	武部毅吉

自昭和八年 十一月二十二日 至昭和十年 十月十六日	自昭和十年 十月十六日
篠岡貞次 高島開作 上野八郎齋門 澤田健二 大島三佐雄 平山直作 野上資良 五十嵐爲太郎 卯尾田毅太郎 片口安太郎	五十嵐爲太郎 鹿熊久安 大野重吉 安井忠重 平野三治 堀林與右衛門 糞島宗平
深井龍太郎 田原常次郎 昭和九、一、〇〇、四辭職 昭和九、一、〇〇、五補缺	堀田勝文
朝山次助 野村金次郎 糞島宗平 山 川 亨 尾山三郎 澤田健二 三國嘉平 摩島嘉造	砂土居次郎平 田原常次郎 高澤義作 大島三佐雄 綿貫佐民 青木善六 片折十次郎
昭和九、一、二、二四辭職 昭和九、一、二、二四補缺	昭和一一、一、二、一九辭職 昭和一一、一、二、一九補缺



縣官の参事  
會員

第五項 縣高等官参事會員

府縣會規則時代の常置委員會に於ては、縣令縣知事が議長を勤めたのみで、その外縣官吏が委員に加はるの規定がなかつたが、府縣制施行せらるゝに及んで、縣参事會には縣知事及び縣廳奉職の高等官二名が加はり、縣知事の議長となるは前に同じく、その高等官は内務大臣が之を命ずることゝなつた。其の後改正府縣制が實施せらるゝに及んでも、同一の制度であつたが、大正十五年法律第七十三號を以て之を改正し、同年七月一日から、縣参事會は、議長（即ち縣知事）及び名譽職参事會員を以て組織せらるゝことゝなり、縣高等官の参事會員たることは之を廢止せられた。

第六項 幹事及び事故審査委員

幹事及び事故審査委員は府縣會規則時代に設けた役員である。即ち本縣設置以後に於ては左の通りである。

幹事は議事規則第四十六條の「會議ノ所見ヲ以テ議員ヲ二組ニ分チ毎組幹事一名ヲ撰定シ傳達等ノ事ヲ掌ラシム但シ毎回之ヲ定ム」に據つたもので、議員二十二名を第一

幹事

縣官を除く

事故審査委員

組（一番より十一番まで）、第二組（十二番より二十二番まで）の二組に分ち、毎組に各一名を置いたものである。

事故審査委員は、府縣會規則第九條第二項の「府縣會議員ノ内招集ニ應セス又ハ事故ヲ告ケスシテ參會セサルモノヲ審査シ其退職者タルヲ決スルヲ得」及び議事規則第四十八條の「會議ノ招集ニ應セス又ハ不參連續三日ニ及ブモノハ共事故ヲ審査シ會議ノ決ヲ以テ其退職ト否トヲ定ム但シ事故審査委員ハ三名トシ毎會之ヲ撰定ス」に據つて之を置いたものである。

以上の幹事及び事故審査委員は、毎會之を選挙したが、會期の短い會議では決議の上、之が選定を省略したこともある。而して孰れも府縣會規則の廢止と共に、之を置かないことゝなつた。

第七項 議事録若しくは會議録の署名議員

府縣會規則に於ては、議事の記録を縣會日誌といつたが、之が署名議員に關する規定なく、府縣制以後に至りて、左の條文に依り議事録若しくは會議録の署名議員を定むべきことゝなつた。

議事録等署名議員

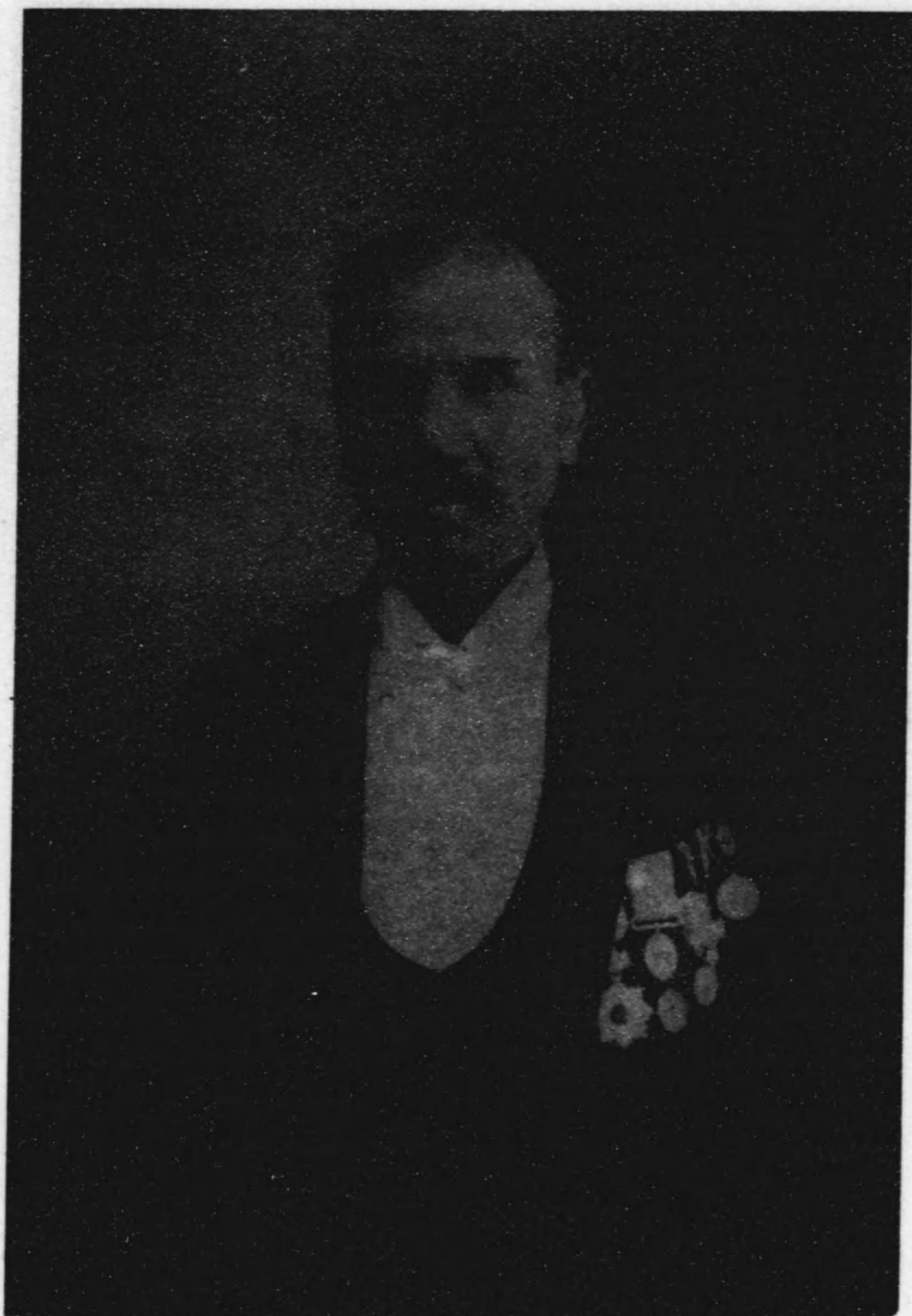


府縣制第三十六條 府縣會ハ書記ヲシテ議事録ヲ製シ議決及選舉ノ顛末並ニ出席議員ノ氏名ヲ記録セシムヘシ議事録ハ議長及議員二名以上之ニ署名スヘシ其議員ハ會議ノ前議會ニ於テ豫メ之ヲ定メ議事録中ニ其氏名ヲ記載シ置クヘシ  
改正府縣制第六十三條 議長ハ書記ヲシテ會議録ヲ製シ會議ノ顛末並出席議員ノ氏名ヲ記載セシムヘシ會議録ハ議長及議員二名以上之ニ署名スルヲ要ス其ノ議員ハ府縣會ニ於テ之ヲ定ムヘシ  
右に依り本縣に於て選舉せられし署名議員は多くは決議に依り議長の指名を以てせられ、其の員數は三名を例としたが、明治三十一年九月、同十月の臨時縣會及び同年十二月の通常縣會の三回に限り四名づゝ選舉せられたのは異例であつた。しかし其の後はまた以前の三名に復した。

説明員及び  
參與員

第八項 議案説明員、議事參與員及び議場係事務

縣會に於て決議の數には加はらないが、議案の旨趣を辯明するが爲、縣令若しくは縣知事に代りて、縣の官吏吏員が議事に參與することは、新舊何れの法にも之を定めた。即ち府縣會規則第六條第二項 出納決算ノ報告書ニ付府縣會ヨリ説明ヲ求ムルトキハ府



議長 堀 二 作





議長 岡又左衛門

縣知事縣令若ハ其代理人之ヲ説明スヘシ

府縣制第二十條 府縣知事若ハ特ニ知事ノ委任ヲ受ケタル府縣ノ官吏若ハ吏員ハ府縣會ノ議事ニ參與スルコトヲ得但議決ニ加ハルコトヲ得ス

前項ノ列席者ニ於テ發言ヲ求ムルトキハ議長ハ何時ニテモ之ヲ許スヘシ

改正府縣制第四十九條 府縣知事及其ノ委員若ハ囑託ヲ受ケタル官吏吏員ハ會議ニ列席シテ議事ニ參與スルコトヲ得但議決ニ加ハルコトヲ得ス

前項ノ列席者ニ於テ發言ヲ求ムルトキハ議長ハ直ニ之ヲ許スヘシ但シ之カ爲ニ議員ノ演說ヲ中止セシムルコトヲ得ス

の規定が夫れである。而して議場に於ける稱呼は府縣會規則時代に於ては議案説明員と呼ばずして、番外一番(上席縣官)、番外二番(其の他の縣官)と稱へ、府縣制施行以後に於ては參與員又は參與と稱ふることゝなつた。

議場係事務

また府縣制時代に於ては、左の規定に依り警察官に議場係事務を命じた。

府縣制第三十四條 第三十條第三十二條ニ依り議長ノ命ニ應セシムル爲府縣知事(東京府ハ警視總監)ハ每會期警察官ニ議場係事務ヲ命スヘシ

即ち府縣制の第三十條は議場の秩序を紊る議員あるとき、又は議場騷擾して整理し難



きとき、議長が之を取締る上に必要ある場合、また同第三十二條は、議長が傍聽人の取締上必要ある場合を指すもので、本縣にては二名乃至四名の議場係事務を命じた。  
置縣以後に於ける毎會の議案説明員、議事參與員及び議場係事務の官職氏名等を掲ぐれば左の通りである。但し表中資料の都合により、官職及び主掌課係名を記さないものがあり、また名の詳かならぬものは、氏の下へ(某)と記した。

議案説明員

(一) 議案説明員 (府縣會規則に據るもの)

未詳  
一、明治十六年八月臨時縣會

二、明治十六年九月臨時縣會

二等屬 尾越 梯輔

三、明治十六年十月通常縣會

二等屬 尾越 梯輔 五等屬 三宅五郎三郎 六等屬 波岡友尙

七等屬 布施 (某) 七等屬 濱田 (某) 八等屬 藤高尙志

警部 岸 正形 監獄書記 大澤弘道

四、明治十七年一月臨時縣會

二等屬 尾越 梯輔

五、明治十七年三月通常縣會

二等屬 尾越 梯輔 五等屬 三宅五郎三郎 五等屬 白井 (某)

七等屬 藤高尙志 八等屬 上野 (某) 九等屬 齊藤十郎

警部 岸 正形 監獄書記 小木直良 御用係 松岡忠直

六、明治十七年六月上旬臨時縣會

一等屬 尾越 梯輔

七、明治十七年六月中旬臨時縣會

一等屬 尾越 梯輔

八、明治十八年三月通常縣會

尾越 梯輔 小木直良 中田永太郎 波岡友尙 藤高尙志

齊藤十郎 熊野秀之輔 岸 正形 澤田 保 松岡忠直

九、明治十八年六月臨時縣會

尾越 梯輔



一〇、明治十八年十二月通常縣會

尾越梯輔

岸 正形

中田永太郎

藤高尙志

森 務

熊野秀之輔

石坂專之介

井口莊作

堀内潤二

波岡友尙

一一、明治十八年十二月臨時縣會

六等屬 藤高尙志

一二、明治十九年十月臨時縣會

書記官 木間瀬柔三

屬 市川伯孝

屬

綾部文蔵

一三、明治十九年十一月通常縣會

木間瀬柔三

三田勝俊

岸 正形

井口莊作

若山茂雄

中田永太郎

白井倫直

三宅五郎三郎

石坂專之介

鈴木 啓

小菅成勳

一四、明治二十年五月臨時縣會

書記官 木間瀬柔三

屬 三田勝俊

屬

白井倫直

一五、明治二十年十二月通常縣會

大浦兼武

三田勝俊

野村 毅

岸 正形

石坂專之介

三宅五郎三郎

市川伯孝

波岡友尙

綾部文蔵

中田永太郎

澁谷孝常

一六、明治二十一年三月臨時縣會

瀧 吉弘

三田勝俊

一七、明治二十一年十一月通常縣會

書記官 島田宗正

議事課長 三田勝俊

警務課長警部 千々岩英一

警部補 吉田與三郎

衛生課長 岸 正形

學務課長 三宅五郎三郎

農商課長 石坂專之介

副典 獄野村 毅

一八、明治二十二年八月臨時縣會

書記官 島田宗正

議事課長屬 三田勝俊

岸 正形

中野 (某)

一九、明治二十二年十一月通常縣會

書記官 島田宗正

議事課長 三田勝俊

典 獄 千々岩英一

土木課長 岸 正形

主計課長 中西五六郎

衛生課長 入江直友

學務課長 三宅五郎三郎

警 部 吉田與三郎

農商課長心得 齊藤十郎



書記官 島田宗正 屬 三田勝俊

二〇、明治二十三年三月臨時縣會

書記官 島田宗正 議事課長屬 三田勝俊

二一、明治二十三年五月臨時縣會

書記官 島田宗正 屬 三田勝俊

二二、明治二十三年六月臨時縣會

書記官 島田宗正 屬 三田勝俊

二三、明治二十三年八月臨時縣會

書記官 荒川義太郎 屬 三田勝俊

二四、明治二十三年十一月臨時縣會

書記官 荒川義太郎 參事官 三田勝俊

二五、明治二十三年十二月通常縣會

屬 岸正形 屬 熊野秀之輔

屬 鈴木啓典 獄 千々岩英一

書記官 荒川義太郎 參事官 三田勝俊

二六、明治二十四年十一月臨時縣會

屬 鈴木啓典 獄 千々岩英一

屬 岸正形 屬 熊野秀之輔

屬 鈴木啓典 獄 千々岩英一

屬 岸正形 屬 熊野秀之輔

屬 鈴木啓典 獄 千々岩英一

屬 岸正形 屬 熊野秀之輔

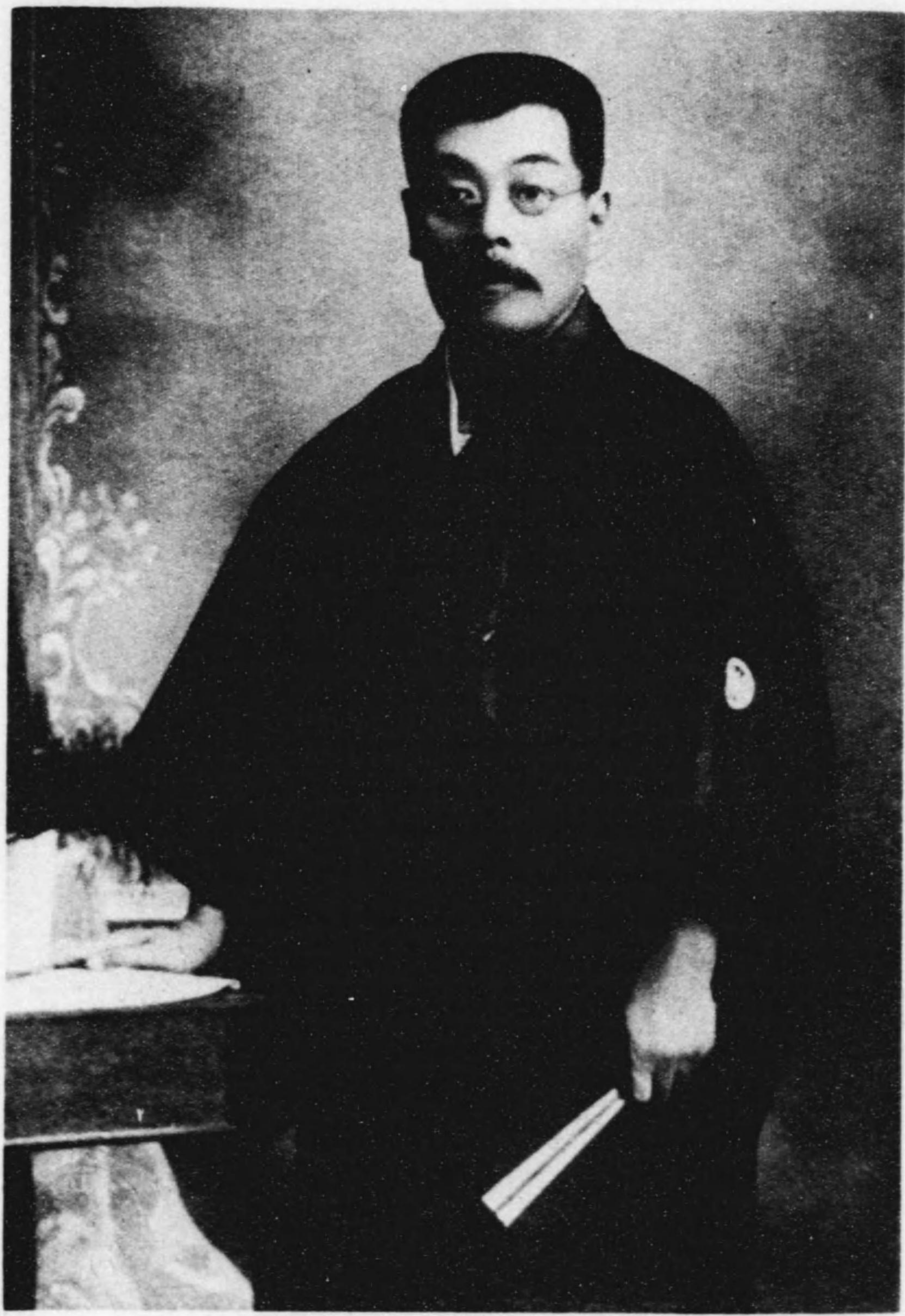
屬 鈴木啓典 獄 千々岩英一

屬 岸正形 屬 熊野秀之輔

屬 鈴木啓典 獄 千々岩英一

屬 岸正形 屬 熊野秀之輔

屬 鈴木啓典 獄 千々岩英一



議長 竹脇茂三郎





議 長 大 矢 四 郎 兵 衛



書記官	荒川義太郎	參事官	三田勝俊	屬	岸正形
	二七、明治二十四年十一月通常縣會				
書記官	荒川義太郎	參事官	增田知	參事官	三田勝俊
警部	中西五六郎	屬	岸正形	屬	熊野秀之輔
屬	寺本精一	屬	鈴木啓	監獄書記	山口精一
	二八、明治二十五年七月臨時縣會				
書記官	荒川義太郎	參事官	三田勝俊		
	二九、明治二十五年九月臨時縣會				
書記官	荒川義太郎	參事官	增田知	參事官	三田勝俊
屬	岸正形				
	三〇、明治二十五年十一月通常縣會				
書記官	荒川義太郎	參事官	增田知	參事官	三田勝俊
警部	中西五六郎	屬	熊野秀之輔	屬	岸正形
屬	中野(某)	屬	鈴木啓	監獄書記	山口精一
	三一、明治二十六年十月臨時縣會				



島田宗正 増田 知 三田勝俊 高田雪太郎

三二、明治二十六年十一月通常縣會

書記 官 島田宗正 參事 官 三田勝俊

警察部主掌警部長 吉見 輝 監獄署主掌典獄 小島鋼次郎

內務部第二課土木係主掌技師 高田雪太郎 內務部第二課土木係主掌屬 波岡友尙

內務部第二課勸業係主掌屬 寺本精一 內務部第三課主掌屬 掛飛 秀

警察部主掌警部 勝見貞靖 監獄署主掌監獄書記 山口精一

三三、明治二十七年七月臨時縣會

屬 秋永蘭次郎 其の他未詳

三四、明治二十七年九月臨時縣會

參事 官 大木房英 內務部第二課土木掛主掌技師 高田雪太郎

內務部第二課土木掛主掌屬 澤田 保 內務部第三課主掌屬 秋永蘭次郎

內務部第三課學務掛主掌屬 掛飛 秀 內務部第三課勸業掛主掌屬 阿部秀正

三五、明治二十七年十一月通常縣會

書記 官 大海原尙義 參事 官 大木房英

警察部主掌警部長 吉見 輝 警察部主掌警部 勝見貞靖

內務部第二課主掌技師 高田雪太郎 內務部第二課土木掛主掌屬 澤田 保

內務部第三課主掌屬 秋永蘭次郎 內務部第三課學務掛主掌屬 掛飛 秀

內務部第四課主掌屬 鈴木 啓 內務部第五課主掌屬 阿部秀正

監獄署主掌典獄 小島鋼次郎 監獄署主掌監獄書記 山口精一

監獄署主掌監獄書記 立石重司

三六、明治二十八年二月繼續通常縣會

書記 官 大海原尙義 參事 官 李家隆介 警部長 吉見 輝

屬 秋永蘭次郎 典獄 小島鋼次郎 監獄書記 山口精一

屬 阿部秀正 收稅屬 石尾 章 屬 高木秀平

屬 吉田誠忠 技手 柳下友太郎 屬 古澤義三郎

屬 杉原宣雄 屬 中村光德 警部 勝見貞靖

屬 鈴木 啓 監獄書記 立石重司

三七、明治二十八年三月臨時縣會

內務部第二課主掌技師 高田雪太郎 內務部第一課主掌屬 山岸俊信



内務部第二課土木掛主掌屬 中田永太郎

三八、明治二十八年十月臨時縣會

書記 官 大海原尙義

警察部主掌警部長 吉見 輝

内務部第一課第二課主掌屬 山岸 俊信

内務部第二課主掌屬 竹部彌平次

内務部第一課主掌屬 古澤義三郎

三九、明治二十八年十一月通常縣會

書記 官 大海原尙義

警察部主掌警部長 吉見 輝

内務部第二課主掌屬 高木秀平

内務部第二課主掌技手 柳下友太郎

内務部第五課主掌屬 阿部秀正

内務部第三課主掌屬 秋永蘭次郎

警察部主掌警部 勝見貞靖

参 事 官 李家隆介

内務部第二課主掌技師 高田雪太郎

内務部第二課主掌屬 高木秀平

内務部第二課主掌屬 吉田誠忠

警察部主掌警部 勝見貞靖

参 事 官 李家隆介

監獄署主掌典獄 小島鋼次郎

内務部第二課主掌屬 吉田誠忠

内務部第一課主掌屬 古澤義三郎

内務部第五課主掌屬 杉原宜雄

内務部第三課主掌屬 中村光徳

監獄署主掌監獄書記 山口精一

監獄署主掌監獄書記 立石重司 内務部第四課主掌屬 鈴木 啓

四〇、明治二十八年十二月臨時縣會

書記官 大海原尙義 其の他未詳

四一、明治二十九年六月臨時縣會

書記 官 大海原尙義 参 事 官 清野長太郎

内務部第一課主掌屬 山岸 俊信 内務部第二課主掌屬 大森直輔

内務部第二課主掌技手 奥田永久

(二) 議事參與員及び議場係事務 (府縣制に據るもの)

四二、明治二十九年九月臨時縣會

書記 官 大海原尙義 参 事 官 清野長太郎

内務部第一課主掌屬 山岸 俊信 議場係 警部 土田忠次

議場係 警部 小松梧樓

四三、明治二十九年十月臨時縣會

書記 官 大海原尙義 参 事 官 清野長太郎

議事參與員等



内務部第二課主掌屬 大森直輔  
 内務部第三課主掌屬 松山願武  
 内務部第一課主掌屬 山岸俊信  
 議場係警部 松隈徳太郎  
 議場係警部 小松梧樓  
 議場係警部 土田忠次  
 議場係警部 小松梧樓

四四、明治二十九年十一月通常縣會

書記官 大海原尙義  
 參事官 清野長太郎

警察部主掌警部長 吉見輝  
 監獄署主掌典獄 木名瀬禮助

内務部第二課主掌屬 大森直輔  
 内務部第二課主掌技手 佐久七郎

内務部第二課主掌屬 奥田永久  
 内務部第四課主掌屬 井上是致

内務部第五課主掌屬 江口英房  
 内務部第五課主掌屬 高木他八郎

警察部主掌警部 勝見貞靖  
 監獄署主掌監獄書記 山口精一

内務部第三課主掌屬 松山願武  
 内務部第一課主掌屬 山岸俊信

内務部第一課主掌屬 原榮次郎  
 警察部主掌警部 萩原昌朔

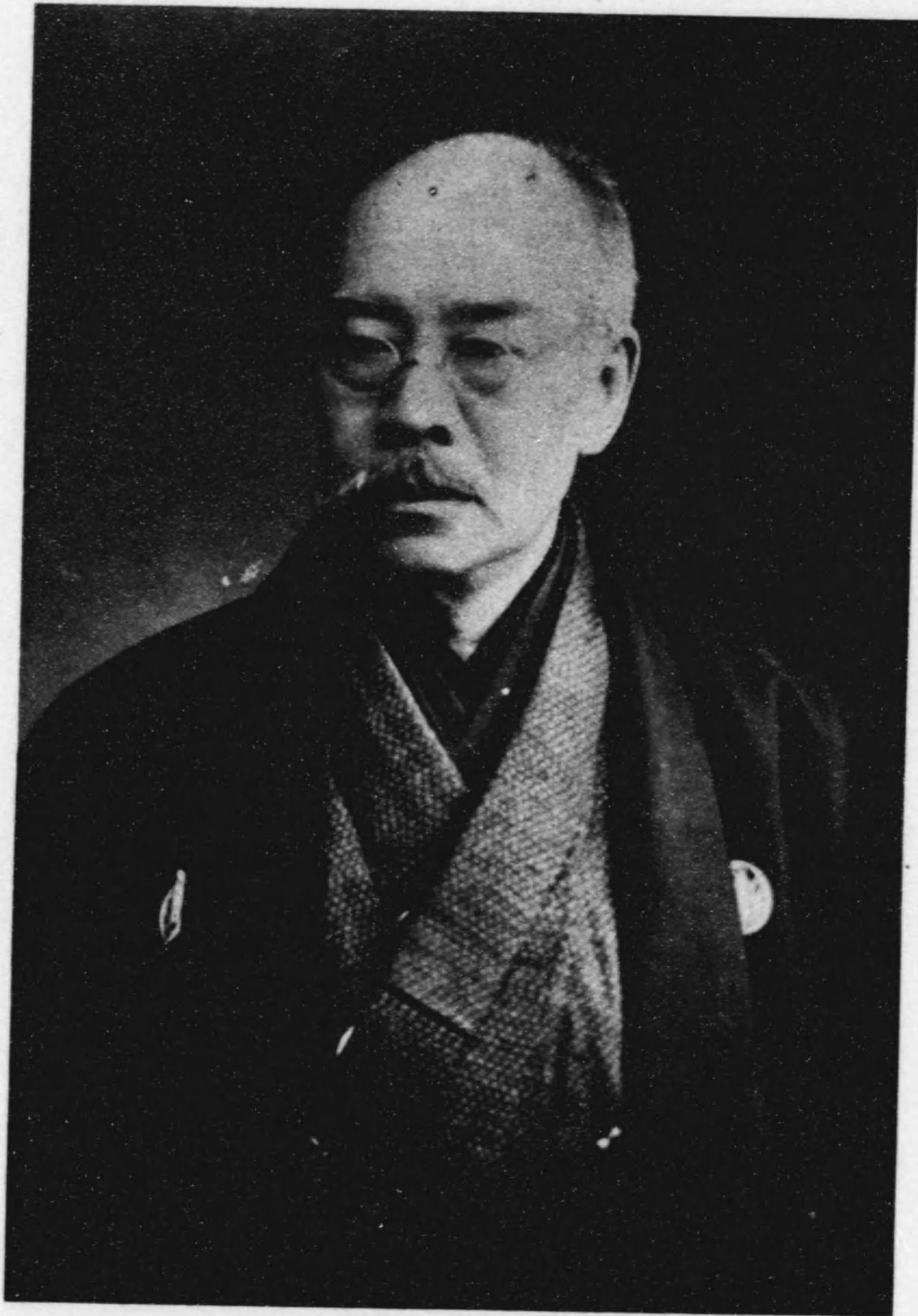
議場係警部 小松梧樓  
 議場係警部 土田忠次

四五、明治三十年二月臨時縣會



議長 上埜安太郎





議 長 關 野 善 次 郎

書 記 官 大海原尙義

內務部第一課主掌屬 山岸俊信

內務部第二課主掌屬 奧田永久

內務部第三課主掌屬 松山願武

議 場 係 警 部 土田忠次

四六、明治三十年十二月通常縣會

書 記 官 矢田部正焯

警察部主掌警部長 磯谷熊之助

監獄署主掌典獄 木名瀬禮助

內務部第一課主掌屬 山岸俊信

內務部第二課主掌屬 岡本節麿

內務部第二課主掌技手 三浦常次郎

內務部第四課主掌屬 井上是致

內務部第五課主掌屬 江口英房

議 場 係 專 務 警 部 富治三郎

參 事 官 清野長太郎

內務部第二課主掌屬 大森直輔

內務部第五課主掌屬 江口英房

議 場 係 警 部 小松梧樓

參 事 官 松田啓太郎

警察部主掌警部 萩原昌朔

監獄署主掌監獄書記 山口精一

內務部第二課主掌屬 大森直輔

內務部第二課主掌技手兼屬 奧田永久

內務部第三課主掌屬 松山願武

內務部第四課主掌屬 松本於菟

議 場 係 專 務 警 部 出野 務



四七、明治三十一年一月臨時縣會

書 記 官 矢田部正焯 參 事 官 松田啓太郎

內務部第一課主掌屬 山岸俊信 內務部第二課主掌屬 岡本節麿

內務部第二課主掌技手兼屬 奥田永久 內務部第三課主掌屬 松山願武

內務部第四課主掌屬 井上是致 內務部第五課主掌屬 江口英房

議場係專務警部 保田乙吉 議場係專務警部 荒木夙吉

議場係專務警部 富治三郎 議場係專務警部 出野 務

四八、明治三十一年九月臨時縣會

參與員未詳

議場係專務警部 澤原貞吉 議場係專務警部 富治三郎

議場係專務警部 芝山 武 議場係專務警部 南 久 豈

四九、明治三十一年十月臨時縣會

參 事 官 松田啓太郎 內務部第一課第二課主掌屬 山岸俊信

內務部第三課主掌屬 松山願武 內務部第二課主掌技手兼屬 奥田永久

內務部第五課主掌屬 山口精一 議場係專務警部 富治三郎

議場係專務警部 芝山 武 議場係專務警部 南 久 豈

五〇、明治三十一年十一月通常縣會

書 記 官 池 永 端 參 事 官 松田啓太郎

警察部主掌警部長 藤好乾吉 監獄署主掌典獄 山口卯太郎

內務部第一課第二課主掌屬 山岸俊信 內務部第二課主掌技手兼屬 奥田永久

內務部第三課主掌屬 松山願武 內務部第四課主掌屬 井上是致

內務部第四課主掌屬 松本於菟 內務部第五課主掌技師 廣瀬謙次郎

內務部第五課主掌屬 山口精一 警察部主掌警部 藤岡邦憲

監獄署主掌監獄書記 立石重司 議場係專務警部 芝山 武

議場係專務警部 富治三郎 議場係專務警部 生駒信人

議場係專務警部 南 久 豈 議場係專務警部

五一、明治三十二年二月臨時縣會

書 記 官 池 永 端 參 事 官 松田啓太郎

監獄署主掌典獄 山口卯太郎 內務部第一課第二課主掌屬 山岸俊信

內務部第二課主掌技手 奥田永久 內務部第五課主掌屬 山本龜三



議場係專務警部 富治三郎 議場係專務警部 芝山武  
議場係專務警部 生駒信人

一、以上各會の職氏名中資料なき爲議事に發言せしもの、みを記したるものもある。

議事參與員

(三) 議事參與員 (改正府縣制に據るもの)

五二、明治三十二年十月臨時縣會

書記官 津田喜代太郎 參事官 松田啓太郎 屬 荒井克一

五三、明治三十二年十一月臨時縣會

書記官 津田喜代太郎 參事官 松田啓太郎

內務部第三課主掌視學官 高田雄種 監獄署主掌典獄 山口卯太郎

內務部第一課第二課主掌屬 山岸俊信 內務部第四課主掌屬 山本龜三

警察部主掌警部 澤原貞吉 警察部主掌警部 河野隆性

縣吏 員 家田於菟之助

五四、明治三十二年十一月通常縣會

書記官 津田喜代太郎 參事官 松田啓太郎

內務部第三課主掌視學官 高田雄種 內務部第四課主掌技師 廣瀬謙次郎

警察部主掌警部長 並河一 監獄署主掌典獄 山口卯太郎

內務部第一課第二課主掌屬 山岸俊信 內務部第四課主掌屬 山本龜三

內務部第五課主掌屬 井上是致 內務部第五課主掌屬 松本於菟

警察部主掌警部 澤原貞吉 警察部主掌警部 河野隆性

監獄署主掌監獄書記 松村政記 內務部第二課主掌技師 佐久七郎

知事官房主掌屬 淺井馨 內務部第三課主掌屬 辻武夫

內務部第四課主掌屬 片岡長信 內務部第一課主掌屬 荒井克一

內務部第四課主掌屬 高木太八郎

五五、明治三十三年一月臨時縣會

書記官 津田喜代太郎 參事官 松田啓太郎

監獄署主掌典獄 山口卯太郎 內務部第一課第二課主掌屬 山岸俊信

內務部第二課主掌技師 佐久七郎 內務部第二課主掌屬 竹部彌平次

監獄署主掌監獄書記 松村政記

五六、明治三十三年九月臨時縣會



書記官	參事官
警察部主掌警部長 並河 一	監獄署主掌典獄 山口卯太郎
內務部第二課主掌技師 谷井鋼三郎	內務部第三課主掌視學官 高田雄種
警察部主掌警部 中村久光	警察部主掌警部 保田乙吉
內務部第一課主掌屬 山岸俊信	內務部第二課主掌技手 佐久七郎
內務部第三課主掌屬 掛飛 秀	
警察部主掌警部長 並河 一	內務部第二課主掌技師 谷井鋼三郎
內務部第三課主掌視學官 高田雄種	內務部第四課主掌技師 廣瀬謙次郎
警察部主掌警部 中村久光	警察部主掌警部 保田乙吉
內務部第一課主掌屬 山岸俊信	內務部第二課主掌技手 佐久七郎
內務部第三課主掌屬 掛飛 秀	內務部第四課主掌屬 加藤則有
內務部第五課主掌屬 松本於菟	

五七、明治三十三年十一月通常縣會

書記官 鈴木 隆

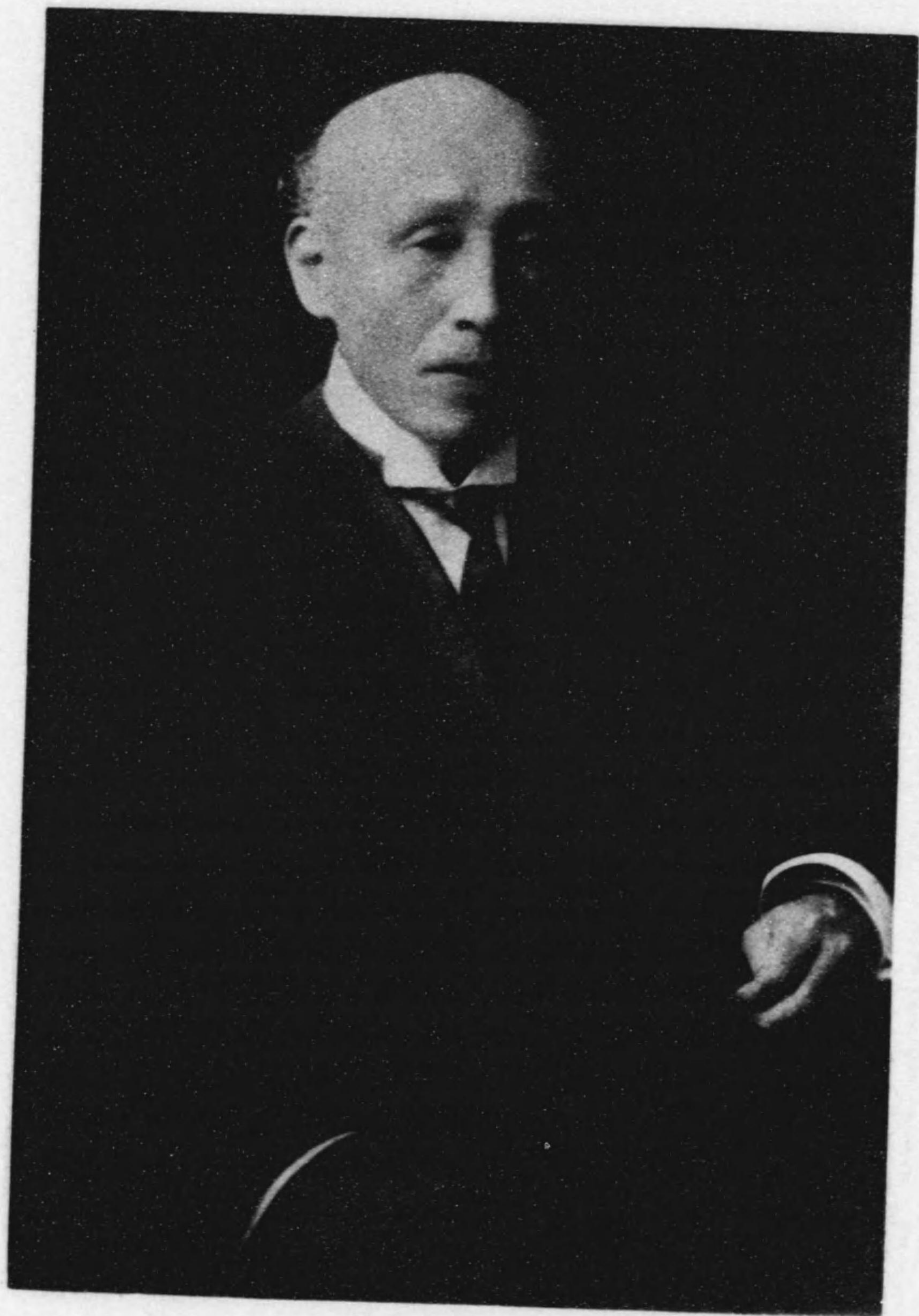
參事官 松田啓太郎

五八、明治三十四年十一月通常縣會



議 長 菅 野 新 作





議 長 岡 本 八 平

書 記 官 鈴木 隆

參 事 官 松田啓太郎

內務部第二課主掌技師 谷井鋼三郎

內務部第三課主掌視學官 高田雄種

內務部第六課主掌技師 廣瀬謙次郎

警察部主掌警部長 並河 一

內務部第一課主掌屬 荒井克一

內務部第二課主掌屬 中村光德

內務部第三課主掌屬 掛 飛 秀

內務部第四課主掌屬 加藤則有

內務部第四課主掌屬 石川 正夫

內務部第五課主掌屬 松本於菟

警察部主掌警部 保田 乙吉

警察部主掌警部 中村久光

五九、明治三十五年九月臨時縣會

書 記 官 鈴木 隆

參 事 官 松田啓太郎

內務部第二課主掌技師 谷井鋼三郎

內務部第二課主掌屬 中村光德

內務部第五課主掌屬 松本於菟

內務部第一課主掌屬 荒井克一

六〇、明治三十五年十一月通常縣會

書 記 官 鈴木 隆

參 事 官 田中正太郎

警察部主掌警部長 並河 一

內務部第二課主掌技師 谷井鋼三郎

內務部第三課主掌視學官 高田雄種

內務部第六課主掌技師 廣瀬謙次郎



内務部第二課主掌屬 荒井克一  
 内務部第三課主掌屬兼視學 掛飛 秀  
 知事官房兼内務部第四課主掌屬 小山鋼太郎  
 内務部第六課主掌屬 井口易太郎  
 警察部主掌警部 黒田懿十郎

内務部第二課主掌屬 中村光徳  
 内務部第四課主掌屬 加藤則有  
 内務部第五課主掌屬 松本於菟  
 警察部主掌警部 中村久光

六一、明治三十六年十月臨時縣會

書 記 官 鈴木 隆

参 事 官 田中正太郎

内務部第一課主掌屬 荒井克一  
 内務部第二課主掌技師 寺崎新策  
 内務部第四課主掌技師 廣瀬謙次郎  
 内務部第五課主掌屬 松本於菟  
 警察部主掌警部 黒田懿十郎

内務部第二課主掌技師 谷井鋼三郎  
 内務部第二課主掌屬 中村光徳  
 内務部第四課主掌技師 本橋保次郎  
 警察部主掌警部長 久保通猷

六二、明治三十六年十一月通常縣會

書 記 官 鈴木 隆

参 事 官 田中正太郎

知事官房主掌屬 小山鋼太郎

内務部第一課主掌屬 荒井克一

内務部第二課主掌技師 谷井鋼三郎  
 内務部第二課主掌屬 中村光徳  
 内務部第三課主掌屬 掛飛 秀  
 内務部第四課兼第六課主掌技師 廣瀬謙次郎  
 警察部主掌警部長 久保通猷  
 警察部衛生課主掌警部 黒田懿十郎

内務部第二課主掌技師 寺崎新策  
 内務部第三課主掌視學官 古川 惠  
 内務部第五課主掌屬 松本於菟  
 内務部第六課主掌屬 井口易太郎  
 警察部警務課主掌警部 狩野清常

六三、明治三十七年十一月通常縣會

書 記 官 鈴木 隆

参 事 官 田中正太郎

知事官房主掌屬 小山鋼太郎  
 内務部第二課主掌技師 杉谷幸藏  
 内務部第三課主掌視學官 古川 惠  
 内務部第四課主掌屬 佐伯範一  
 内務部第六課主掌技師 廣瀬謙次郎  
 警察部主掌警部長 久保通猷  
 警察部主掌警部 黒田懿十郎

内務部第一課主掌屬 荒井克一  
 内務部第二課主掌技師 寺崎新策  
 内務部第三課主掌屬 掛飛 秀  
 内務部第五課主掌屬 松本於菟  
 内務部第六課主掌屬 井口易太郎  
 警察部主掌警部 狩野清常



六四、明治三十八年十一月通常縣會

知事官房主掌屬	小山銅太郎	第一部主掌事務官	鈴木隆
第一部主掌技師	杉谷幸藏	第一部主掌技師	寺崎新策
第一部主掌屬	荒井克一	第一部主掌屬	桑島虎次郎
第二部主掌事務官	山村辨之助	第二部主掌屬	掛飛秀
第三部主掌事務官	石原磊三	第三部主掌技師	廣瀬謙次郎
第三部主掌技師	渡邊亥八	第三部主掌屬	佐伯範一
第四部主掌事務官	堀口助治	第四部主掌警部	狩野清常
第四部主掌警部	若泉子之吉	第四部主掌警部	廣島松太郎

六五、明治三十九年十一月通常縣會

知事官房主掌屬	加藤敬次郎
第一部主掌技師	杉谷幸藏
第一部主掌屬	桑島虎次郎
第二部主掌事務官	山村辨之助
第二部主掌技師	廣瀬謙次郎
第三部主掌技師	渡邊亥八

第三部主掌屬	佐伯範一	第四部主掌事務官	堀口助治
第四部主掌警部	狩野清常	第四部主掌警部	武田巖作

六六、明治四十年十月臨時縣會

事務官	永井金次郎	事務官	山村辨之助	屬	石坂豐一
-----	-------	-----	-------	---	------

六七、明治四十年十二月通常縣會

知事官房主掌屬	加藤敬次郎	內務部 <small>地方課</small> 主掌屬	石坂豐一
內務部土木課主掌技師	杉村博通	內務部勸業課主掌事務官	佐伯範一
內務部勸業課主掌技師	渡邊亥八	內務部勸業課主掌技師	河北一郎
內務部勸業課主掌技師	近藤茂吉	內務部勸業課主掌農業技師	岡田穰
內務部教育課主掌屬	高松覺太郎	內務部會計課主掌屬	桑島虎次郎
警察部主掌事務官	中野有光	警察部主掌警部	狩野清常
警察部主掌警部	武田巖作		

六八、明治四十一年九月臨時縣會

事務官	永井金次郎	事務官	山村辨之助
-----	-------	-----	-------



知事官房主掌屬 加藤敬次郎  
 内務部土木課主掌技師 杉村博通  
 内務部教育課主掌屬 高松覺太郎  
 警察部主掌警部 永友半藏

六九、明治四十一年十一月通常縣會

事 務 官 永井金次郎

事 務 官 伊東喜八郎

知事官房主掌屬 加藤敬次郎

内務部<sup>地方課</sup>主掌屬 石坂豐一

内務部土木課主掌技師 杉村博通

内務部<sup>土木課</sup>主掌技師 池内勉

内務部勸業課主掌技師 渡邊亥八

内務部勸業課主掌技師 近藤茂吉

内務部勸業課主掌技師 河北一郎

内務部勸業課主掌技師 岡田 穰

内務部教育課主掌屬 高松覺太郎

内務部會計課主掌屬 桑島虎次郎

警察部主掌事務官 中野有光

警察部警務課主掌警部 永友半藏

警察部<sup>保安課</sup>主掌警部 瀧 武二郎

七〇、明治四十二年七月臨時縣會

内務部主掌事務官 永井金次郎

内務部主掌事務官 伊東喜八郎



議 長 大 橋 十 右 衛 門





平 覺 丘 森 長 議

知事官房主掌屬 加藤敬次郎  
 內務部土木課主掌技師 杉村博通  
 內務部教育課主掌屬 高松覺太郎  
 警察部主掌事務官 大芝惣吉  
 警察部保安課主掌警部 瀧 武二郎  
 內務部地方課主掌事務官補 石坂豐一  
 內務部會計課主掌屬 桑島虎次郎  
 內務部勸業課主掌技師 近藤茂吉  
 警察部警務課主掌警部 永友半藏

七、明治四十二年十一月通常縣會

內務部主掌事務官 永井金次郎  
 知事官房主掌屬 加藤敬次郎  
 內務部土木課主掌技師 杉村博通  
 內務部教育課主掌屬 高松覺太郎  
 內務部勸業課主掌技師 渡邊亥八  
 內務部勸業課主掌技師 岩下龍太郎  
 警察部警務課主掌警部 永友半藏  
 警察部衛生課主掌警部 南 久 豈  
 內務部主掌事務官 伊東喜八郎  
 內務部<sup>地方</sup>社寺兵事課主掌事務官補 石坂豐一  
 內務部會計課主掌屬 桑島虎次郎  
 內務部勸業課主掌技師 永岡 堯  
 內務部勸業課主掌技師 近藤茂吉  
 警察部主掌事務官 大芝惣吉  
 警察部保安課主掌警部 佐野國實

七、明治四十三年二月臨時縣會



事務官 永井金次郎 事務官 伊東喜八郎 事務官補 石坂豐一  
技師 杉村博通

七三、明治四十三年十一月通常縣會

事務官 永井金次郎 事務官 大芝惣吉  
事務官 本間利雄 事務官補 石坂豐一  
知事官房主掌屬 加藤敬次郎 內務部土木課主掌技師 池内勉  
內務部會計課主掌屬 桑島虎次郎 內務部教育課主掌屬 高松覺太郎  
內務部勸業課主掌技師 永岡堯 內務部勸業課主掌技師 王居伊太郎  
內務部勸業課主掌技師 近藤茂吉 內務部勸業課主掌技師 岩下龍太郎  
警察部警務課主掌警部 永友半藏 警察部保安課主掌警部 佐野國實  
警察部衛生課主掌警部 南久豈

七四、明治四十三年十二月臨時縣會

事務官 永井金次郎 事務官 本間利雄 事務官補 石坂豐一  
技師 池内勉 屬 桑島虎次郎

七五、明治四十四年八月臨時縣會

事務官 永井金次郎 事務官 本間利雄 事務官補 石坂豐一  
技師 池内勉 技師 岩下龍太郎

七六、明治四十四年十月臨時縣會

事務官 永井金次郎 事務官 本間利雄 事務官補 石坂豐一

七七、明治四十四年十一月通常縣會

事務官 永井金次郎 事務官 成毛基雄  
事務官 本間利雄 事務官補 石坂豐一  
知事官房主掌屬 山内貞之 內務部土木課主掌技師 池内勉  
內務部會計課主掌屬 桑島虎次郎 內務部教育課主掌事務官補 藤山竹一  
內務部勸業課主掌技師 永岡堯 內務部勸業課主掌技師 岩下龍太郎  
內務部勸業課主掌技師 近藤茂吉 內務部勸業課主掌技師 土居伊太郎  
警察部警務課主掌警部 永友半藏 警察部保安課主掌警部 佐野國實  
警察部衛生課主掌警部 南久豈

七八、大正元年十一月臨時縣會

事務官 永井金次郎 事務官 本間利雄 事務官補 石坂豐一



技師 池内 勉

七九、大正元年十一月通常縣會

事務官 永井金次郎

事務官 本間利雄

知事官房主掌 山内貞之

内務部會計課主掌事務官補 桑島虎次郎

内務部勸業課主掌技師 永岡 堯

内務部勸業課主掌技師 土居伊太郎

警察部警務課主掌警視 藤山竹一

警察部衛生課主掌警部 南 久 登

八〇、大正二年十一月通常縣會

内務部 長 飯尾藤次郎

理事官 下村壽一

内務部教育課主掌理事官 伊藤仁吉

内務部土木課主掌技師 和田堯春

事務官 成毛基雄

事務官 補 石坂豐一

内務部教育課主掌事務官補 大森貞治郎

内務部土木課主掌技師 池内 勉

内務部勸業課主掌技師 岩下龍太郎

内務部勸業課主掌技師 近藤茂吉

警察部保安課主掌警部 跡部鶴平

警察部 長 白男川讓介

知事官房主掌 山内貞之

内務部會計課主掌理事官 桑島虎次郎

内務部勸業課主掌理事官 甘粕達藏

内務部勸業課主掌技師 永岡 堯

内務部勸業課主掌技師 土居伊太郎

内務部地方課主掌 矢郷清太郎

警察部保安課主掌警部 跡部鶴平

八一、大正三年十一月通常縣會

内務部 長 飯尾藤次郎

理事官 下村壽一

内務部會計課主掌理事官 桑島虎次郎

内務部勸業課主掌理事官 伊藤貞次

内務部勸業課主掌技師 岩下龍太郎

内務部勸業課主掌技師 近藤茂吉

警察部衛生課主掌警部 廣島松太郎

八二、大正三年十二月臨時縣會

内務部長 飯尾藤次郎

理事官 下村壽一

屬 稻澤竹次郎

内務部勸業課主掌技師 岩下龍太郎

内務部勸業課主掌技師 近藤茂吉

警察部警務課主掌警視 平田紀一

警察部衛生課主掌警部 廣島松太郎

警察部 長 齊藤行三

内務部教育課主掌理事官 伊藤仁吉

内務部土木課主掌技師 和田堯春

内務部勸業課主掌技師 高橋浩造

内務部勸業課主掌技師 土居伊太郎

警察部警務課主掌警視 平田紀一

警察部保安課主掌警部 跡部鶴平

技師 和田堯春

屬 矢郷清太郎



八三、大正四年七月臨時縣會

內務部長 飯尾藤次郎 理事官 下村壽一 理事官 伊藤貞次

技師 近藤茂吉

八四、大正四年十月臨時縣會

內務部長 飯尾藤次郎 理事官 下村壽一

八五、大正四年十一月通常縣會

內務部長 飯尾藤次郎 警察部長 齊藤行三

理事官 下村壽一 內務部勸業課主掌理事官 伊藤貞次

內務部會計課主掌理事官 桑島虎次郎 知事官房主掌理事官 渡邊二郎

內務部土木課主掌技師 杉村博通 內務部勸業課主掌技師 岩下龍太郎

內務部勸業課主掌技師 高橋浩造 內務部勸業課主掌技師 近藤茂吉

內務部勸業課主掌農業技師 土居伊太郎 內務部地方課主掌屬 矢郷清太郎

警察部衛生課主掌警視 平田紀一 警察部警務課主掌警部 永友國久

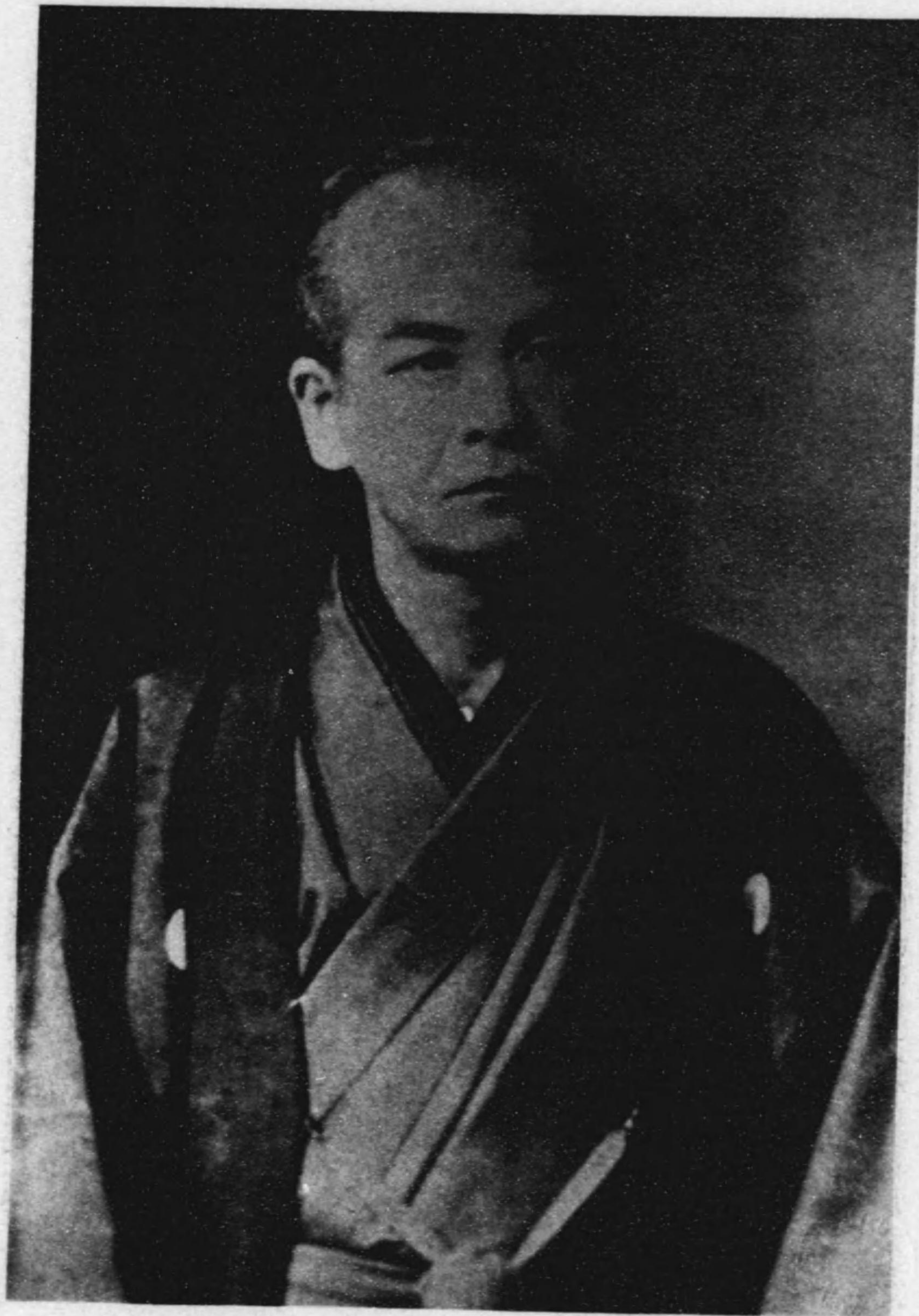
警察部保安課主掌警部 小松巳生

八六、大正五年十二月通常縣會



議 長 根 尾 宗 四 郎





議 長 吉 田 久 兵 衛

內 務 部 長 飯 尾 藤 次 郎

警 察 部 主 掌 警 察 部 長 齊 藤 行 三

內 務 部 會 計 課 主 掌 理 事 官 桑 島 虎 次 郎

內 務 部 土 木 課 主 掌 技 師 杉 村 博 通

警 察 部 警 務 課 主 掌 警 部 永 友 國 久

警 察 部 保 安 課 主 掌 警 部 桐 山 信 之

八 七、 大 正 六 年 三 月 臨 時 縣 會

內 務 部 長 飯 尾 藤 次 郎

內 務 部 勸 業 課 主 掌 理 事 官 石 坂 豐 一

內 務 部 地 方 課 主 掌 屬 矢 鄉 清 太 郎

八 八、 大 正 六 年 十 二 月 通 常 縣 會

內 務 部 長 飯 尾 藤 次 郎

理 事 官 馬 野 精 一

內 務 部 會 計 課 主 掌 理 事 官 桑 島 虎 次 郎

內 務 部 土 木 課 主 掌 技 師 杉 村 博 通

理 事 官 馬 野 精 一

內 務 部 勸 業 課 主 掌 理 事 官 石 坂 豐 一

內 務 部 會 計 課 主 掌 理 事 官 渡 邊 二 郎

內 務 部 地 方 課 主 掌 屬 矢 鄉 清 太 郎

警 察 部 衛 生 課 主 掌 技 師 駒 形 重 光

理 事 官 馬 野 精 一

內 務 部 土 木 課 主 掌 技 師 杉 村 博 通

警 察 部 長 齊 藤 行 三

內 務 部 勸 業 課 主 掌 理 事 官 石 坂 豐 一

知 事 官 房 主 掌 理 事 官 渡 邊 二 郎

內 務 部 地 方 課 主 掌 屬 矢 鄉 清 太 郎



警察部保安課主掌警視 伊藤武彦  
警察部警務課主掌警部 羽根芳太郎

警察部衛生課主掌警部 桐山信之

八九、大正六年十二月臨時縣會

內務部 部長 飯尾藤次郎

理事官 馬野精一

內務部學務課主掌理事官 渡邊二郎

內務部土木課主掌技師 杉村博通

內務部地方課主掌屬 矢郷清太郎

九〇、大正七年七月臨時縣會

內務部 部長 森本泉

警察部 部長 齊藤行三

理事官 馬野精一

內務部勸業課主掌理事官 石坂豐一

內務部勸業課主掌理事官 谷龍之助

內務部地方課主掌屬 矢郷清太郎

九一、大正七年十一月通常縣會

內務部 部長 森本泉

警察部 部長 白上佑吉

理事官 石坂豐一

理事官 龍之助

技師 土屋峰吉

屬 稻澤竹次郎

警部 桐山信之

警部 羽根芳太郎

警部 官内石直

九二、大正八年八月臨時縣會

內務部 部長 森本泉

理事官 坂本暢

九三、大正八年十月臨時縣會

內務部 部長 森本泉

警察部長 佐藤復三

九四、大正八年十二月通常縣會

內務部 部長 森本泉

警察部長 佐藤復三

理事官 谷龍之助

理事官 坂本暢

技師 土屋峰吉

屬 金尾宗義

警部 林宣之

屬 三村宣元

九五、大正八年十二月臨時縣會

內務部 部長 森本泉

理事官 坂本暢

技師 土屋峰吉

九六、大正九年二月臨時縣會

內務部 部長 森本泉

警察部長 佐藤復三

理事官 坂本暢

理事官 稻澤竹次郎



第二章 縣會の組織

技師 菅良二

技師 近藤茂吉

屬 三村宣元

一〇二

九七、大正九年十一月通常縣會

内務部長

森本泉

警察部長 今村正美

理事官 芝辻一郎

取扱

理事官 谷龍之助

理事官 坂本暢

理事官 稻澤竹次郎

技師 前田奥藏

屬 金尾宗義

屬 三村宣元

警部 林宣之

警部 西田爲藏

九八、大正十年十一月通常縣會

内務部長

淺利三朗

警察部長 對馬郁之進

理事官 芝辻一郎

取扱

理事官 坂本暢

理事官 双川喜一

技師 吉武正八

屬 中田德治郎

屬 金尾宗義

屬 三村宣元

警部 家森文四郎

警部 林宣之

九九、大正十一年十一月通常縣會

内務部長

淺利三朗

警察部長 坂間棟治

理事官 常賀松之助

取扱

理事官 双川喜一

理事官 坂本藤八

理事官 藤原孝夫

警視 官野省三

技師 吉武正八

技師 白幡兼

電氣局技師長 大山勝三郎

電氣局參事 深井康邦

屬 中田德治郎

屬 金尾宗義

屬 三村宣元

一〇〇、大正十二年二月臨時縣會

内務部長

淺利三朗

理事官 常賀松之助

理事官 坂本藤八

技師 吉武正八

道路主事 安永登走

屬 佐々木重成

一〇一、大正十二年七月臨時縣會

内務部長代理

坂間棟治

理事官 坂本藤八

理事官 藤原孝夫

警察部長

双川喜一

技師 吉武正八

技師 川村長作

技師 竹森一之

屬 佐々木重成

一〇二、大正十二年十月臨時縣會

内務部長代理

坂間棟治

理事官 坂本藤八

一〇三、大正十二年十一月通常縣會

内務部長

淺利三朗

警察部長 坂間棟治

電氣局長 依田銈次郎

理事官 常賀松之助

理事官 双川喜一

理事官 坂本藤八

理事官 藤原孝夫

警視 安永登走

技師 吉武正八



第二章 縣會の組織

一〇四

技師 白幡 兼 電氣局技師長 大山勝三郎  
 財務主事 石原 拓 屬 石井謙治

電氣局參事 深井康邦  
 屬 佐々木重成

一〇四、大正十三年九月臨時縣會

內務部長 後藤多喜藏 警察部長 金森太郎

理事官 松山禎邦

理事官 藤原孝夫

理事官 龜卦川 浩

警視 安永登走

技師 吉武正八

技師 白幡 兼

屬 石井謙治

一〇五、大正十三年十一月通常縣會

內務部長

警察部長 金森太郎

理事官 松山禎邦

理事官 藤原孝夫

理事官 龜卦川 浩

理事官 津名義房

警視 安永登走

技師 吉武正八

技師 白幡 兼

電氣局技師長 大山勝三郎

電氣局參事 深井康邦

屬 石井謙治

一〇六、大正十四年十一月通常縣會

書記官 後藤多喜藏

書記官 金森太郎

書記官 荒卷正信



副議長 神保東作



副議長 井城與八郎





副議長 武部堅



副議長 田村惟昌

地方事務官 松山禎邦 地方事務官 龜卦川 浩  
 地方技師 吉武正八 衛生技師 白幡 兼  
 電氣局參事 深井康邦 屬 石井謙治 屬  
 屬 佐々木重成 警 部 谷 誠 致  
 一〇七、大正十五年六月臨時縣會  
 後藤多喜藏 (一人ノミカ未詳)  
 一〇八、大正十五年十一月通常縣會  
 書記官 福田虎龜 書記官 多久安信  
 地方事務官 松山禎邦 地方事務官 龜卦川 浩  
 地方事務官 津名義房 地方事務官 埴生兼三  
 地方技師 吉武正八 地方技師 白幡 兼  
 電氣局參事 深井康邦 屬 中本覺藏 屬  
 技 手 森井周義 警 部 谷 誠 致  
 一〇九、昭和二年十月臨時縣會  
 書記官 齋藤直橋 地方事務官 津名義房 屬  
 宮崎和清



一一〇、昭和二年十二月通常縣會

書記官	齋藤直橋	書記官	中谷秀	書記官	野田四郎
地方事務官	松山禎邦	地方事務官	中島靈圓	地方事務官	中田徳治郎
地方事務官	津名義房	地方事務官	石井謙治	地方事務官	西井一孝
地方事務官	清水虎雄	地方技師	小原光信	地方技師	川村長作
地方技師	平山長藏	電氣局技師長	大山勝三郎	電氣局參事	深井康邦
道路主事	久米壽七	屬	宮崎和清	屬	中本覺藏
警部	上野榮次郎	技手	森井周義		

一一一、昭和三年三月臨時縣會

書記官	齋藤直橋	地方事務官	津名義房
都市計畫畫事務嘱託	赤司貫一	屬	宮崎和清

一一二、昭和三年十一月通常縣會

書記官	齋藤直橋	書記官	松本三郎	書記官	野田四郎
地方事務官	松山禎邦	地方事務官	中島靈圓	地方事務官	中田徳治郎
地方事務官	津名義房	地方事務官	西井一孝	地方事務官	石井謙治

地方事務官	清水虎雄	地方技師	川村長作	地方技師	木村憲七郎
地方技師	平山長藏	電氣局技師長	大山勝三郎	電氣局參事	深井康邦
屬	宮崎和清	屬	中本覺藏	地方警視	後藤眞三男
警部	上野榮次郎	技手	森井周義		

一一三、昭和四年十二月通常縣會

書記官	齋藤直橋	書記官	崎山省吾	書記官	瀬谷薫
地方事務官	田中弘吉	地方事務官	津名義房	地方事務官	桃井直美
地方事務官	石井謙治	地方事務官	清水虎雄	地方事務官	佐々木重成
地方事務官	柴田高義	地方技師	川村長作	地方技師	木村憲七郎
地方技師	平山長藏	地方統計主事	森井周義	電氣局技師長	大山勝三郎
電氣局參事	深井康邦	屬	針山直次郎	屬	前田治吉
警部	今井太作				

一一四、昭和五年十二月通常縣會

書記官	小西善次郎	書記官	崎山省吾	書記官	江邊清夫
地方事務官	田中弘吉	地方事務官	津名義房	地方事務官	桃井直美



地方事務官 柳川久雄  
 地方事務官 柴田高義  
 地方技師 平山長藏  
 電氣局參事 深井康邦  
 警部 今井太作  
 地方事務官 石井謙治  
 地方技師 川村長作  
 地方統計主事 森井周義  
 電氣局技師長 大山勝三郎  
 地方事務官 佐々木重成  
 地方技師 木村憲七郎  
 電氣局技師長 大山勝三郎  
 地方事務官 前田治吉

一一五、昭和六年十月臨時縣會

書記官 小西善次郎  
 地方事務官 津名義房  
 地方事務官 福田熊一

屬 前田治吉

一一六、昭和六年十一月通常縣會

書記官 小西善次郎  
 地方事務官 田中弘吉  
 地方事務官 石井謙治  
 地方事務官 福田熊一  
 地方技師 平山長藏  
 電氣局參事 深井康邦  
 書記官 崎山省吾  
 地方事務官 桃井直美  
 地方事務官 佐々木重成  
 地方技師 川村長作  
 地方統計主事 森井周義  
 電氣局技師長 大山勝三郎  
 地方事務官 江邊清夫  
 地方事務官 柳川久雄  
 地方事務官 柴田高義  
 地方技師 木村憲七郎  
 電氣局技師長 大山勝三郎  
 地方事務官 前田治吉

警部 今井太作

一一七、昭和七年一月臨時縣會

書記官 小西善次郎  
 地方技師 木村憲七郎  
 地方事務官 佐々木重成  
 地方事務官 福田熊一

一一八、昭和七年七月臨時縣會

書記官 田島義士  
 地方技師 川村長作  
 地方事務官 佐々木重成  
 地方事務官 福田熊一

一一九、昭和七年九月臨時縣會

書記官 田島義士  
 地方事務官 柳川久雄  
 地方事務官 福田熊一  
 地方技師 前田治吉  
 書記官 遠山信一郎  
 地方事務官 佐々木重成  
 地方技師 川村長作  
 地方事務官 松木茂一  
 地方事務官 吉田政雄  
 地方技師 春藤眞三

一二〇、昭和七年十一月通常縣會

書記官 田島義士  
 地方事務官 諸橋襄  
 書記官 稻垣潤太郎  
 地方事務官 佐々木重成  
 書記官 遠山信一郎  
 地方事務官 宮崎和清



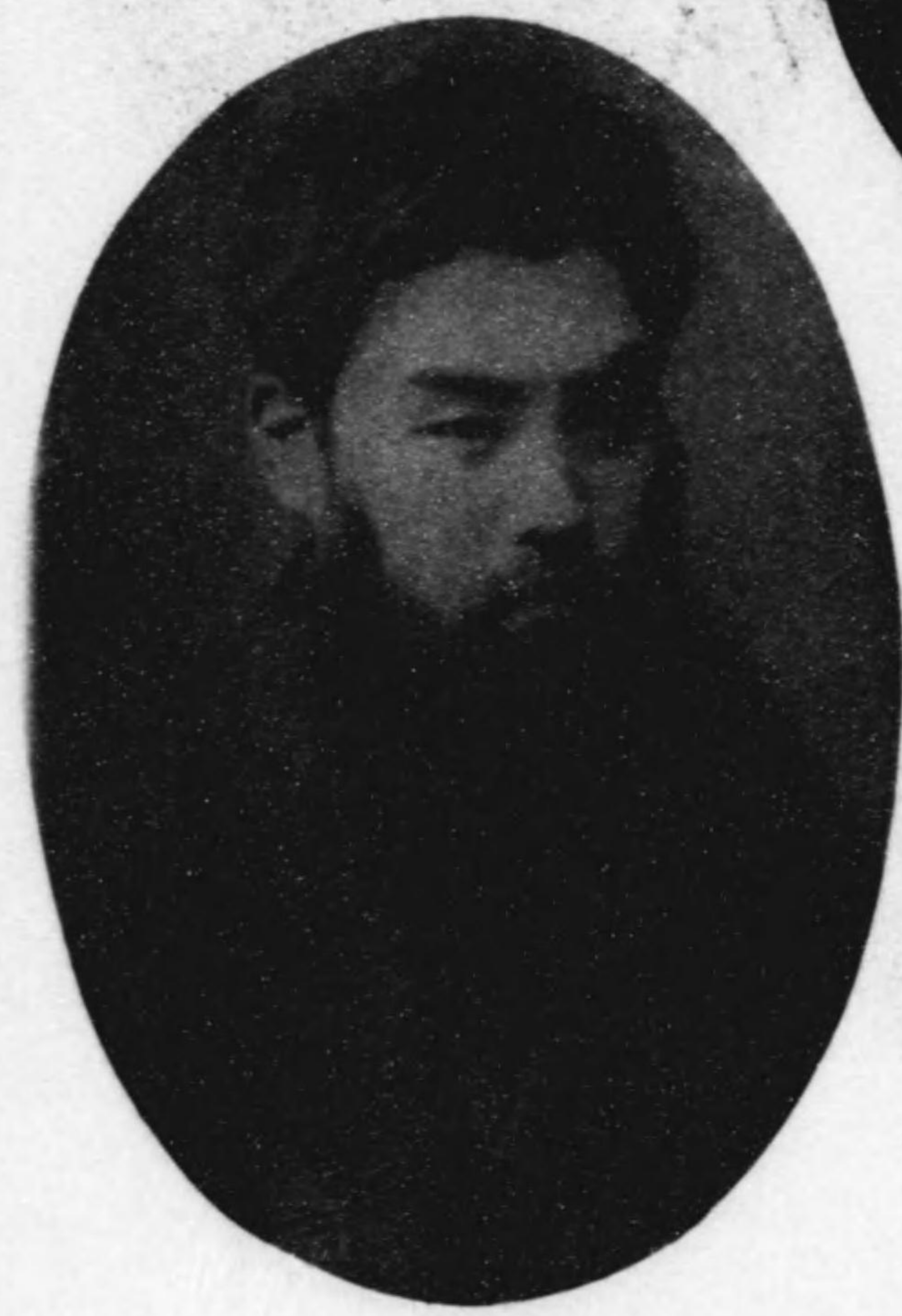
第二章 縣會の組織

一一〇

地方事務官	吉田政雄	地方事務官	田中榮一	地方事務官	福田熊一
地方事務官	河野義信	地方技師	川村長作	地方技師	春藤眞三
地方技師	平山長藏	屬	針山直次郎	屬	前田治吉
警部	幡谷榮藏	電氣局長	小西善次郎	電氣局參事	石井謙治
書記官	田島義士	書記官	遠山信一郎	地方事務官	佐々木重成
地方事務官	吉田政雄	地方事務官	田中榮一	地方事務官	福田熊一
地方事務官	河野義信	地方技師	川村長作	地方技師	春藤眞三
屬	前田治吉				
書記官	田島義士	地方事務官	佐々木重成	電氣局長	小西善次郎
電氣局參事	石井謙治	電氣局參事補源	庄作	電氣局技師	長井要藏
電氣局技師	金野賢彌	屬	三由正敏		
書記官	田島義士	書記官	稻垣潤太郎	書記官	遠山信一郎



副議長 石坂嘉長



副議長 阿部欣次





副議長  
黒田次郎右衛門



副議長  
荒木文平

電氣局長	小西善次郎	地方事務官	織田智	地方事務官	小玉道雄
地方事務官	佐々木重成	地方事務官	宮崎和清	地方事務官	田中榮一
地方事務官	吉田政雄	地方事務官	西尾森太郎	地方事務官	河野義信
地方事務官	針山直次郎	地方視學官	磯幸次郎	地方技師	川村長作
地方技師	荒木榮二	地方技師	平山長藏	地方技師	和田尹
電氣局參事	石井謙治	屬	滝田芳藏	屬	前田治吉
屬	三山正敏	警部	幡谷榮藏		
	一二四、昭和九年五月臨時縣會				
書記官	田島義士	書記官	遠山信一郎	地方事務官	小玉道雄
地方事務官	佐々木重成	地方事務官	吉田政雄	地方事務官	西尾森太郎
地方事務官	河野義信	地方技師	川村長作	地方技師	荒木榮二
地方技師	佐藤正秀	屬	三山正敏		
	一二五、昭和九年十月臨時縣會				
書記官	田島義士	書記官	遠山信一郎	書記官	松原久人
地方事務官	佐々木重成	地方技師	川村長作	地方技師	荒木榮二



三山正敏

一二六、昭和九年十二月通常縣會

書記官	田島義士	書記官	遠山信一郎	書記官	松原久人
地方事務官	織田智	地方事務官	小玉道雄	地方事務官	佐々木重成
地方事務官	宮崎和清	地方事務官	吉田政雄	地方事務官	西尾森太郎
地方事務官	河野義信	地方事務官	針山直次郎	地方事務官	谷口寛
地方視學官	磯幸次郎	地方警視	吉田忠一	地方技師	川村長作
地方技師	荒木榮二	地方技師	佐藤正秀	地方技師	平山長藏
電氣局長	小西善次郎	電氣局參事	石井謙治	地方統計主事	滝田芳藏
屬	前田治吉	屬	三山正敏	警部	桃井菊次郎
書記官	小早川貞登	地方事務官	佐々木重成	地方技師	關谷新造
電氣局長	小西善次郎	電氣局技師	長井要藏	電氣局技師	金野賢彌
電氣局參事	石井謙治	電氣局參事	源庄作	屬	三山正敏
一二七、昭和十年八月臨時縣會					
一二八、昭和十年十月臨時縣會					

書記官 小早川貞登

地方事務官 佐々木重成

屬 三山正敏

一二九、昭和十年十二月通常縣會

書記官	小早川貞登	書記官	松岡四郎	書記官	山田武雄
書記官	遠藤直人	地方事務官	小玉道雄	地方事務官	鶴田義隆
地方事務官	佐々木重成	地方事務官	宮崎和清	地方事務官	西尾森太郎
地方事務官	針山直次郎	地方事務官	佐々木厚義	地方事務官	緒方正太郎
地方警視	瓜生順良	地方技師	川村長作	地方技師	佐藤正秀
地方技師	平山長藏	地方技師	關谷新造	電氣局長	小西善次郎
電氣局參事	石井謙治	地方統計主事	滝田芳藏	屬	前田治吉
屬	三山正敏				
一二〇、昭和十一年十一月通常縣會					
書記官	小早川貞登	書記官	松岡四郎	書記官	遠藤直人
書記官	竹谷源太郎	地方事務官	鶴田義隆	地方事務官	佐々木重成
地方事務官	宮崎和清	地方事務官	針山直次郎	地方事務官	佐々木厚義
地方事務官	緒方正太郎	地方事務官	澁江操一	地方事務官	前田治吉













副議長  
澤木又八

同	年	十一月	通常縣會	同
明治四十一年	九	月	臨時縣會	同
同	年	十二月	通常縣會	同
明治四十二年	七	月	臨時縣會	同

初回の縣會議事堂

第二項 明治二十年竣工縣會議事堂

明治二十年更に縣會議事堂が建築せられ、恰も通常縣會開會中たる十一月二十二日に於て、その落成式が行はれた。國重知事の告辭、島田議長の答辭は左の如く、其の他富山日報社員井上政寛の祝辭、演説、上新川郡戸長總代戸長神保東作、射水郡横田村外九ヶ村戸長堀二作、同郡高岡片原町等戸長川上宜方等二人連名、礪波郡太田村等戸長吉川直矩等十二人戸長總代連名下新川郡戸長總代戸長田村文平、婦負郡各戸長總代戸長中林嘉一の祝辭朗讀があつた。

告辭

富山縣會議事堂新築功ヲ奏シ乃チ本日ヲトシ落成ノ式ヲ舉グ回顧スレバ明治十六年五月置縣ノ事アリシヨリ茲ニ五年縣會ヲ開設スルヤ毎ニ社寺若クハ學校ヲ假用シ其



不便言フベカラザルモノアリ故ヲ以テ昨年通常縣會ノ頃是ヲ經營スル議案ヲ發シ今年五月續クニ補足金ノ議案ヲ以テス議員諸君ノ賢明ナル其必要ヲ感ジ開會二回途ニ此ノ輪奐見ルベキノ議堂ヲ建營スルニ至レリ古謂ハズヤ工其事ヲ能クセント欲セバ必ズ先ヅ其器ヲ利ニスト此堂ノ完全既ニ斯ノ如シ議事ノ便益ヲ來ス豈ニ尠少ナランヤ抑モ地方稅ノ支出タル頻年顆多ヲ告ゲ人民ノ負擔モ亦重シト謂フベシ而シテ此完全ト便益ナル者ヲ併領ス豈是ニ對スルノ效績ヲ擧ゲザルベケンヤ將來益々縣務ノ進捗ヲ謀リ議案ノ精確ヲ勉ムルハ正文ノ宜シク留意スベキ所ナリ諸君モ亦民度ノ耐否ヲ量リ事務ノ緩急ヲ考ヘ相俱ニ協和切實ヲ主トシ以テ全縣ノ經濟ヲ立テナバ庶幾ハ人民ノ素望ニ副ヒ其福祉ヲ保持シ始メテ當ニ效績ヲ見ルベキカ聊カ念望ノ意ヲ叙シ告詞ト爲ス

明治二十年十一月二十二日

富山縣知事從五位勳六等 國 重 正文

## 答 辭

生命財產榮譽ヲ全ウスルハ人ノ權利也權利ハ幸福也道理ナクンバ秋毫モ相害セズ之ヲ社會組織ノ原則トス此原則ヲ施行スルモノ則政府ナリ租稅ヲ納レ兵役ニ服スルハ

人ノ義務也義務ハ痛苦ナリ故ナクンバ公侯モ亦免ル能ハズ即チ是レ政府ノ因リテ成立スル所政事モ亦之ニ資リテ行ハレ人權モ亦之ニ藉リテ全タシ租稅ハ則吾人ノ幸福ヲ増進セシムル所以ノモノニ外ナラズ茲ニ租稅ヲ納メ茲ニ人權ヲ全ウス吾人ノ幸福之ヨリ完全ナルモノアラザル也租稅ハ人ノ財產也財產ハ粒々辛苦ノ華ニアラザレバ經營努力ノ果ニ外ナラズ此財產ノ幾部ヲ擧ゲテ權利ヲ完ウセントス吾人ノ幸福ヲ求ムル夫レ甚ダ急ナリ冗ヲ汰シ繁ヲ省キ不急ヲ起サズ進取吝ナラズ孜々トシテ行フ所ノモノ一トシテ社會多數ノ幸福ヲ得ルノ目的ナラザルハ無シ吾人ハ圓滑ノ政務ヲ望ムモノナリ政府モ亦圓滑ノ政務ヲ努ムルモノ也是ニ於テ乎經濟ノ事之ヲ人民ニ參與セシメザルベカラズ是レ代議制度ノ起ル所以ナリ吾人地方議會ニ於テ何等ノ利益ヲ享有スル乎議會ハ社會ノ反映也其現象スル所ハ社會ノ現象ナリ社會ヲ縮少シタルモノニ外ナラザル也凡ソ自ラ節スルハ他ヲ節セシムルヨリ詳ナリ自ラ進ムハ他ヲ進マシムルヨリ速ナリ自ラ痛苦ヲ感ズルハ他ヲシテ痛苦ヲ感ゼシムルヨリ密也密ナルガ故ニ漏レズ速ナルガ故ニ踏マズ詳ナルガ故ニ失フコトナシ是故ニ吾人ハ議會ト其趣ヲ同ジウス然レバ則吾人ノ現況ニ應ジ吾人ノ權利ヲ全ウスルニ於テ緩急進退毫モ迷ハズ實ニ得失相償フノ肯綮ヲ得セシム是則地方議會ノ吾人ニ直接必要ヲ感ゼシムル



所以ナリトス回顧スレバ明治十六年富山縣ヲ置カル爾來本年ニ至ル五タビ年ヲ閱ス其間開ク處ノモノ通常臨時合セテ十四回ニ及ブ或ハ寺院ニ學校ニ縣廳構内ニ歳々所ヲ異ニス時ニ寺院ヲ借ルガ故ニ禮拜群集ノ雜踏ニ逢ヒ或ハ學校ニ開クガ故ニ授業啣暗ノ喧噪ニ妨ゲラレタルコト年々皆然ラザルハナシ抑モ議會ハ假設ノモノニアラザル也永遠期スベキ處ノモノナリ吾人ト政府ト最愛スル所ノモノ也何ゾ雜踏喧噪ノ間ニ開クベキモノナランヤ舛裁美ナラザルガ故ニアラズ不便ノ耐ヘザルモノアレバナリ不便ノ耐ヘザルモノアルノミナラズ而モ議會ノ資格ヲ損スルヲ奈何セン是則チ議事堂新築ノ止ムヲ得ザル所以ナリ壹萬九百餘圓ノ地方稅ハ吾人ノ辛苦勞力ノ一部ナリ額必ズ少ナリトナサズ吾人實ニ之ヲ輕舉ニ附セズ加フルニ吾人議會開設以來未ダ數年ナラザルニ曰ク飛驒街道ノ開墾曰ク高岡伏木間ノ道路改築曰ク富山東岩瀬間道路ノ改築曰ク縣監獄ノ建築爲メニ既ニ數萬圓ノ支出ヲナシタリ民間ヲ省ミレバ厘錢モ吝マサルベカラズ而シテ議事堂ノ新築ハ吾人費セシテ吝マザリシハ實ニ不得已モニアリテ然リシナリ當局者亦銳意苦辛本年四月ニ起工シ十一月十六日ヲ以テ竣成セリ其經營ノ慘憺ナリシハ吾人ノ深ク謝スル所ナリ今ヤ國重本縣知事閣下蒞ミテ竣成式ヲ舉ゲ懇篤ノ告詞ヲ以テセラル亦議會ノ面目ナリ嗚呼仰イテ輪奐宏壯タル構造ヲ

看ヨ吾人ヲシテ眩目セシムルニアラズヤ伏シテ地盤ノ平坦基礎ノ堅固ヲ看ヨ吾人ヲシテ快活ノ氣象ヲ起サシムルニアラズ乎越ノ水神通最長シ堂後ニ流レテ決々タリ此構造ヲ觀此流ヲ觀ル永遠無窮以テ擬スベキカ越ノ山立嶽最高シ堂前ニ聳エテ巍々タリ此構造ヲ觀此高キヲ觀ル千歳ノ偉觀共ニ比スベシ如此夫レ吾人ノ其輪奐タル其宏壯タルヲ觀テ喜ブ所以ノモノ他ナシ此堂ノ永久ニ存スルハ議會ノ益永遠ニ其議權ノ日々ニ廣カルベキヲ信ズレバ也彼ノ人民ノ幸福トハ何ゾ彼ノ痛苦困難トハ何ゾ議權消長ノ反照ニ外ナラザル也語ヲ換フレバ經濟ノ料理如何ニ外ナラザル也今後此堂ニ會スルモノ其本分ヲ忘ルベカラズ吾人ノ幸福ヲ忘ルベカラズ彼ノ壹萬圓ノ支出ヲ忘ルベカラズ若シソレ之ヲ忘ルルトセンカ即チ議事堂ハ美麗ナル一建築ノミ巨多ノ金額モ亦徒費ニ歸シテ止ムヲ視ンノミ不肖孝之等今日此盛典ニ陪ス孝之等ノ榮トスル所ナリ聊カ所思ヲ述ベテ答辭ニ代フ

明治二十年十一月二十二日

富山縣會議長 島 田 孝 之

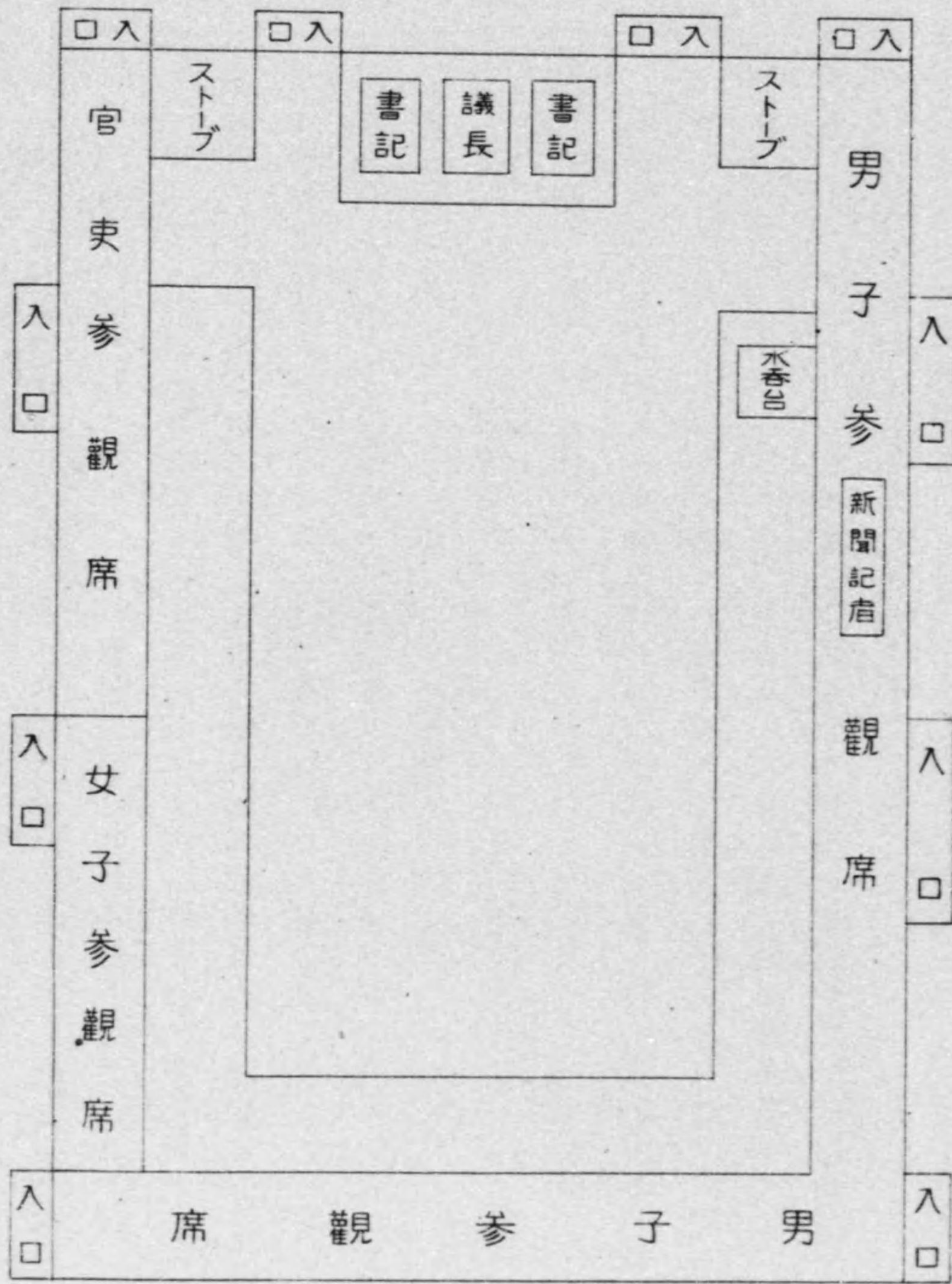
位置は富山市總曲輪なる今の富山市立圖書館の所在地で、正面は南方に向つて建てられ、議場の平面圖は左の如くであつた。



第二章 縣會の組織

工費は金壹萬壹千七百八拾壹圓五拾七錢貳厘（後年の修繕費を除く）で其の内譯は左の通りである。

縣會議事堂建築費（明治二十年度）	
本館建築費	金五千八百拾參圓貳拾錢四厘
小使並看守人溜建築費	金百拾九圓九拾錢八厘
敷地代並敷地内家屋移轉費	金參千九百拾七圓八拾貳錢
地盛地均シ費	金百八拾九圓八拾八錢七厘
門並周圍木柵石垣建設費	金九百九拾九圓六拾錢四厘
玄關前敷石費	金八拾六圓七拾貳錢
屋根瓦費	金參百貳拾五圓貳拾五錢四厘
草木植付費	金百圓六拾參錢
敷物代	金貳百貳拾八圓五拾四錢五厘
合計	金壹萬千七百八拾壹圓五拾七錢貳厘
縣會議事堂修繕費（明治二十年度）	
門内百二十八坪セメン叩	金百八拾四圓



圖面平堂事議會縣 十二治明 十工竣年



第二回の議事堂

同 上修繕費 (明治二十八年度)

キヤラコ張天井新設費 金貳百七拾七圓

電柱等建設費 金拾七圓貳拾八錢七厘

計 金貳百九拾四圓貳拾八錢七厘

總計 金壹萬貳千貳百五拾九圓八拾五錢九厘

該議事堂は、新築後十一年七ヶ月間三十七回の縣會が開かれて、明治三十二年八月祝融の災に罹つた。

第三項 明治四十一年竣工縣會議事堂

明治四十一年 大正天皇 皇太子として本縣へ行啓あらせらるゝの御内沙汰に接するや、本縣に於てはこれを幸機として縣會議事堂を建築し、これを先づ御泊所に充て奉るの計畫を立て、工費金拾貳萬參千貳百貳拾四圓參拾五錢參厘(附屬工事を除く)を明治四十一年度及び同四十二年度の兩年度に於て支出し、四十二年九月竣工と同時に、五日間長くも 殿下の御駐輦を辱うするの光榮に浴し、御寫眞をも拜戴した。同年十一月二十一日午前十時から落成式及び御寫眞拜戴式を舉行し、先づ第一鈴を以て御寫眞拜戴式を舉



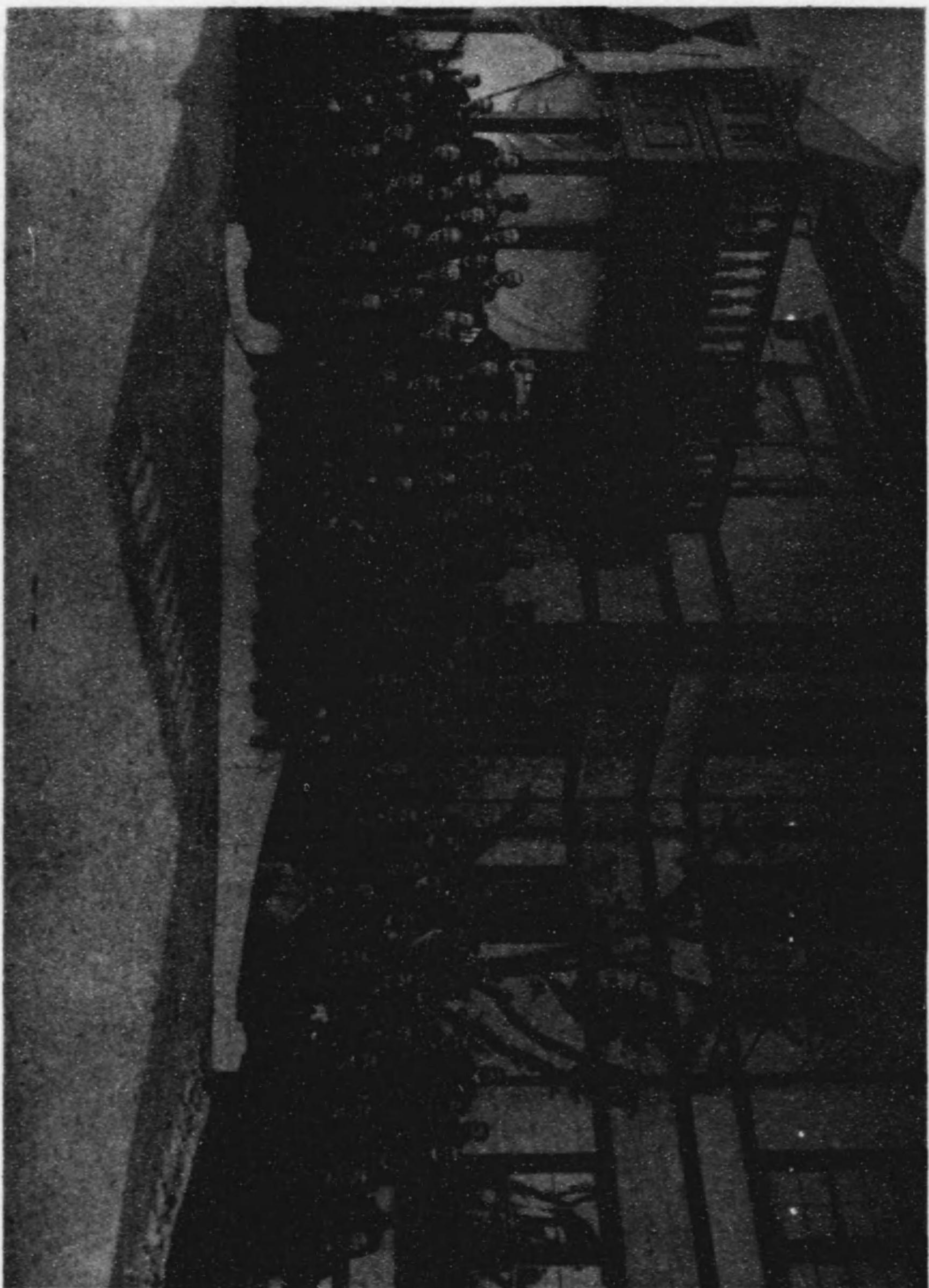
げ了つて第二鈴を以て議事堂落成式を行ひ左の如く杉村技師の工事報告、宇佐美知事の式辭、森丘議長及び來賓の祝辭があり、正午祝宴を開いて散會した。

## 工事報告

## 工事報告

本日富山縣會議事堂竣工式を舉げらるゝに方り、工事の梗概を報告せん。

本建築工事は明治四十一年七月、工を起し、本年四月本館を竣成し、其附屬建物は同九月を以て全部竣工を告げたり。本館建坪三百九十九坪五合、附屬建物三十坪、總建坪四百二十九坪、其半面はT字形に似たる配置にして、軒高は最高三十尺二寸、最高棟まで四十九尺五寸、同避雷針頂上迄五十五尺五寸を有する二層建の木造大厦にして、正面及裏面の兩翼を平屋建とす。其階下は大小十一室に、階上は八室に區劃し、四ヶ所の大階段と廊下とを以て各室交通の便に供す。議場は本建物の中軸に位置して、九十九坪を區劃す。附屬建物は本館に接して湯沸所、汽鐘室を建設す。本館の建物基礎は壁下一帯掘鑿を施し、生松丸太を打込み、全幅「コンクリート」にて打堅め、煉瓦と中國産花崗石とを混用し、「セメントモルタル」を以て疊積し、處々に鐵棒を植ゑ、普く土臺木を貫通緊結せしむ。又軸組二階腰胴小屋組等の構造の主要なる部分は、鐵材を混用結構し、以て風壓震災の豫防に備へたり。而して使用材料の主なるものは、秋田及飛驒産にして、小屋組



明 治 二 十 四 年 縣 議 事 堂 落 成 式 記 念



梁等は松材を用ゐる。階段は概ね樺を使用し、又裝飾用としては檜・桂・杉等を混用せり。屋背は陸前産の石盤瓦と米國製「マルソイド」を被覆し、棟木・谷・植等は亞鉛板及亞鉛引の鐵板を以て包み、雨露の浸害を豫防し、屋上八ヶ所に避雷針を設け、以て電撃の防禦に充つ。外部は胴蛇腹以下及平屋建壁共尾張常滑産の瓦を使用し、胴蛇腹以上は漆喰塗とす。柱・長押・窓框等の木部は「ペンキ」塗とし、内部障壁は議場を除き、盡く木製下地にして、白漆喰塗とす。議場・木製格天井・建具及階上貴賓室の建具等、木部は「リニス」塗とし、其他各室及廊下等に於ける建具の木部は「ペンキ」塗とせり。床は絨氈・倭織「リノリウム」を敷き、窓牖は羅帷・緞張を以て裝飾し、暖房法は安全と衛生と便利とを主とし、ウエフスター最新低壓蒸汽式を撰定せり。又外圍土堤には鐵柵を廻し、此延長百七十三間二分、本館裏側には通用門を設け、正面通路兩側には植樹を爲し、又左方空地に花園を設け、建物の莊重と相待て一層の美觀を添へたり。以上に要したる工費及内外裝飾費とを合せて、金拾參萬四千六百貳拾圓九拾貳錢參厘に達し、今や遺憾なく豫期の竣工を告ぐ。乃ち其梗概を報告すること爾り。

明治四十二年十一月二十一日

富山縣技師從六位 杉村博通



## 式 辭

本縣會議事堂廳舍新築工ヲ竣ヘ本日諸紳士ノ臨席ヲ得テ茲ニ落成ノ式ヲ舉グルハ本官ノ欣榮トスル所ナリ曩ニ本縣會議事堂ノ燒失以來或ハ學校舍或ハ縣廳舍ノ一部ヲ以テ臨時議場ニ假用スルノ窮境ニ在リ其不便甚ダ少シトセズ之ヲ以テ縣民等シク議事堂再建ノ急要ヲ唱フル多年ニ涉リシト雖モ水火災餘ノ縣財政困難ナルト戰後ニ際會シタルトニ依リ久シク建築ニ着手スルコトヲ得ズ然ルニ一昨四十年縣財政ノ小康ヲ見ルニ際シ計ラズモ東宮北陸行啓ノ内議ヲ拜スルアリ乃チ奉迎ノ準備ニ兼ネテ議事堂ノ復舊ヲ計リ繼續事業トシテ新築案ヲ提出シタルニ縣會ノ議決スル所トナリ工事亦豫定以上ニ進捗シ茲ニ完全ナル議事堂ノ設備ヲ了シ多年ノ宿望ヲ達スルコトヲ得且ツ本年 皇太子殿下本縣へ鶴駕ヲ枉ゲサセラル、ニ際シ開場ニ先チ御旅館ニ充テ奉ルノ光榮ヲ荷ヒ辱クモ御寫眞ヲ拜戴シ縣政史上ニ好個ノ記念ヲ止メタルハ本縣ノ光輝之ニ加ハルナク縣民ノ感激亦比スルモノナシ今ヤ此新議事堂ニ依リテ議政ノ廳舍備ハリ本官等當路ノ各員ト共ニ縣政審議上至大ノ便ヲ得タリ自今議政行政相俟テ益々其職責ヲ盡シ治道ニ勵ミ全幅ノ力ヲ捧ゲ縣政興新ノ前途ニ貢獻スベキナリ終リニ臨ミ工事擔當者ノ私益ヲ度外ニ措キ苦心經營短日月ノ間ニ複雜ナル工事を完成シ

タル勞苦ニ對シ深厚ナル謝意ヲ表ス

明治四十二年十一月二十一日

富山縣知事 宇 佐 美 勝 夫

## 祝 詞

縣會議事堂新築成リ本日落成式ヲ舉行セラル欣喜何ソ限ラン

議事堂類焼以來我が縣會ハ專用ノ廳舍ヲ有セズ隨時各所ノ空室ヲ假用シテ會議ヲ開キ議場體ヲ得ズ出入便ヲ缺キ官民ノ深ク之ヲ遺憾トセシヤ久シ然ルニ今ヤ地ノ便ト輪奐ノ美トヲ兼ネ得タル廳舍ノ新設ヲ見タルハ昔ニ多年ノ希望ヲ達シタルニ止マラズ亦以テ縣政ノ進歩ヲ表明シタルモノト謂フベク殊ニ本年鶴駕ヲ奉迎シテ千載一遇ノ光榮ニ浴シ無比ノ記念ヲ止メタルハ縣民ノ永ク感激措ク能ハザル所ナリトス本廳舍ノ構造タル地方稀ニ見ル所隨テ民費ヲ要セシコト亦少シトセズ本職等此光輝アル廳舍ニ於テ縣政審議ノ局ニ當ルコトヲ榮トスルト共ニ省ミテ縣民ノ負荷ニ背カザラシコトヲ期シ益々至誠忠實縣利民福ノ施設ニ對シ貢獻スベキナリ一言之ヲ祝ス

明治四十二年十一月二十一日

富山縣會議長 森 丘 覺 平







車置場買上費 金八拾圓

合計 金壹萬七千拾貳圓六拾壹錢貳厘

總計 金拾四萬貳百參拾六圓九拾六錢五厘

斯くして二十五年九月月間この議事堂に於て縣會の開かれしこと五十六回昭和十年八月新縣廳舎の一部に縣會議事堂の設けらるゝと同時に本議事堂は大正會館と更まり、縣會に關係なきものとなつた。

第四項 昭和十年續工縣會議事堂

昭和十年八月十七日富山市新總曲輪に於て新築落成したる富山縣廳舎に於ては其の中央部第二階乃至第四階に縣會議事堂を設け、爾後その所に於て縣會が開かるゝことゝなつた。今之が工事概要及び平面圖を左に掲ぐるゝことゝする。

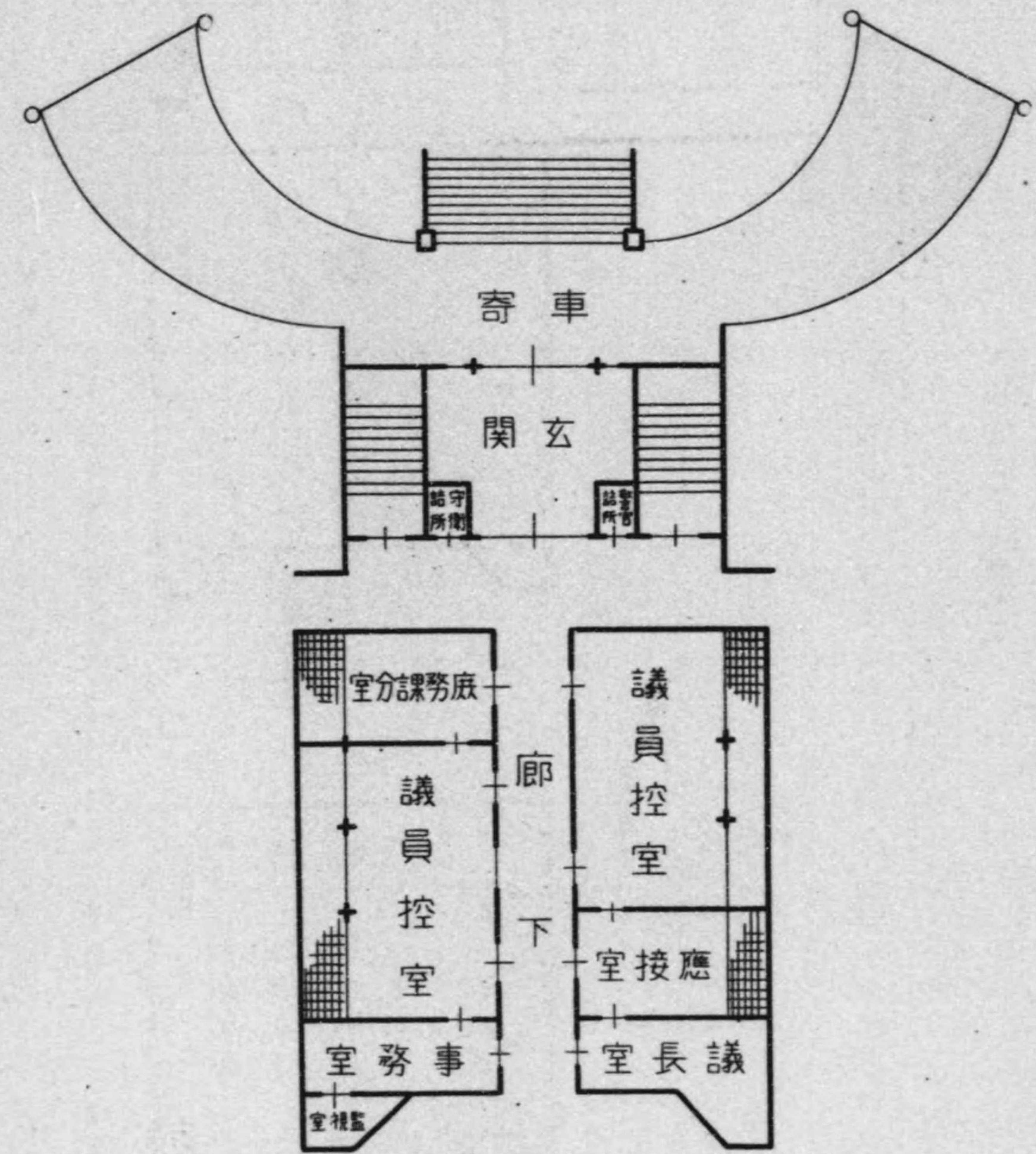
工事概要

- 一、位 置 本縣廳舎ノ中央部ニ位ス
- 一、諸室配置 一階 議員便所傍聽人便所下足場
- 二階 議場側玄關及守衛受付所



議長室 同應接室 議員控室 同應接室 (庶務課分室) 縣會事務室  
 三階 議場同附屬控室 參事會室 同應接室 委員會室 新聞記者室  
 四階 傍聽席同附屬控室 會議室 兼應接室 新聞記者室  
 此他各階共廊下階段室「ホール」アリ

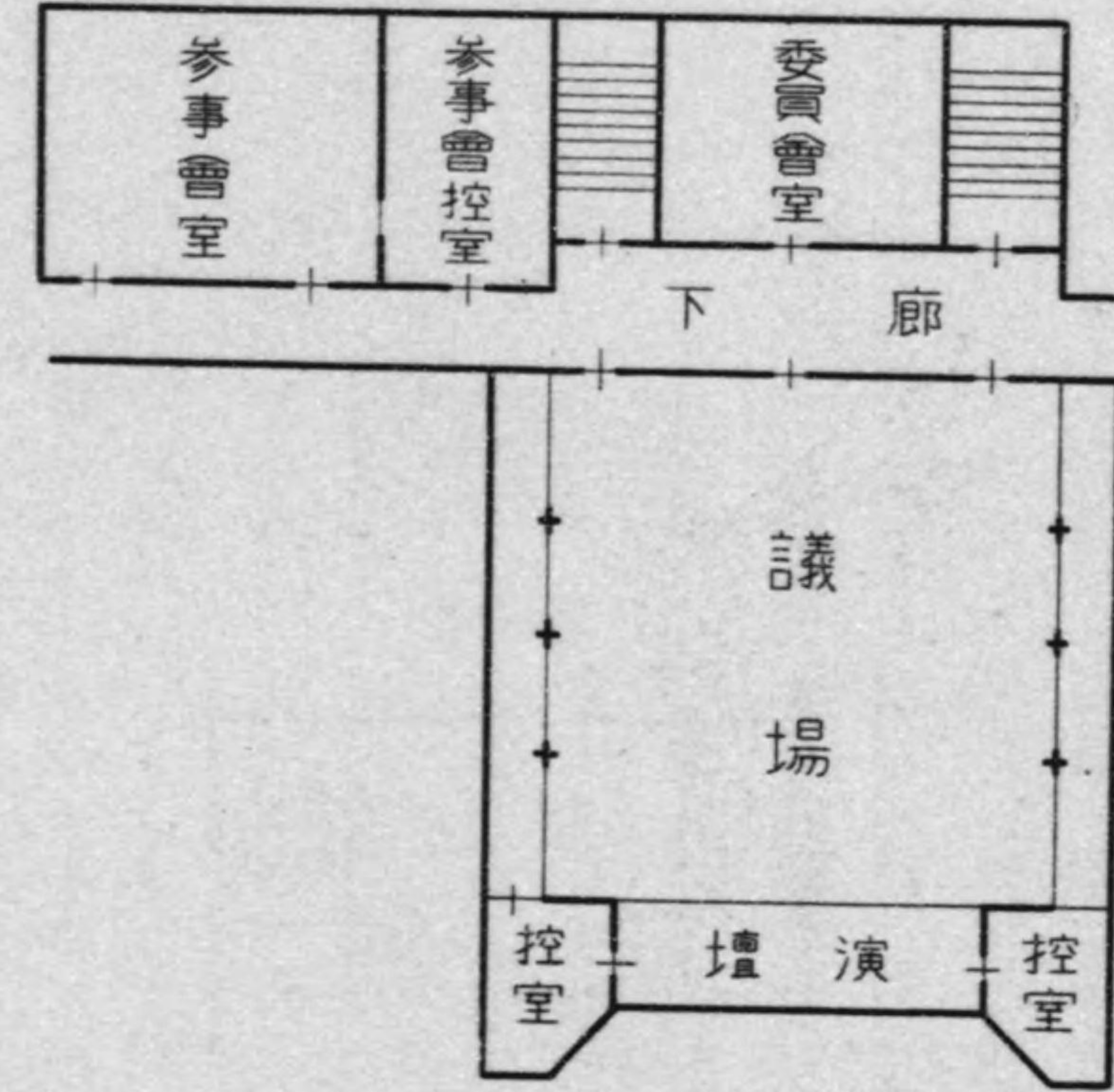
- 一、各階面積
  - 一階 二〇九六平方米
  - 二階 六九二〇平方米
  - 三階 八〇四八平方米
  - 四階 四八七七平方米
- 二、延面積 二、一九四一平方米 (八八三・一坪)
- 三、建築様式 近世式
- 四、議場幅員 二二〇〇米
- 五、建物高さ 扶壁上端迄 一六四〇米 (但シ中庭地盤ヨリ) 最高棟迄 二〇五三米 (同上)
- 六、階高
  - 一、二、三階共 四〇〇米
  - 四階 三一〇米



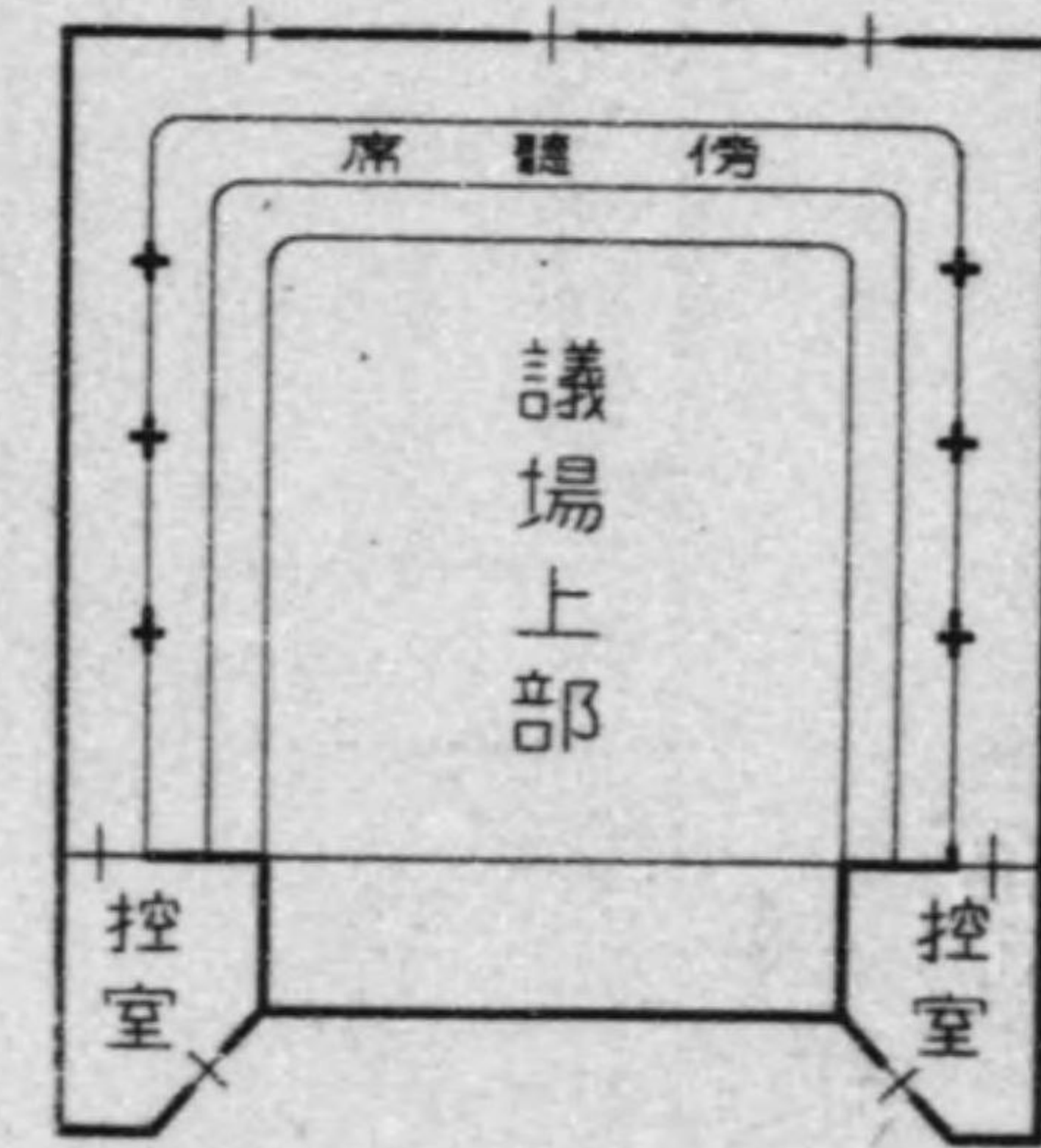
(階二)

(一其) 圖面平堂事議會縣 十和昭 工竣年





(階三)



(階四)

(二其) 圖面平堂事議會縣 十和昭年  
工竣

- 一、主體構造 大部分鐵骨鐵筋「コンクリート」造
- 二、外廻り仕上 窓出入口廻り庇鼻廻り柱型軒先等ノ出隅角「タイル」貼其他ノ部分人造石洗出仕上外廻窓出入口建具ハ總テ鐵製トス
- 三、内部仕上 主ナル室ノ内部仕上次ノ如シ

玄関廻り

- 床 金屬目地入「テラゾー」貼大理石中心飾付
- 腰 「テラゾー」貼
- 壁 「プラスチック」塗
- 天井 石膏彫刻蛇腹及中心飾ヲ有スル漆喰塗
- 扉 彫刻ヲ有スル「ブロンズ」仕上
- 欄間其他 「ブロンズ」仕上面格子
- 柱形 「テラゾー」貼「ブロンズ」仕上柱頭飾付
- 照明器具 「ゴールドブロンズ」仕上特種器具
- 議長室
- 床周圍 寄木張「ワックス」仕上中央部板張ノ上緞通敷



腰羽目 「タンギール」「ワニス」塗仕上「ラヂエーター」當リ「テラゾー」貼

建具造作 「ベニアドアー」トシ用材仕上共腰羽目ニ倣フ

壁 畫棧下壁紙貼

畫棧上「プラスチック」塗「ブロンズ」仕上面格子付「レヂスター」嵌込

窓 額縁及窓飾付

天井 漆喰塗

照明器具 「ゴールドブロンズ」仕上「ボールペンダント」「ケルドン」

型「グローブ」

議員控室參事會室委員會室及各應接室

床 「リノリウム」敷

腰羽目 鹽地「ワニス」塗仕上「ラヂエーター」當リ「テラゾー」貼

建具造作 「ベニアドアー」トシ用材仕上共腰羽目ニ倣フ

壁及天井 蛇腹「プラスチック」塗「ブロンズ」仕上面格子「レヂスター」

嵌込

窓 額縁及窓飾付

天井落子 漆喰塗

照明器具 「ゴールドブロンズ」仕上「ボールペンダント」「ケルドン」

型「グローブ」

議事堂

床 議場板張絨氈敷

傍聽席「リノリウム」敷造付連結椅子ノ下部人造石研出仕上段鼻上止「タイル」

腰羽目 獨立柱傍聽席手摺前面及建具造作「タンギール」材「ワニス」

塗仕上手摺笠木大理石「ラヂエーター」當リ「テラゾー」貼

窓 「タンギール」材額縁「ワニス」塗仕上窓飾付

天井窓 「スチールサツシユ」「アンバーガラス」嵌込

壁天井 「コルク」「ベインキ」吹付

照明器具 「ゴールドブロンズ」仕上特種器具



「ホール」

床 金屬目地入「テラゾー」貼三四階「ホール」中央部「タイル」貼

腰 「テラゾー」貼

壁 「プラスチック」塗

天井落子 漆喰塗

縣會事務室會議室新聞記者室

床 「リノリユーム」敷

腰 「モルタル」刷毛引「ペンキ」塗仕上「ラヂエーター」當り人造石

研出

壁及天井 蛇腹「プラスチック」「レヂスター」嵌込

建具造作 杉材「ペンキ」塗

天井落子 漆喰塗

便所

床 傍聽人便所目地入「モルタル」仕上議員便所「タイル」貼

腰 「タイル」貼

壁 「プラスチック」塗

天井 漆喰塗

一般廊下階段室

床 金屬目地入人造石研出仕上

巾木 人造石研出仕上

腰廊下 「モルタル」刷毛引「ペンキ」塗仕上階段室人造石研出仕上

壁及天井 蛇腹「プラスチック」塗

天井落子 漆喰塗

一、屋上仕上

防水層八層ニ「シンダー」コンクリート」打ち上陸屋根ノ部分ハ濕式石

綿入「セメントタイル」舗装議場上勾配屋根ノ部分ハ「モルタル」塗目

地切仕上トス

### 第三章 縣會議事 (明治年代)

縣會の議事に關する法規を制度別に摘録すれば大要左の如くである。



府縣會規則は發布後、數度の改正が施されたが、その最後に於けるものを掲ぐれば、(一) 縣會は地方税を以て支辨すべき經費の豫算及び其の徴收方法を議定すること、(二) 縣會は通常會と臨時會とに別つこと、(三) 會議の議案は總て縣令より發すること、(四) 臨時會は其の特に會議を要する事件に限り其の他の事件を議するを得ること、(五) 縣會の議決は縣令認可の上施行し、縣令は時宜に依り再議に付すること、(六) 縣會は毎年通常會の初に於て、地方税に係る前年度の出納決算の報告書を受け、縣令の説明を求むることを得、若し異見あるときは議長の名を以て内務大藏兩卿に上申するを得ること、(七) 通常會に於ては議員の内二人以上の發議を以て其の縣内の利害に關する事件に付建議を爲さんとするものあらば議決を経、議長の名を以て内務卿又は縣令に建議するを得ること、但し臨時會に於ては其の會議を要したる事件に限り建議するを得ること、(八) 縣會は縣令より其の縣内に施行すべき事件に付意見を問ふことあるときは之を議すること、(九) 縣會は議事の細則を議定し、縣令の認可を得て施行するを得ること、(一〇) 縣會は議員の内、召集に應ぜず、又は事故を告げずして參會せざる者を審査し、其の退職者たるを決するを得ること、(一一) 縣令と縣會との間に於て法律の見解を異にし、又は權限を争ふことあるときは双方より其の事由を具狀し、政府の裁定を請ふこと、この場合に於て縣令は其の議事若

しくは會議を中止するを得ることなどであつて、地方自治とは云へ、其の職務權限甚だ微弱なものであつたと云ふべきである。これ一般の政治知識に鑑み、また止むを得ざることであつたと思はれる。

府縣制に定むる所のものを記せば、(一) 縣の歳入出豫算を定むること、(二) 決算報告を認定すること、(三) 縣税の賦課徴收方法を定むること、(四) 縣有不動産の賣買交換讓渡受並に質入書入のこと、(五) 歳入出豫算を以て定むるものを除く外、新に義務の負擔を爲し及び權利の棄却を爲すこと、(六) 縣有財産の管理及び營造物の維持方法を定むること、(七) 其の他法律命令に依り縣會の權限に屬する事項を議決すること、(八) 縣會に於て議員中資格を有せざるものあることを發見するときは、其の決議を以て縣知事に通知すること、(九) 縣會は其の權限に屬する事件を縣參事會に委任するを得ること、(一〇) 縣會は官廳の諮問あるときは、意見を陳述すること、(一一) 縣會は其の縣の全部又は一部の公益に關する事件に付縣知事又は内務大臣に建議するを得ること、(一二) 縣會は議事規則及び傍聽人規則を設け、内務大臣の認可を受け施行すべきこと、(一三) 縣會は議事規則に比すれば、その權限が頗る擴張せられた。これ縣民は既に十八年間、前規則に依つて、自治制の訓練を経た上に、帝國議會も開設せられて、民權の伸張せられた結果である。



改正府縣制は發布後昭和十一年末迄六度の改正あり、その最後に於ける規定に就いて之を記載すれば、(一)縣條例及び縣規則を設け、又は改廢すること、(二)歳入出豫算を定むること、(三)決算報告に關すること、(四)法律命令に定むるものを除く外、使用料手数料縣稅及び夫役、現品の賦課徵收に關すること、(五)不動産の處分並に買受讓受に關すること、(六)積立金穀等の設置及び處分に關すること、(七)歳入出豫算を以て定むるものを除く外、新に義務の負擔を爲し及び權利の拋棄を爲すこと、(八)財産及び營造物の管理方法を定むること、(九)其他法律命令に依り府縣會の權限に屬する事項、(一〇)縣會は其の權限に屬する事項を縣參事會に委任するを得ること、(一一)縣會は法律命令に依り選舉を行ふこと、(一二)縣會は縣の公益に關する事件に付意見書を關係行政廳に呈出するを得ること、(一三)縣會は官廳より諮問あるときは意見を答申すること、(一四)縣會は議員中異議なきときは、選舉を行ふに指名推薦の法を用ふるを得ること、(一五)縣會議員は三人以上より文書を以てせば、縣會の議決すべき事件に付縣會に議案(歳入出豫算を除く)を發するを得ること、(一六)縣會は會議規則を設くるに當り、内務大臣の許可を受くるを要せざるること、(一七)會議規則には此の法律並に會議規則に違背したる議員に對し、縣會の議決に依り五日以内出席を停止する規定を設くるを得ること、等であつて、前の府縣制に對比すれば更に又一

段の職務權限が擴大されたことを認め得るのである。この權限擴大は改正毎にその歩を進めたものであることは言ふまでもない。

會議規則

縣會々議規則の沿革を記せば、石川縣會議事規則は明治十四年五月三十日石川縣通常縣會に於て始めて議定し、翌三十一日縣令の認可を得たものが嚆矢ではあるまいか。縣會受付心得、傍聽人心得も同時に之を定められた。富山縣設置後、明治十六年八月の臨時縣會に於て、富山縣會議事規則及傍聽人心得書が議決せられ、爾後屢、改正があり、大正三年通常縣會に於て富山縣會議事規則議決せられ、同四年二月二十八日内務大臣の許可を得て富山縣會々議規則が定められた。これが即ち現今の規定である。この規則は第一章通則、第二章議事日程、第三章會議、第四章動議及建議、第五章發言及討議、第六章決議、第七章委員及委員會、第八章會議錄及速記録、第九章秩序に分れ全文四十九條、外に附則一條があり、この時富山縣會傍聽人取締規則も定められた。

第一節 縣會の開閉

府縣會規則  
の開會

府縣會規則に於ける縣會の開閉は、當初通常會を毎年度三月に開くこととしたが、明治十五年第六十八號布告を以て、同十八年から十一月に開くことに改められた。これは會



計年度が從來七月乃至六月であつたのを、同十九年から四月乃至三月に変更せらるゝことになつた結果である。また臨時會は通常會々期の外、會議に附すべき事件ある時之を開いた。而して通常會の會期は三十日以内とし、臨時會は會期を定めず、共に縣令は縣會の議決を得て日限を延長し得ることゝした。之が爲に甚だしき會期延長の悪弊を生じ、明治十五年第六十八號布告にて通常會は三十日以内、臨時會は七日以内と限定せらるゝに至つた。會議の開閉は縣令の命する所で、議員半数以上出席せざれば會議を開くことが出来ず、會議の論議、國の安寧を害し、或は法律又は規則を犯すことありと認むるときは、縣令は會議を中止し、或は内務卿は議員の解散を命ずることを得た。

府縣制の開會

府縣制に於ては、通常會の會期を毎年一回秋季と改め、縣會は議員三分の一以上出席するにあらざれば、會議を開きて議決を爲すを得ざることゝし、議長は必要に依つて其の日の會議を伸縮若しくは中止するを得ることゝなつた。

改正府縣制の開會

改正府縣制に於ては、通常會の會期を單に毎年一回として、時期を定めないことになつたが、その後は多く毎年十一月十二月に跨つて之を開かるゝのが常例である。次に縣會を開くには議員定員の半数以上出席するを要することゝし、議員定員三分の一以上出席すべき舊制を改めた。また大正三年法律第三十五號に於ては、議員定員の半数以上より

請求あるときは、議長は必ず當日の會議を開くべきものとし、更に昭和四年法律第五十五號に於ては、縣知事に於て必要ありと認むるときは、三日以内縣會の會期を延長するを得ること、尙議員定員の三分の一以上より會議に付すべき事件を示して、臨時會招集の請求あるときは、縣知事はこれを招集すべきことを規定し、縣會の開會に關し、著しき新例を開いた。その後同十年法律第四十四號に於ては、縣知事に於て臨時縣會は場合により七日以内に會期を定め、尙縣會の會期の延長は通して三日以内に於て之を定め得ることゝした。

### 第一項 石川縣會時代の開會

明治十二年四月石川縣に於て府縣會規則が實施されてより、同十六年五月富山縣の分離するまで四年一ヶ月間、通常會五回、臨時會三回、合せて八回、本縣に關係ある石川縣會が開かれ、その内同十五年に於ては縣會解散の爲、新に議員選舉の上、通常會が兩度開かれたのである。而して開會日數の長かつたことは驚くの外なく、通常會は七十二日乃至百八十七日、臨時會は二十九日に及んだ有様である。左に之を表示する。

### 石川縣會

本縣關係石川縣會の回數  
開會日數の長さ  
石川縣會一覽



府 縣 會 規 則		年 次	通 常 縣 會	臨 時 縣 會	開 會 日 數	縣 會 議 長	縣 令
明治十二年	自五月二十六日 至七月二十九日休 自九月十三日再開 至十月十五日				九八	加藤恒 五月日就職	千坂高雅 三月三日任官
明治十三年	自五月二十日 至七月二十日				七二	米山道生 五月十日就職	
明治十四年	自五月二十日 至五月二十日 日未詳			自十月二十三日 至十一月二十三日	二九	未詳	
明治十五年	自三月二十八日 至五月三日止 五月十七日解散 自七月二十六日 至七月二十二日(續繼)			自五月二十日 至五月二十日 日未詳	同	同	
明治十六年				自四月三十日 至五月二十日	一五〇	河瀬貫一郎 七月二十六日就職	岩村高俊 一月十九日任官

第二項 置縣以後の開會

富山縣會の  
回数

明治十六年五月富山縣が置かれてから、昭和十一年末に至るまで、五十二年八月月間、通常會は五十六回、内明治十八年には年度變更の爲、同二十八年には縣會解散の後を受けて、普通以外に各一回づゝの開會を見た。また臨時會は七十四回、内明治二十三年には四回開かれ、次に三回開かれたのは八ヶ年、二回は十三ヶ年、一回は二十ヶ年、更に開會しなかつたのは十二ヶ年で、通常臨時の會數を合すれば百三十回である。開會期日は既に限定せられた結果、規定以外に會期を延長する弊は其の跡を絶ち、また開會及び閉會は何れも謹肅なる式を擧げ、知事以下の屬僚及び議長以下の議員は禮服用これに臨むことが恒例である。殊に置縣後約十年間は二三の例外を除いて閉會式は閉會の翌日に行ふことになつてゐた。

因に、昭和四年の通常會に於て、會期三日を延長して三十三日の開會を見たのは法律改正の結果である。而して舊府縣制時代までは、通常會及び臨時會に各別の番號を附して第十三回富山縣通常縣會、第三十回富山縣臨時縣會等と稱へ、又は議案所屬の年度名を附して、明治何年度通常縣會等と稱へ來つたが、改正府縣制後は自然其の稱呼が用ゐられぬ